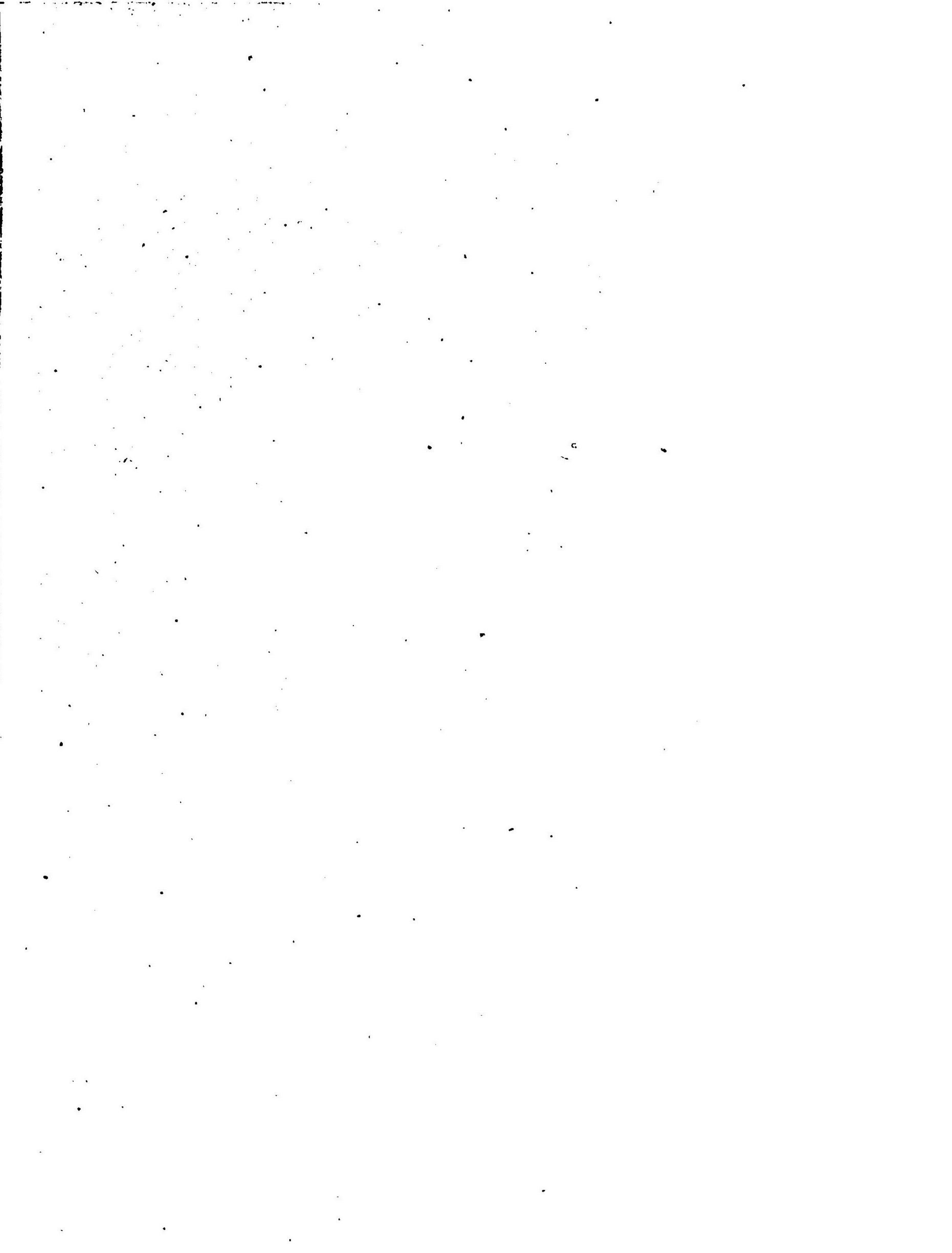
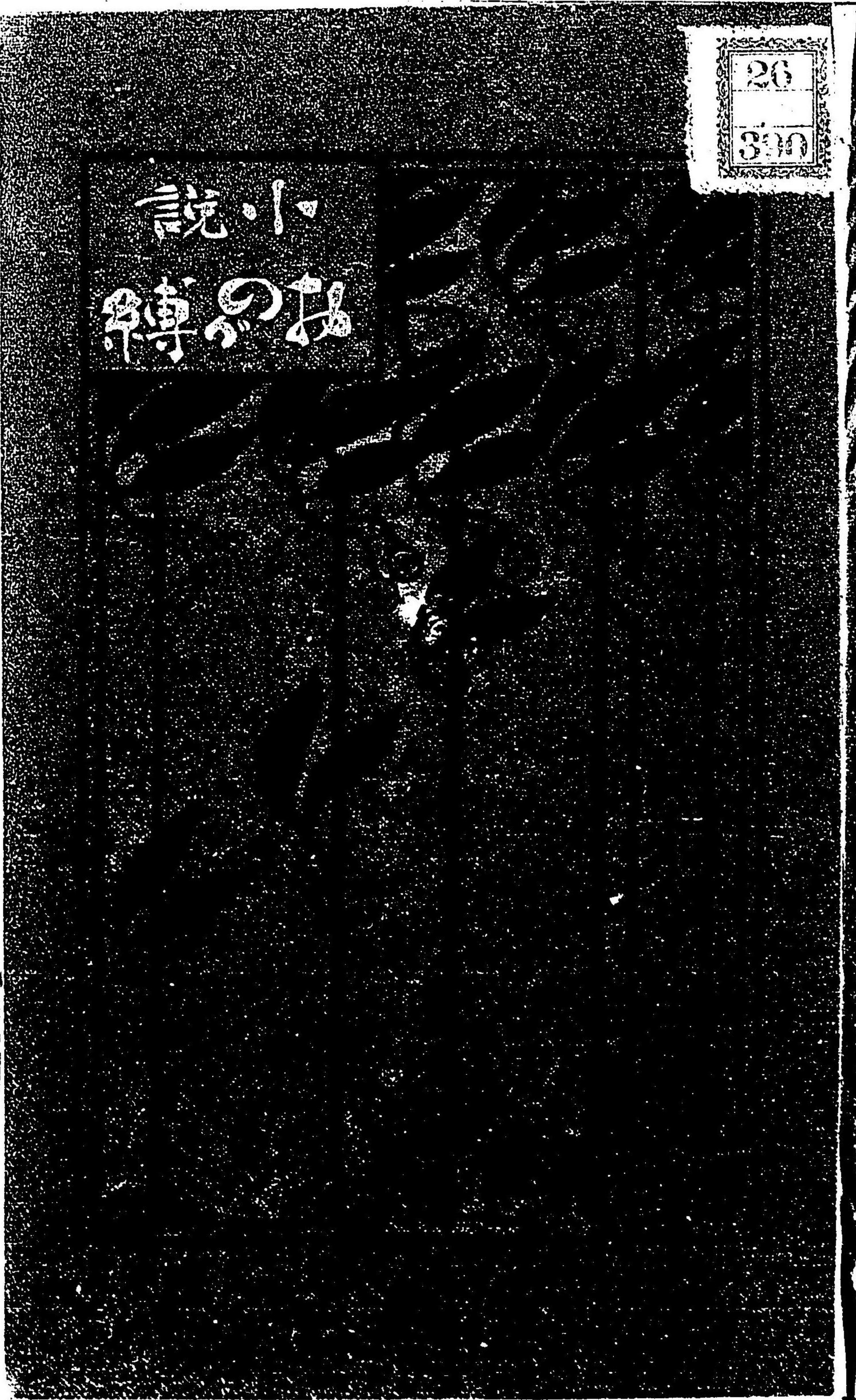
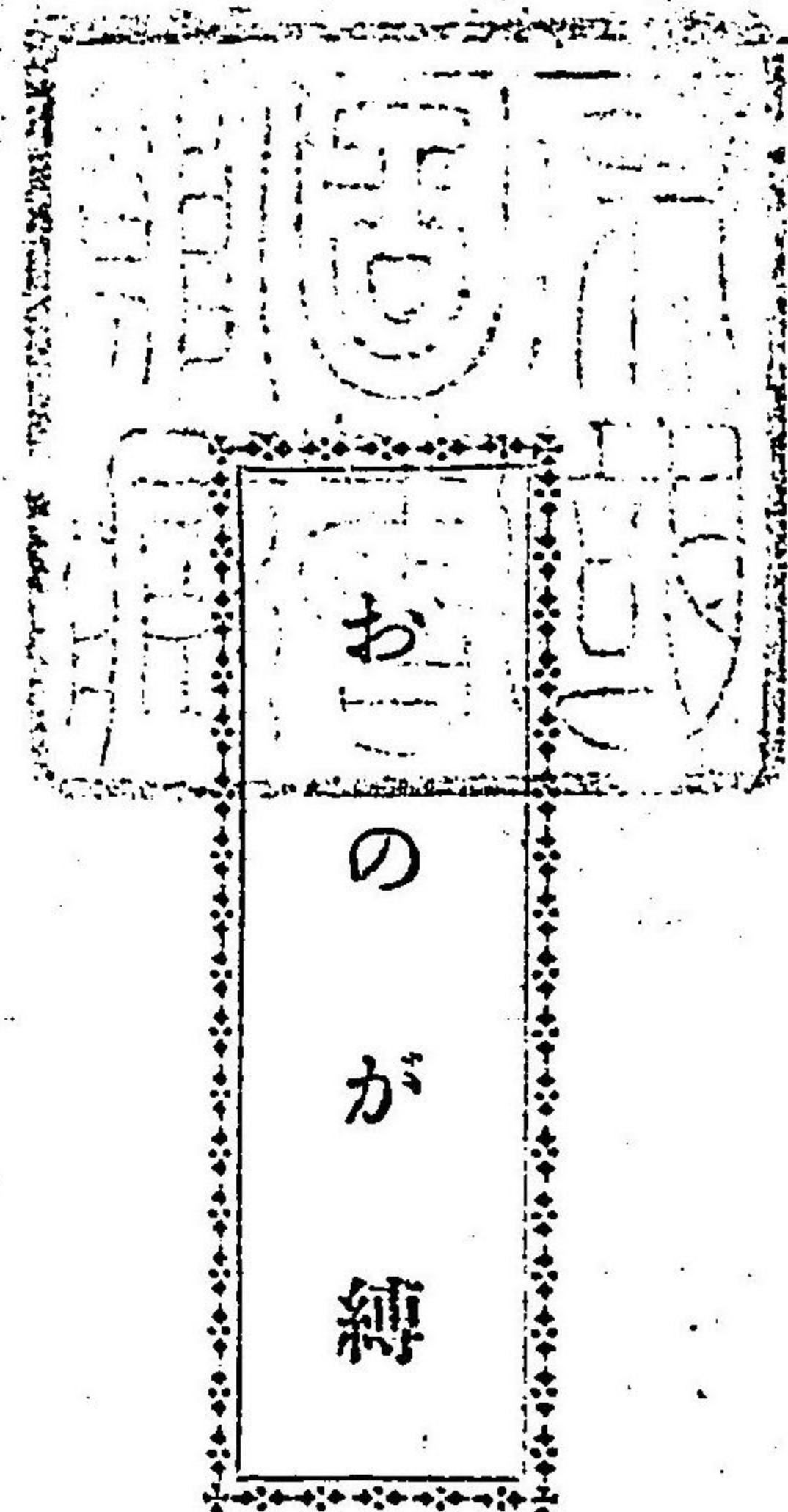


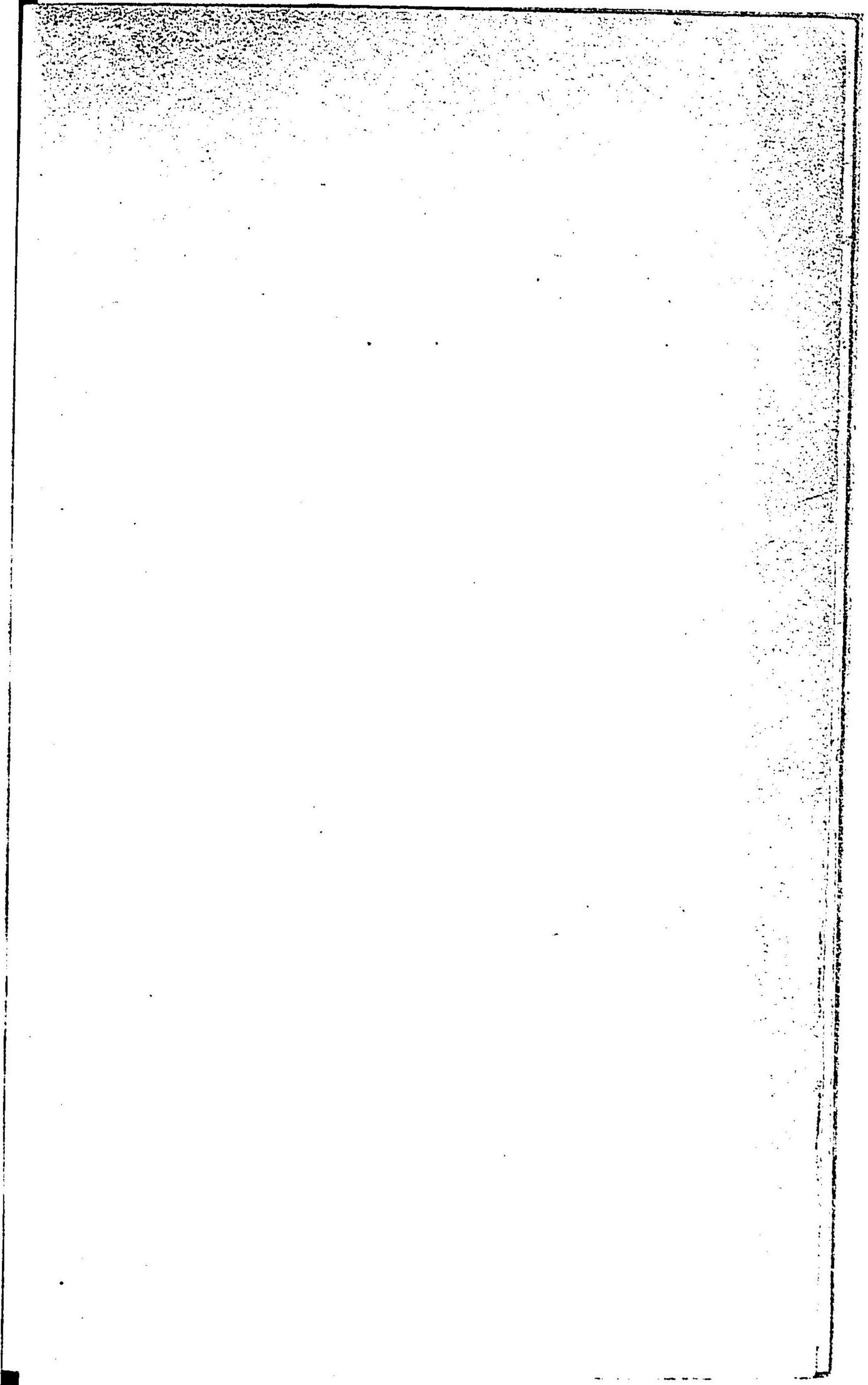
26
300

小説
おのづか



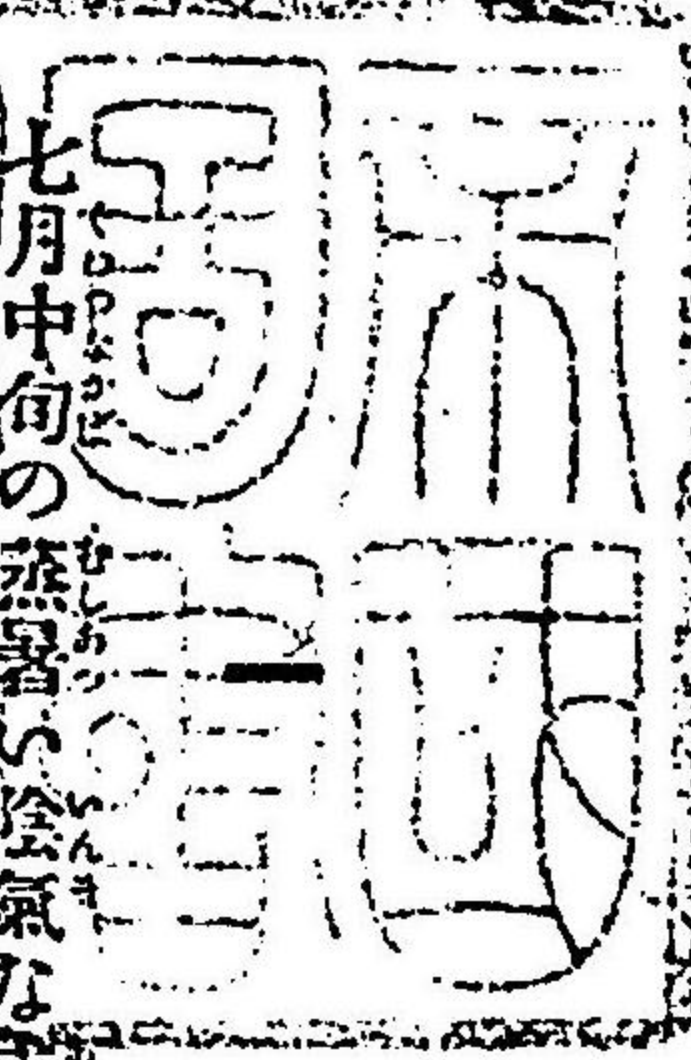
26-390







おのが縛



徳田秋聲

七月中旬の蒸暑い陰気な或日のこと、糠のやうな小雨が降つてゐるのに、傘も持たず、
鍔の垂れた麥稈帽を阿彌陀に冠つて、板つべらのやうな薩摩下駄を黒い骨ばつた大な足に
穿いた人の青年が、溢れて出る群衆から少し傍へ離れて、上野のステイションをヒヨロ
ヒヨロと出て来た。

ズラリと駢んだ車夫も、誰一人此青年には聲をかけやうとも爲ぬ。青年も亦彼等に用は
無いらしく、ズツクの靴と櫻のステッキとを左の手に提げて、泥濘の中をベチャクチャ
ンと電車の軌道近くまで出て来たが、其處で些と歩を停めて、驚いたやうな臆病らしい目
を張つて、キヨロ／＼四邊を見廻した。年は二十三ぐらゐるか、色の淺黒いのが、營養不充
分と云ふ形で、何となく血の氣の薄いのには、長途の汽車で、煤烟を浴びた故か、薄汚く、

んでも居るやう。けれども切の好い目に、濃い眉も一文字なので、鼻の骨が心持爽やかに居るやうだが、決して低くはない。髪は被さつた額が、些と陰鬱にも見えるが、其は旅疲れの爲た目の左右曇然してゐるにも由らう。骨格は細いと云ふ方ではないが、身長はヒョロリとして、胴が少し屈み加減に癖つけられ、手足は長いけれど、鈍さうにも見えぬ。體に着けてゐるのは、縮縮の夏シャツに白紬の單衣物で、小倉の袴の紐を總體低く緩く下胴に締めてゐる。些と見ては、支那の留學生と間違へれらさうな風體でゐる。

「一體何の方角へ行つたら可いんだ？」

彼は憊うも思案してゐるらしい、左の腕の衣を少し掻揚げて、手袖で額の汗を拭いたが、何如にも當惑らしい目を光してゐた。其時此邊まで溢れた一人のヨボくの老人の車夫が氣を利かして、横合から聲かけた。

「本郷まで何如さま。」

「うむ、本郷………」青年は老車夫の顔に昵と目を注いだ。

「お安く参りますが、乗つて入らつしやい。」

「いや、車には乗らんけれど、然し………」と右の方を顎で構つて、「其本郷の方は此

方へ行くのかね。」

車夫は黙つて、悄悄した目のうちに笑つてゐるかと思ふと、急に傍を通過ぎて行く日和下駄の田舎風の内儀さんの後から、尾いて行つて了ふ。と、青年も極悪さうに歩出したが、レールを突切ると、屋並に沿いて、旋て廣小路の方へと出た。もう午後の六時過ぎて、薄すりした日影が、何處か水氣の弱いところを見つけて、湯島の邊から廣い此の街の片側、ベシキ塗の建物などに仄かに反映してゐるばかり、柳の蔭はもう薄暮の色に包まれかゝつて、軒燈の光が漸く力を有つて来る。街路は今が一時雑沓を極める盛で、種々様々の雑音が、遠く近く、鋭く緩く混交に聞える。目間苦しむほどの傘の影、往さ來るさの人、車、荷馬、自轉車、其熱鬧のなかを彼は大股に、旋て三橋の袂まで來ると、不意と立停つた、而してステッキと右の脚とに體を支へて、多時往來を續めてゐた。目のうちには、何うやら一種の暗愁の影が宿つて來て、此まで威勢よく來た力が、遽に脱けても了つたやうに、茫然と立つてゐた。

何を考込んでゐたのか、物の十分餘も經つた時、青年は不圖深い息を爲て、右の脚と左の脚とを交替さしたるが、其沙に、

『無論兄の居所を捜すのさ。』と吐出すやうに吐いた。

其聲が案外高かつたので、前を通つて行く發被腹掛股引に高い下駄を穿いて、番傘を降した男が、吃驚したやうに振顧ると、其ま、立停つて胡散らしく青年の様子に目を注いだ。其に氣が着くと、彼は再びノック動き出したが、此熱鬧から脱れやうとして、方向を池の畔の方へ取つた。レールを突切らうとする途端、轆轤と石の上を凄じく駆けて来る前後二臺の車に叱咤せられて、面喰つて、急いで往來へ出やうとして狼狽氣味になつたところへ、劇しい電車の警鈴が連鳴つて、同時に、

『危いッー。』

と呼ぶ聲が頭上から落せかゝつたと思つたが、もう及ばなかつた。彼は今一步で線路の外へ出やうとする最後の左の足を引く其刹那不圖目を舉げると一緒に、バツタリ大地に仆つたので。

電車が三間ほど先で、直と駐つた時分には青年の高い體も、再び轟と起上つたが、急に歩出しさうな氣色もなかつた。

二

一時間の後彼青年は、下谷の區醫、仲町の廣谷醫院の診察室に、赤い毛に深々と脊を埋めて、寐臺に腰かけて居た。

看れば額から左の目尻にかけて一箇所、左足の踵から脛にも一箇所細帯を施されて、顔は蒼白め目の色も悪い、多少腦貧血でも起したやうの氣味もある。

電氣燈の直下の、圓い卓子に倚つて、深緑の楓の盆栽の横から青年を見ながら、軽く煙を濃い口髯の中から吐いてゐるのは、院主廣谷醫學士で、二夕皮目蓋の、頬骨の高い、平顔の紳士である、書生風の白緋に黒緋の羽織を着て、醫者がこんな患者を見る時の、あの冷かな様子も先づ無い。此時書生が隅の方の卓子で、患者の名簿を擴げてゐたが、談話が不圖途切れて居たので、此方に向いて、

『お名前とお所を……。』

『僕ですか。』青年の聲は少し戦へてゐた。

『は、然うです。』

「僕は越後中頸城郡……ですが、籍は他に在るのです。原籍を云ひませうか。」

「いや、其で宜しい。」

廣谷院主は、體に合しては細い聲を出して、書生の方を見た。

「お名前と御年齢は？」

「緑川芳雄といひます。年は二十三です。」

少時してから、書生は薬局の方へ出て行つた。院主は此時憶出したやうに、

「先づ、其で大したことも無からうと思ふが、然し明日でも明後日にも、復お出なす。」

「は。」

「然し跛足曳いて行く譯にも行くまい。腕車を僦つて上げやうかな。一體何處まで行くか。」

「本郷邊ですが、然し格別痛みもしませんから。」

「本郷は何の邊か、方面によつては随分遠い處もある。」

「いや、それは是から搜さうと云ふんです。」

院主は濃い眉を釣上げて、とつと青年の顔を見たが、目のうちに笑を浮べて、「ぢや處が

解つてゐないので？」

「然です。」

「暢氣な人もあつたものだ。だから君、電車などに曳かれるのだ。一體それは親戚かね。」

と院主は多少好奇心に釣られる形で、笑ひながら卓子に片腕ついて、益緑川の面を覗めた。

芳雄が何とも返事を爲さないで、茫然顔を眺めるので、院主は重ねて、「處が解つて居ない

のぢや、なか／＼知れる氣遣はないよ。其とも著名の人とか、大な商店とか云ふのかね。」

「少しは知つた人もあらうと思ひます。學士ですから。」

「學士だつて君……」と廣谷は嘲むやうに云ひかけたが、急に、「君と同姓かね。」

「同姓です。」

「緑川眞澄と云ふのかね。」

「然うです。」

「何、然うだ？！眞實に？」廣谷は、思つて試に訊いて見た事が中つたので、少からぬ興味を感じた。

「は。」と芳雄は頷いた。

『それは不思議だ。緑川なら萬更知らん間でもないが、して何云ふ御親戚筋かね。』

『實は僕の……』と芳雄は言ひかけたが、遽に氣を替へて、『僕も初めて面會するのですから。先方は何にも知らないでせう。』

『然うだらう。緑川が孤獨の身の上だと云ふことは、僕も薄々聞いたやうにも思ふ、が然し其は不思議だ。』

芳雄は急に元氣づいて、目も多少冴えて來た『ぢや今でも御交際なさるですか。』

『いや、近頃は頓と會ひません、職業が違ふのに、お互に忙しくもあるし……』と言つて、廣谷は一層打釋けた様子になつて、卓子の上の團扇挿から一つ團扇を抜きながら其を弄つて、『尤も妻君を迎へてから些と會つた。然やう、あれは去年の秋だつたな。』と電燈を見上げる。

少時してから、太息を吐いて首を傾げて『いや、苦學した男だ。』と呟いて、頽然と椅子の後に身を持たせかけた。

『處を御存知ならば、切望……』

『然う。』と廣谷は首を捻つて、『無論直さ知れる。然し、然うと解れば、急ぐ必要もなからう。』

らう。』

『は、然し會つてくれませうか如何ですか、其すら解らない位です。』と芳雄は淋しい顔をして、『一體如何云ふ人でせうか。』

『如何してな。君が知つてゐる筈ぢやないか。』と反問したが、思返して、『其は極好い人物さ。自分が苦勞してゐるだけに、此度同情もあるだらうよ。僕は非常に懇意と云ふ譯ぢやない。然し今でも會へば、おい君、如何したと云つたやうな間なんて、何だか他人のやうな氣は爲ない。餘り友人も爲ささうなんだが、然程の偏屈ものとも思へんね。まわ、極真面目な、洒落一つ言はん男で、學校にゐる時分、學資の餘り豊でない連中が寄合つて自炊生活を爲てゐた時など、先生は何時でも机に向つてコッ／＼本を讀んでゐる。其組は誰も同じだつたが、殊に緑川君は困つて居たと見えて、一年休學した事などもあつた位だ。』青年の目は此時熱心の色を有つて來た。

『而して、英語の教師で地方へ行つて居たが、其時さ、僕が聞いて非常に氣毒に思つて、早速家庭教師の口を捜して、呼戻さうと爲たが、地方の學校へ世話した人に對して、其では濟まんと云ふので、また左も右一年は田舎に引籠つてゐたのだ。然し其から僕と懇意に

なつて、お互に一身上の相談を爲る場合も出来たやうな譯だ。」

「始終そんなでしたか。」

「然うね。まあ随分苦學の方だつたね。」

「阿母さんが有りませうか。」

「阿母さんかね。さあ、其が卒業の二年程前に亡つて了つたんだね。」

「亡つたんですか。」

「と云ふ話だ。實に氣毒な事を爲たものさね。緑川君も、其を非常に遺憾に思つてゐるらしい。」

「と廣谷は沈んだ聲で言つたが、「さあ、君は其の阿母さんを知つてゐるのですか。」

「いや然うぢやないんです。」

「それも知らない。ぢや餘程疎遠になつて居たのだね。」

「は、然うです。」 芳雄は伏目に爲つた。

「何でも極寂寥な身の上だとは謂つてをるが……君が行けば、定し悦ぶことだらう。」

「如何ですか、まあ一度會つて見やうと思ふです。其で今は何を爲て居るのでせうか。」

「矢張教師さ。今歳の春だつたか、博士論文の材料を集めてゐるとか云ふ風評だつたが、

其後如何したかね。熱心な男だから、必ず成功するだらうが、……。」と言つて、

廣谷は何か考込んだ。

少時してから、「若し今夜行くなら、腕車を僦つてあげるから……。」

「いや、杖に掴つてポツ／＼歩いて行きませう。僕はもうお暇します。非常に御厄介に爲りました。」

廣谷は憫むやうに其の顔を見たが、「逆も行けは爲ないよ、亦當分のうち歩いて貰つては

困る。」

「然ですか。」と芳雄は起ちかけて、復寐臺に腰かけたが、如何にも困つたと云ふ顔色を爲る。

「まあ待給へ。」と廣谷はベルを押して書生を呼んだ。書生が入つて来た處で、彼は緑川

文學士の住所を検べる事と、腕車を僦ふ事とを命じた。

「其からね。」と後へ捻向けた體を此方へ向けて芳雄に、「君は飯は未だらう。……濟

んだ？遠慮することはなし。」

「いや眞實です。」

「いや眞實です。」

「ぢやね、少し膾炙血を起したやうでもあるから、葡萄酒でも然う言つてね。」
書生が出て行つてから、芳雄は氣の毒さうな顔で、怔忡して居た。一體明日の麵飽を買ふ金さへない心細い身の上なので、窮して居るのは、其風體でも知れやう。始終何等か不安らしい目色を爲て、相手が談話を爲てゐる間にも、動もすると自分の事が心配になつて考込んで了ふくらゐるので、意ひがけぬ醫師の親切に出會つては、幾ど不思議に思つた。此時葡萄酒を持つて書生が再び入つて來たが、同時に電話で往診の依頼があつたので、廣谷は直に出て行つて了ふ。芳雄は二杯ばかり葡萄酒を飲ひと、始めてホンノリ目の縁が紅くなつて、氣持も漸く明瞭して來た。
『あゝ、あの醫師は幸福らしい！』と肚裡で然う思つて、自分にも始めて幸福の影を望んだやうな氣が爲たが、然し其は唯の一時であつた。

三

芳雄の兄眞澄の住居は今白山御殿町なので引越して來たのは、去年の新婚當時である。家は羽目板も未だ黴むに間もない新築だが、門の扉がもうよんぢりして居る。緒土の庭には、ひよろ長い立木が五六本、圍は黒板塀に圍はれて、何となく落着の悪い家だ。が、二階二室は些と洋室がかつた造作で、杉の天井も高く、窓の工合も好く出来てゐる。
丁度午後の六時半頃の事。日は既う大塚の方へ落ちて了つて、今まで紅く彩どられて居た雲も何時の間にか寂しい薄い藍色に滲つて、濃い森は夕靄のなかに、ぼやけたやうに輪廓ばかり見せてゐる。雨は今朝から揚つたのであるが、風は未だ何處か濕氣を保つて居るやう。

此時二階の書齋に、窓近く椅子を取つて、しんみりと談話を爲てゐる二人の女があつた。階下は一體に不愉快な部屋ばかりなので、客と云ふ客は大抵此へ上げられるのであるが、此とても風が吹通してゐるばかりで、部屋の裝飾も然して樂くも出来て居ない。唯極めて暗い森の夜景の油繪の大額と、低い書棚のうへに据ゑた老婆の大きな石膏像とが目に着く

だけで、後は椅子や卓子や無上に本を詰込んだ本箱が不規律に置かれてゐる。雑誌や新刊書の散かつた卓子に、斜になつて坐つてゐるのは、眞澄の夫人漣子で、年は二十三……四とはなるまじき瘦方の女である。身には雨垂緋のモスリンの單衣に、利久茶の博多と淡墨模様の縮緬の腹合をきちんと締めて、細りした首に、小さい、引締つた伶俐さうな顔をしてゐる。今一人は滋野と云ふ漣子の妹——其實は少しの血筋だも引かぬ——であるが、此はぼつちやりした小軀の廂髪である。縞の紗のリボンをふわりと着けた豊かな髪に、肉は較厚いが、色はくつきり白く、濃い眉と二皮目とは鮮やかに、金を埋めた前歯が、笑ふ度愛苦しう唇から見えるのも、然して氣にはならぬのである。着物は荒い井桁緋の袷に白襟を見せて、袴を着けてゐる。

桃がひと皿、綺麗なガラスの皿に盛り立て、塗盆に載せてゐる。妹は思出したやうに、楊枝で其を一片内輪に食べながら、手帕で口の側を拭いて居たが、先刻からの談話が、其から復讐さ出した。

「……缺點を言へば、其は誰にだつて多少は有るんですわ。其うちで、御兄さんなどは比較的少い方だと思ひますわ。ですから精々其の好いところばかり見るやうにして、其

で満足してゐた方が好いぢやありませんか。」

「然るは行かないわ。」と妹の漣子は、妹より調子が浮いてゐる。加旃何だの我儘の氣質を持つてゐるらしいので、人の言ふことを、實際に玩味して見やうと云ふ注意と熱心とが乏しいかのやうに思はれる。

重ねて漣子は、「夫婦となれば、然うは言つてゐられませんか。一生苦樂を共にしやうと云ふ其大切な相手なんですもの。」

『それも然うね。』と滋野は逆はず口のうちに咄いた。「ですけれど、姉さんが那樣ですと……折角御結婚なすつたばかりで、と力なげに聲を途断せて、心配さうに姉の顔を打成る。

「眞實に然うよ。」と姉も何か言はうとしたが此も急に伏目になつて、ほろりと爲る。

妹は一段狎々しい調子で、「ですけれど姉さん、先刻からのお談では、格別此がお兄さんが悪いと云ふ處もお有なさいないわね。」

姉は目を丸くしたが、「それは然うですともね。何しろ眞澄だつて學士の肩書のある人なんですもの、大酒飲と云ふのでもなければ、不品行だと云ふ譯でもありませんわ。又口が

荒いの、舉動が粗暴だなどと云ふ事もありませんわ。だけどね……、と躊躇つて、不圖何とはなし顔を赧めた。

「それに、愛情などと云ふことも、充分解して在しやるんですもの。」妹は言足した。

「然うね。決して冷淡な方ぢやないのよ。」と之も亦言足す。

「それなのに……。ぢや矢張、職業が氣に加ぬとか、理想が一致しないと云ふやうな點なんですか。」

姉が悶の色を目に見せて、屹度口を噤んでゐるので、滋野も其まゝ口を噤んだ。

良久あつて漣子は、「其も一つは私が我儘なせうよ。松尾さんだつて……。」と迂濶口を迂らして、ハツとしたやうに聲を吞んで妹の顔色を候つた。

滋野は案外平氣で、「松尾さんには、尙缺點がありますわ。」

「然かも知れないわね。」

「松尾さんは初めから私……。」と滋野は甲走つた高慢な調子で言つたが、我と嘲るやうに笑つて、「あの方なんぞ、世のなかに大望を持つてゐる方なんですもの。だから菱沼の家が零落すると看ると、不意と舵の方向を變へて、其は随分あんな事にかけては外交

家なのよ。」

「それは爲方がないわ。あの方は政治家なんですもの。」

「政治家だつて那樣輕薄な……。」と滋野は何か言ひさうにしたが、不意と口を噤んで了ふ。

姉が、「滋野さん、私あの御飯の支度するから、貴方待つて……。」

「私？さうね。もうお暇にさせうか知ら。」

姉は不本意さうに、「あら、然う言はないで、お夕飯を食へて行つて頂戴な、散々可厭な事を聞いた埋合せに、私御馳走しますから。」

「然う！」と言つたが、嫻然ともしないで、何か考へてゐる。

「それとも阿母さまが待つて在つしやるならば……。」と言つて漣子は拵しさうに、妹の顔を打成る。「ね、久振で私フライでも拵へて見せせうよ。丁度好い材料があるから。」

滋野は其でも物思はしげな顔で、目のうちに一種幽愁の影さへ宿してゐる。

漣子は心配さうに、「貴方何心配してゐるの？え、私の事？」

「それも有るし……。」と滋野は初めて、目を姉の顔に移す。

『私のことなら、もう決して心配しないで下さいよ。口で言ふほど、私だつて思つてやしませんわ。唯、滋野さんだから、言つて見たまでなのです。阿母さまにも、此事は決してお話ししないで下さいねえ、可くて。』

『え、それは……』と滋野は些と姿を崩して手帕で額のあたりを拭ふ。

『眞實に餘計な心配さして済みませんでしたわね。』

此時邊に門の鈴が揺れ出したので、二人は一同に耳を澄した。大方眞澄が歸つたのであらうと、滋野が衣紋を繕へば、妹も身を起しかける。が、其は主ではなかつた。

玄關へは、直に此頃代つて来た十五になるお美代と云ふ女が出た。間には僅か三疊の書生部屋があるばかりなので、客の大きな聲が筒脱に此方へ聞える。其は如何にも若い爽やかな聲音であるが、漣子の耳には頓と昵みがないのである。

少時すると、お美代は座敷の入口まで来て其處に屈んだ。

『あの、矢張緑川さんと仰やる書生さんが……』

漣子は訝しみの眉根を寄せて、妹と顔を見合した。

『緑川ですつて？ 其だけでは解らないわね。そんな親戚のあるやうなお話も聞きませんで

したよ。もつと善くお聞き申して御覽なさい。お留守の事も然う言つたの。』

『は、然う申しましたらば、直にお歸宅のやうなら、お待申しますと然う仰つて……』

『だけど、甚麽方だかね。』と漣子は首を傾げたが、『まあ可いわ。私が今出るから。』

玄關へ出て、私と漣子の横から顔を出して見ると、格子戸に左の手を支へて、右の手に麥稈帽子を掴みながら、體を斜にして往來の方を見て、二十二三の體の大な青年が突立つてゐる。

『入つしやいまし。』と聲かけると、

『あッ、』と言つて振顧く。

『誰方で在しやいますか、唯今眞澄は留守でございますが、何ぞ御用ならば……』

書生は些と考へて、『いや差當つて用事があると云ふ譯ぢやないんですが、然し是非會つて……』と言つたきりて俛いて了ふ。

少時してから漣子が、『失禮でございますが貴方はあの、眞澄の御親戚でも在るのでございませうか。』

書生は突如顔を振上げて、『まあ……然です。』

『では、あの、田舎の……』

『然うです。然し田舎と云つても、僕は越後の方ですから。』

越後とは亦、異つた方面に親戚があつたもの！と漣子は竊に驚いたのである。其も其筈、眞澄の郷里は確に備前で、其土地にこそ伯父とか叔母とか住つてゐると聞いたが、其すら遠近頭身のうへ話を爲た序に、些と洩したばかりで自分も確とは記憶して居ないからである。越後に親戚が在るなどは、吠にも出した事がない。

然し此青年の言ふ事が、豈夫嘘とも思はれぬ。又騙でもするやうな男とも見えぬ。但眞澄は、是迄の素振では、餘り多く自分の身の上を語る事を好まぬらしい。無論書生肌の無頓着な男であるからでもあらうが、其にしても、自分の前身に就いて、妻にさへ何等か語るに難るやうな氣味のあるのは事實である。でなくとも越後と云ふのが、既業に彼女の好奇心を惹起すには、充分の力がある。

少時してから、「然やうで在やいますか。是迄ついで伺つたことがございませぬものですから飛んだ失禮を致しまして……」

『否……』と青年は氣毒さうな様子を爲て、無骨にお辭儀をする。

『眞澄が歸りますれば、解りませうございしますが……、して何云ふ御縁續きで在しやるんでせうか。』

『それは何です、』と青年は淋しい笑顔を向けたが、何故か其きり忸怩してゐる。

這處に念を推して、後で極の悪いやうな事でもあつてはと、漣子は不圖氣が着いて、何にせい、まわお上り下さいませし。追着歸つてまゐりませうございすから。』

『然うですか。』と青年は何だか拍子脱のしたやうな顔をしたが、ギョロリとした目を燃かして、『然うしても可いですが、然し……又伺ひませう。』

『然やうでございすか。』

『どうもお邪魔しました。』

青年が掴んでゐた帽子を、突如冠つて玄關口を出やうとするので、漣子も妙に思つた。

『ではあの、お名前だけ……』

『緑川芳雄と云ふんですが、』と青年は怒つてゐるのかと思ふと、然うでもなく、少し考へてから、『其では弟が來たと然う言つて下さい。』

漣子は念はず目を睜つて、青年を見あげた。眞澄に恁麼弟があらうとは、夢にも知らな

かつた。父には夙く訣れ、母には學校を出る一年前に死れて、姉も弟もない天涯孤獨の身とは述懐にも聞いた事もあるが、其が越後に弟を持つてゐやうとは。

多時口も利なかつたが、青年が無膝なく其まゝ行きさうに爲るので、漸く「まわ、お待ち下さいまし。私些とも存じせんものですから、大府失禮なことを申しましたのですけれど、其ならば切望……。」

「いや、又何ふかも知れさせんけれど、」

「それでは困りますわ。眞實に私が困りますから。」

青年は術なげな科で、冠つた帽子を復脱つて、「尤も兄さんも御存ないかも知れませぬ。

……無論知らん筈です。」

漣子は愈よ不思議に思つた。

「それは何云ふ譯ですか」と訊かうとしたが、口へは出さず、「左に右お上りなすつたら何如です。」

「有難う！」青年は妙に更つて、連に何か考へ出した。

「然うなさいまし。私も初めてお目にかゝつて、碌々御挨拶も致さないで、此ま、お歸し

申して後で叱られましたも困りますから。」

「僕も外に親縁もありませぬし、兄さんのお名前を聞くと、何だか可憐いやうな氣が爲たものですから。」と何やら聲を曇らした。事情は知らぬが、漣子も何となく胸が迫つて來た。「それならば尙の事……。右に左お會ひなすつてから……。」

「は。」

芳雄は程なく座敷へ通された。漣子も今は疑ふ由もなく、更めて初對面の口誼を述べて、妹をも紹介した。

其限で三人は沈黙に陥つた。芳雄は數年來噂にばかり聽いて、心竊に敬慕してゐた兄の部屋が是かと思ふと、唯何となく可憐さが胸一杯になつて、感謝の涙が目の底から湧きもするのであつた。加之慙した美しい姉が宅を守つて、姉には又愛らしい妹まであつて、此家庭振の毎も和樂に充されてゐる其愉快さを想像すると何となく自分にも安穩な碇泊場へ入るやうな氣が爲た。

芳雄が俯められた茶を飲みながら、ジロ／＼四下を見廻してゐると、漣子が又徐々質問を始める。

「其で何時東京へお出になつたのです。」

「つい昨日です。」

「その。……御兄弟と云つても、屹度少い時に別れなすつたんでせうね。」

「は、然うです。母が異ひますから。」

「その然うですか。私ちつとも、ねえ滋野さん。」と目を丸くする。「眞澄は何故そんな事を秘しておくでせう。随分ね。」

「無論眞澄さんも知らんでせう。」と芳雄が言ふ。

「へえ。……して、それは何如云ふ事情なんでせう。」と漣子が目の色を變へて詰ると、妹も同じやうに芳雄の顔を覗める。

芳雄は常感したらしく、「何如いふつて、畢竟……お互に離れてゐたからでせう。僕も深い様子は知りません。」

「妙です事ね。私一回合點が行かないわ。其れで御父さまの事は、貴方は御存じないんですね。」

「父は多分東京に居る筈です。」

「東京に居る筈ですつて？御父さんが、此東京に？へえ。其事を眞澄は知らないでせうか。七歳の時とかに、死讞れたなんて、彼は嘘なんでせうか。」

芳雄も妙な顔をして、些と拍子脱が爲たのみならず、自分でも何か疑惑が生じて、今更こんな事を辯つたのが、反つて悪かつたのではないかと氣が呑めたので速に胸が騒出した。「然し這塵事は、元來詰らん事ですから、兄……眞澄さんも別にお話しなかつたぢやありませんか知ら。」

「詰らないぢやございせんか。」と漣子は滋野の方へ首を傾げて、「子として親の所在を知らないなんて……。」

「いや、其にも理由があるのです。兄には少しも罪はないのです。畢竟父が悪かつたのです。」と芳雄は鼻の先に汗を入染ませながら「現に此僕すら、父の所在を知らない位です。又知らうとも思ひません。」

「如何して？」

「それには少し事情があるのです。然し詰らない事ですから、お話する必要はないと思ひます。」

「姉さん、」と此時妹が啄を容れて、「人には何か知ら秘密のあるものですから、いつれ兄さんがお歸りなされば判るでせうよ。」

「だつて餘り可笑いわ。私何だか狐に魅されたやうだわ。」

其を聞流して妹は不圖、「では貴方は只今御親類の方のお宅にでも在やるのでございすか。」

「別に親類は有ません。眞箇孤獨の身の上です。」

「失禮でございしますが、あのう、貴方の阿母さまは……。」

芳雄は少し顔を赧めて「僕の母ですか。それは依然田舎に居ります。」

「では貴方は御修業に？」

「まわ……然し別に學資が有る譯でもありませんし、行れるか否だかは疑問です。」

「何をお行んなさいますの。」

「何と言つて別に……唯自分の目的を達するに必要なものは何でも行らうと思ひます。」

「其は然うでせうけれど……。」と滋野は笑ひながら顔を赧める。「其目的に應じて

なんですから。」

「然し僕の目的は漠としてゐますから。職業は又別ですけれど……。」

「は。」と滋野は尙赧くなつて、俯いて了ふ。

漣子は何時の間にか楷下へ行つてゐる。四下は段々仄暗くなつて来て、滋野の白い顔が、愈よ匂やかに見えると同時に、寐不足のやうな、酷く倦怠の状を呈した青年の顔が、最と暗澹に見える。其も其筈、彼は昨夜一方ならぬ骨折の後漸く眞澄の家を尋ね當てたは當てたが、扱何如しても門を開けて入る勇氣が出なかつた。心の中では飛起つやうに思ひながら、何だか古疵に觸られるやうな氣が爲て、門前をマゴくした揚句、到頭訪問は明日の思案として、悄々踵を反した。泊つたのは下谷の或安旅館で、徹宵空想に耽りも爲、自分の心細い身の上を悲みも爲て、實はマンジリとも爲なかつた。

するうち眞澄が歸つて来たが、楮下の居間で例の如く着換を爲やうと思つて、臺所に居る漣子に聲かけたけれど、妻は妙に冷淡な返辭を爲て、何かジイ／＼表てゐる。女中を呼ばうとしたが、其も居らぬ。爲う事なし獨り着換を引張出して、今漸う洋服の袴袴を脱いで、ホワイト一枚になつた處へ、二階から降りて来たのは滋野である。

「お、滋野さんか。」と眞澄は入口で茶の間から臺所へ行かける妹に聲かけた。

「おや、お歸りなさいまし。」と滋野は些と其處に跪坐んで片手を支いたが、身を起して側に寄り「あの、お客さまが……。貴方の弟さんが……。」

「何、弟？ 弟とは？」と眞澄は仰向いてネクタイを脱つしながら、眼鏡の下から目を丸くする。

「え、弟さんよ。貴方に初めてお目に懸るんですて。」

「誰の事だ。薩張解らん。して何處に居るです。」

「お二階に……。」と滋野はシロ／＼其顔を見て、目で笑つてゐる。

眞澄は白緋に兵兒帯を手提ぐ捲つて、何の氣なしに二階へ上つた。入口へ来て仄暗い部屋を透して見ると、後向に坐つてゐた芳雄が不圖振向いて、旋て椅子を離れる。

眞澄は變な顔をして、徐々卓子の側に寄りながら、「君は誰です。」

「は。初めてお目に懸ります。僕は緑川芳雄と云ふ、眞吾（父の名）の子なのです。」

「眞吾……。」と眞澄は立つたまゝ、絶か眉を繋めて、蔑視むやうに其顔を成つたが、少し艶然とした顔で、「それは知らんことはない。然し今では縁も所由もない他人同様の人で……其が又奈何して……。」

芳雄は些と狼狽いたが、覺悟の前と云ふ顔で、「其事は僕も知つて居ります。父の行爲に就いては、僕も飽迄其罪を知つてをります。然し、僕は貴方を兄として兼々敬慕してゐたものですから、失禮を願う今度上京して唐突にお尋ねした譯なんです。」

「然ら。それはまわ能く來ました。」と氣のない顔をして椅子に依りながら、「何か、而して用事でも……。」

「いや然云ふ譯ぢやありませんですけれど……。」と芳雄は悲しげな目色で、「然し兄弟……。」と云ふほどには行かんでせうけれど、切望是からお交際だけ爲て戴きたいと思

ふんですが……。」

何か茫然してゐた眞澄は、溜息を吐いて、

「交際？それは爲ても可いかも知らんが、君に取つて別に利益もあるまいぢやないか。」

芳雄は怪訝さうに、「利益と言ふことは別に望みません。唯僕は此廣い東京に一人の友人さへない位なのですから。」

「それはお互さ。僕も舊は然だつたんだ。……加之、僕の方から言ふと、其が爲に折角忘れてゐた昔の事迄思出すやうになつて、何だか其處が妙でない。下らん葛藤を惹起すのは、此際平に御免蒙りたいのだから。」

「は。」と芳雄は少し考へて、「ぢや爲方ありません。僕も斷念しませう。大變失敬しました。」と起かけやうとする。

眞澄はジロリと其方を見て、「誤解しては困るんだ。人情がないやうだけれど、僕に取つては已むを得んだ。元來親父が僕の母に對する爲打なぞと云ふものは、實に……然し昔の事は言つたつて爲様がない。君も知らん事だらうから。」

「大概想像してゐるです。」と芳雄は愁然と首を俛れる。

「僕も初めて會つたんだから、這般事は言ひたくないさ。けれど今に置き忘られんくらゐ……して君は東京で何してゐるのだ。」

芳雄は其調子の一變したのに驚いて、「僕ですか。未だ出たばかりで、東西も解らん位です。實は昨夜一晩黒門町の旅籠に泊りまして、是から早速職業を求めなげやならんのです。」

「職業を……。」と言つたさき、眞澄は再び氣の無い顔をして、何か考へ出した。

芳雄は怏々「若し何か有りましたら……何でも介意はんです。労働でも。」

「労働？さあ、何か有るだらうが……。」と眞澄は最初よりか一層冷淡になつて、「夫其向へ行かんければ……。」

此時ランプを持つて、滋野が椅子を上つて入つて來たが、其を卓子の真中に据ゑると、眞澄に、「然でしたらう。」と嫣然したが、眞澄は顔を背向けて黙つてゐた。

滋野は懲りずまに二人の顔を覗めて、「あの、お解りになつたんですか。」

眞澄は投遣のやうな調子で、俯げな體を斜に椅子の背に折つた腕を懸けながら、「弟ださうです。然し僕は少しも知らんのです。」

「然う！」と滋野は失望したやうな顔。

「其だからして、」と眞澄は芳雄に向ひ、「僕は君に對して彼此言ふまいと思ふ。けれど折角尋ねて来た人なんだから……殊に今のお話では友人もなくて困つてゐると云ふんだから、相應の助力は爲やう。此に僕持合せが五圓ある。是を差上げるから、其で以て職業に有着き給へ。」と言つて旋て身を起すと、急いで階下へ降りた。

芳雄は少し癢に觸つて、何だか誤解されたやうなのが不快で堪らず、血がムラノと頭腦へ衝上たが、何か言うとしても舌が硬張つてゐる。加之傍の人に迷惑を掛ても濟ぬと思つたので、慚愧してゐた。が、熱く視れば、兄の顔は父に善く肖てゐる。額の廣い邊から目の冷たい處が殊に酷肖である。父の口は大いが、兄のは小さく締つてゐる。其處等が母の面影を受繼いでゐるのかも知れぬ。今日初めて會つたばかりで、深い事は解らんが、何だか父のやうな邪慳な處もある。心から同情の無い人のやうにも思へぬが、然とては詰らん事を根に持つたものだ、と考へれば考へられも爲る。五圓の金でもつて、暫後一切寄つけぬと云ふ策も鄙吝だ。豫想した程の人格でもない。——然し其は此方の邪推かも知れぬ。孰にしても可い、永い間多少心の力にしてゐた兄に見棄られたとすれば、自分も是から眞箇孤獨

の身の上だ。と考へ不圖目を擧げると、ランプの光線の向に、物思はしげに茫然立つてゐる滋野の顔が、何如にも艶かに見える。

滋野は氣毒さうな顔で低聲に、「奈何なさいました？」

「此ま、歸ります。」

「深い様子は知りませぬけれど、折角手寄つてお出なすつたのにね。」

眞澄が此時皮の紙入を持つて入つて来たが、中から紙幣を一枚取出すと、芳雄の前に差出して、「ぢや左に右それを持つて……。」

「は。有難いですが、僕は要りません。」

「要らないね。」と眞澄は氣色を變へる。

「うか此は……。僕はお暇します。」

「貴方！」滋野は残念さうに、「折角の何ですから、然う云はずに持つて行つしやい。」

「遠慮することはなからぬ。お互に困る時は、僅の金でも何かの役に立つものだ。言ふ迄もないが、世のなかには、善く自分の力を量らないで跪いてゐる青年がある。今日はなか／＼勉強へ爲れば、才へあれば豪くなれる世の中ぢやないんで、夫々學歴も踏まなげやな

らんし、其には亦財産も要る。分不相應な功名心なんか持つと、人や世のなかが怨めしくなるんだから、那樣不幸のないやうに注意し給へ。」

『ひ、そんな社會の組織か……』

と芳雄は肚の裏で思つたが、默然として椅子を起かける。

眞澄は紙幣を指して、

『まゝ其を持つて行き給へ。人の厚意を無にするものぢやない。』

『いや然し……』

『差出て失禮ですけれど、そんな事を言はないで、まゝ持つて行つた方が可いでせう。』

芳雄も考へてみれば、早速必要を感じてゐるのは金である。何だか氣持は快くないが後で反せば同じことだ、と咄嗟に思案して、『それぢや拜借します。』

『あ、持つて行きたまへ。』

『それから、何なら御飯でも喫べて、ねえ兄さん。』と滋野は優しく言ふ。

『いや、もうお暇します。一度お目にかゝつて置けば澤山です。』

『ぢや歸るかね。まゝ體を大事に……』と眞澄は顔を背向ける。

『は、貴方も切望。』と芳雄もホロリと爲る。

滋野も目を曇まして、『そんな事言はないで復お遊びに入つしやい。假令どんな疎い間でも、御兄弟となれば又た別ですからね。兄さんも切望然してあけて下さい。』

『まゝ然し當分は離れてゐる方が可からう。』

『ぢや、大にお邪魔しました。』と芳雄は一禮して部屋を出た。

眞澄は入口迄送つたが、滋野は一緒に楮子を降りて、玄關口迄送出したが、其處に跪坐んで、『眞實に復入して下さいよ。兄さんも其うちには屹度お氣が滲るでせうからね。』

『は。』と芳雄はお辭儀をして、ステッキを把ると其まゝ、痛い足を曳きながら、飄然と外へ出た。

二階で眞澄は限ない回顧の冥想に沈んだ。父の眞吾が或女學校に英語の教師をしてゐるうちに、若い一人の女教師とかと怪しい關係になつて、妻と子とを一錢の貯蓄もない貧苦の中に棄て、不意と土地を立退いてから、體も弱ければ氣も弱い母親が躍起となつて人の賃仕事を爲ながら、自分の學費を拵へてくれたのが、學校を出る少し前に、氣一つで押通して來た體は、到頭苟且の發熱から肺病になつて、淋しく死んで了つた過往十年の

的生活の惨状が、今歴々頭腦に浮んで来た。其女教師は神戸邊から流込んだ基督教の信者であつたが、父のやうな大酒も飲めば大法螺も吹く男と——猫を冠つて人を瞞すのが巧つたにしろ——一所になつたのは一體如何した動機であつたか、何しろ熱くなつて、相携へて東京へ走つたのは事實だ。其後其女が病氣したとか、二人共東京に居なくなつたとか云ふことは、母が何處からか聞いて来て自分にも話したが、那麽立派な子があらうとは夢にも知なかつた。眞吾は些と才物で、大阪で法律なんか勉強した事があるが、品性が陋劣な爲に成功も爲す、悪い智慧ばかり發達して、何を遣ても人に信用されず、少しばかり眞面目に行つてゐるかを見ると、直に人を裏切に爲たやうな事を爲出來す。其から自暴になるのが順序で、元は失戀から那麽になつたと云ふ人もあつたが、然とも受取れぬ。何しろ東京では巡査を行つてゐるうちに、何か投機をやつて失敗したと云ふ事だ。其から酒を飲むと理窟を言つて威張るのが癖で、揚句の果が纖弱い母親を撲打擲するのは、敢て珍しくなつた。あの調子から推すと、其女教師も決して幸福ではなかつたらう。人の評判では、非常に摺枯しと云ふ事であつたが……などと考へてゐるうちに、滋野が私と入つて來た。

「兄さん御飯ですつて。」

眞澄は泡を喰つて、「然う！」と言ふなり轟と起上る。

楷下へ降りると、食卓の上は食相なオムレツが三皿鼎なりに置いてある。其で漣子は焦つた顔で何かの汁を椀に盛つてゐたが、シロリと眞澄の顔を見て口を利かぬ。

眞澄も押黙つてゐたが、臺所の後始末をしてゐる女中にビールを命じて、其を飲みながら、折々薄氣味悪さうに綺麗な漣子の顔を偷視してゐる。

「あゝ、飛んだ者が舞込んだものだ。」と箸でオムレツを突つきながら「漣、お前も驚いたらうね。」と優しく出る。

「うゝえ。」

「今度來てもね、もう會はんと言つてくれ。會つてやる義務はないんだから。」

「然ですか。」と漣子は顔を横に向けて低聲に、「貴方の家庭は何だか妙な家庭ね。」

「何故？」

「何故つて、私初めて聞いたわ。」

「僕にしても初めさ。まかし僕の家庭は、現在の是が家庭なんだよ、外に家庭はありやしな。」

「ぢや今の那の方は何です。」

「ありや他人さ。」

「ぢや御父さんは？」

「父は無いさ。」

「有るつて云ふぢやありませんか。」

「成程其人は在るかも知れんさ。然し僕の父ぢやないんだから……戸籍上から言つても、理窟の上から言つても。」

「然う言や然うかも知れませんが、貴方は私達に父に死訣れたなんて、随分ね。」

「何が随分だらう。然云ふ方が至當なんだから。それに就いては、いづれ詳しく話す折もあらう。然し變に思はれちや困る。」

「しかも其御父さんは東京に在しやると云ふぢやありませんか。」

「東京に？あゝ居るかも知れん。居たつて他人さ。假令途中で擦違つたつて、誰だか解りもしなからうし、又解つたつて、口を利く必要は些もない。」と眞澄はビールを啣りながらシロく漣子の顔を見て、「實は少し不徳な人間なんでね、不徳と云つたつて、何も今の

僕の家庭に累を及ぼす理窟もないけれど……其點は安心してゐて貰ひたい。」

「如何して今迄其を秘して居たんです。」

「如何して？秘して云ふ譯ぢやないけれど、何も云ふ必要はなからうぢやないか。僕を産んだ者は何であらうと、僕は僕で僕の人格があるんだから……何も然う怒るやうな事でもないんだがね。」

「別に怒りや爲せせんよ。」

談話は一と先其限になつた。

芳雄が外へ出た時は、日はもうトツブリ暮れて居た。

兄が父の罪惡の飛沫を自分の處迄持つて來たのは何だか心外で堪らぬが、考へて見れば兄にも同情すべき點が多い。但不幸な境遇を潜つて來た身にてありながら、心が那麼に硬いのは一體如何したものだらう。矢張父に似てゐるのかも知れぬ。其てなければ、大學を出ただけに名譽地位など浮いた社交的の虚飾が大事か、淺薄な意味の家庭が貴重なんだらう。那樣様子は語の端にもチヨイ／＼見えぬでもなかつた。葛藤を惹起するのが不好だと謂つたが、根が葛藤だらけの人生ではないか、一人て好い氣になつて澄して居たつて、然ら單純な譯に行くものか、向三軒兩隣の交際も爲なければならず、裏長屋の夫婦喧嘩を聞いたつて、多少自分の感情にも差響を生ぜずには居られまい。

然し兄は兄だ。一體自分の體を奈様處置する氣か、差當り是が先決問題に爲つて來た。親父は才子だから、何事を行つてゐるに違ない。もう五十五と云ふ年で、アルコール中毒もあれば、随分の亂暴も無理も行盡して來たのだから、近來は頓と頭腦が鈍つて來た

には相違ないが、未だ喰つばぐれするやうな年でもなく、子供一人の身の始末を着けられぬ事もなからうが、其も面白くない。今更ながら那の老父にも困つたものだ。東京を喰詰めて北海道へ渡つたのが、自分が八歳の時、實業界へ入つて、些と芽が出さうであつたが、三年経たぬまに襤褸が出て、其から流れ／＼て越後迄來た。越後の在では舊の教師に舞戻つて、其から郡書記になり、不思議に眞面目にやつてゐるうち、土地の或富豪の氣に入つて、親しく交際してゐたが、少許の田地など持つて、尤もリウマチに罹つてゐた故もあらうが、全然別人のやうな觀があつた。が、毒草は何處へ植ゑても毒草で、芳雄を産んでから酷く健康を害した母親が、其時は慢性の腎臟病で運動が出来ず、其富豪の娘に物を教へてゐるうちに、何時か親父が其娘を如何と云ふので、是迄の假面も頓に剝けて了つて、自暴になつて田地を賣飛して、一人て東京へ出たのは、遂五年程前だ。其から母は左に右役に立つ處から、其富豪の家に備はれて子供の世話やら裁縫やら行つてゐる、芳雄は又半分下男のやうな仕事を爲て、其處の家庭の幾ど戸の外に育られた。然し氣が弱い癖、些と意地つ張で、加之始終大人ぶつた憂愁に沈む質なので、餘り可愛氣がなかつた。母親は自分の罪も知つてゐるし、方々流浪して、もう不安な生活が熱く不好になつてゐるので、

何如かして此で芳雄に信用を得させ、一廉の田地持にでも爲る意で、自分にも主の氣に入るやう、出来るだけの事は盡したのであるが、芳雄は餘り其を好まなかつた。其て本も讀み、多少世のなかも見えて來たので、幼稚ながら何か知ら頭腦に持つてゐて、時とすると妙に捻くれた事を言つては、子思の母の心を傷ましめる。其かと謂つて、母には滿幅の同情を獻げて居ない譯ではない。母の前では、嚮後一切父にも母にも迷惑は懸けさせぬ、と言斷つて幾と逃走のやうにして出て來たが、慙して東京の地を踏んで、兄にも排斥されて了つたとなると、道に父が可憐しいやうな氣も爲る。

芳雄は道不案内なので、何處を奈何方角を間違へたか、四十分もかゝつて漸く出たのが追分の通であつた。

腹も空いてゐるし、餘り咽喉が粘着きさうになつたので、只ある穢い氷屋へ飛込だが、氷を一杯呑むと、少しは身内が涼しくなつて、何だかゴチャ／＼と紛糾つてゐた頭腦も多少鎮靜に歸した。其處で道を善く教へて貰つて、沙埃で白くなつた袴を後下りに、復テクテク歩出さうとすると、何處からか、

「ホイ、ホイ、ホイ、ホイ、ホイ、」と云ふやうな聲が如何にも蒸暑さうに聞える。

何か知らと思つて、前程の方を見ると、十間ばかり先に、荷車を曳いて來る向鉢捲の人間の姿が見える。

何を曳いて來るのかと、段々近いて見ると、其懸聲は次第に「ホイ、」と尻下りに弱つて、旋て消えて了つたと思ふと、今度は火の着くやうな子供の啼聲が、町の雑沓を通じて、シンミリした夜の空氣に響度つた。

近いて善く視ると、其に蒸縮のやうなメリヤスのシャツに、同じ穴だらけの股引を穿いて、體はツングリと大きく太く、顔は仁王のやうに日に焦け筋張つて、タラ／＼と汗を流した一人の女の車力である。

些と見ては、奈何しても男としか思はれぬ形相であるが、確に女で。

「やあ、東京には不思議な者が居るぞ！」と芳雄は我を忘れて直と歩を止めた。

風としては一ト戦ぎも爲ない晩で、空の色も何だか明澄しない。瘴氣の匂のするやうな空氣が、生温く顔に觸つて、ゾロ／＼往來ふ人の足音が、何如にも不活潑に聞える。女車力はまだ汗水漬で、何やら背中から蒸氣が立つてゐさう。梶棒を卸すと、目へ流込む汗を襟の袖で擦りながら、太い首を捻向けて、背の兒を覗いた。

『然うギヤア〜〜啼いたつて爲様がねえぢやねえか。おん負が不好なら降りて歩行するかよ。』と憤れつたさうに體を振る。

すると細い紐で、唯落下らないばかりに縛つけられた、毛の薄う、凹凸なりの頭の背中の兒が、何處か痛いのか、尙ヒ〜言つて啼立てる。

女は當惑したが、自分でも既う肩が悶へて遣り切れなくなつてゐるので、『ぢやおん降し。おん降して車引張つて行けよ。』と言ひ言ひ紐を釋いて、子供を地面へ降した。而して自分も體が軽くなつたので、急に蘇つたやうに、ホッと呼吸を吐きながら、鉢捲を釋いて其手拭で顔から胸の邊を拭散す。

子は三歳ばかりの男の子だが、締着けられてゐた體が自由になつたので、戯戯をしなごらも、猝に元氣づいて、『母や、母やと一緒に往かう。』

『あ、一緒に行くんだい。もう直だからな。宅にや父が待つてゐるだ。』と紐を棍棒に結着けて、其片端を子供に持たす。

『さあ、是引張つて行くだ。』

『おゝ！』と芳雄は何思つたか、此時四下を見廻して、私と側へ寄つた。

女車力は又汗を一ト拭拭いて、憎とした顔で、水牛のやうな目を光す。

芳雄は低聲に、『お前何積んでるんだ。』

『此かね。』と女は車の上に夥多積んだ真白い袋を見返つて、『此はパン粉でござります。』

『何處へ持つて行く？』

『是から先の駒込の製造場へ持つて行くんだがね。日本橋から日に二度……三度も通ふもんだから……。』

『何、三度！』芳雄は荷を見て驚いたのである。

『加之にお前さん、子供までお負ふも、だから……。』

『其で幾許になる？』

『幾許にもなりやしなやね。一度運んで十五錢だね。』

『全然牛か馬のやうだ。是から見りや動物の方が餘程幸福だらう。』と芳雄は熟く考へながら、

『それで何時でも一人か。』

『何にお前さん、肝腎の働手が病氣してるもんだから。』と女は少し可憐らしい聲になつ

て「亭主がお前さん、五年前から患つて、目が利かなくなつたもんだからね。……其でも、目は利かなくても後押は出来るもんだから、體さへ丈夫なら一緒に稼ぐんだが、先月から脚氣踏出して、何如にも恁にも稼ぎに出らんねえもんだからね。……」此まで言つて女は初めて氣が着いて、不思議さうに芳雄の顔を覗めた。尤も通りすがりに車を曳惱む憐な此労働者の様子を見て、一錢二錢の合力をするものは希しくもないが、這麼に根掘葉掘聞くのは澤山は無ゐ。

『お前宅は何處だ。』

『神明町でござりますすよ。』

『子供は幾歳かね。』と芳雄は紐に掴つて、呆然と往來を見てゐる子供に目を注げる。

『三歳になるんだかね、尙お前さん大いのも小さいのも……』と言かけて不圖氣を替へる。『また皆小さいもんだからね。』と今度は妙な聲で笑つた。

芳雄は其には返辭もせず、『お前に金やらう、金を……』

『金かね。有難うござります。』と女はお辭儀を爲て、煩さうな緒い亂毛と、皮の厚い太い手で撫あげる。

芳雄は袂の底から掴出した饅口を開けて、先刻の紙幣を取出すと、前へ突出して、『此だけあつたら、何か出来るだらう。』

『五圓札かね。』と女は寧ろ氣味悪さうに、『其を下さると云ふのかね。』

『何でも可い、取つておけ。』

『然かね。』と言ひながら、思斷つて手を出しても爲ぬ。

四五人人集りがしたのに氣が着くと、芳雄は突如折つたまゝの札を女の手に渡して、『それを資本にして、何かもつと樂な仕事に取着けんかね。』

女は青年の顔と札を見比べて、『こんなに澤山貰つても可いかね。濟まねえ事だが、其ぢやお前さん……』と札を三度押戴く。

其間に芳雄はサツサと歩出した。餘り心持の好い金でもなかつたのに、子供の哀な様子を見ては、其まゝ行過ぎる勇氣は奈何しても出なかつた。一體涙脆い性質は母から受継いで來たので、慾と云ふものゝ少しも無い處なども酷く似てゐる。

彼は後をも見ず、四五町も歩いたが、不圖立停つて、『待てよ。』と獨で呟いた。

『他は一體産れ落ちるからの労働者だらうか、亭主が體が弱くて、其て子供が澤山あつて、』

妻が車力をして一家を支へてゐる。爺は屹度技倆のない、意氣地無のお人善なんだらう。其で水牛のやうな醜い顔であるのと、體が強健な爲に、毎日々々日本橋から駒込まで三度も通て、其でも不好きな顔一つ爲ぬ。實際自分の境遇を然う悲惨と考へても居ないだらうが……又そんな事を考へて居る餘裕のあらう筈もないので、唯牛のやうに毎日々々車を引張つて歩く、那麽者の子供は矢張あんなで、其又子も矢張あんな生活を送らなければならぬ。」などと思ひながら、あの五圓の金を一體奈何使ふかと云ふ問題を考へはじめた。五圓と雖も彼等に取ては何しろ大金に違ない。商賈を爲て出来ない事もない。もつと樂で綺麗な内職の口につく事も出来やう。が、那の様子で、そんな智慧が出さうにも見えぬ。先子供の土産に饅頭を買つて、亭主にも何が所好なものを買つて行つてやる。脚氣だと云ふから、醫者にもかゝるだらう。自分も骨休めに二三日も那の不様な姿を此通に見せないだらう。然した曉が、矢張元の空阿彌で、車力より成下らうと、成上る氣遣ひは滅多にない。加之亭主が不幸にして、始末に行けない飲んだくれていゝもあるとすると……『が、今夜の那の家庭が、左に右何時にない楽しいものであるのは事實だ。』と芳雄は汚い其の裏屋住居の彼等の家庭の賑ふ状を想像して、言知らぬ愉快を感じた。月

は何時の女にか曇然した雲間から顔を出して細い電線が何かするとピカリと光る。那の女が裏の井戸で顔や足を洗つて、我家を上る時に、貧しい格子窓から月の光が甚だに清く差込んであらうか。

其につけても田舎に居る母親の事を憶出さずには居られぬ。あゝ、未だ手紙を出す事すら忘れて居たが……と芳雄はハッと氣が着くと、急に歩を速めて歩出した。其と同時に明日から自分の身を寄すべき處もないのに氣が着いて、何だか物を取落して来たやうな心持も爲る。

「まかし那だけの金があつたつて……寧ろ無い方が優だ。」途々大道の古本屋を獵つたり、繪葉書屋の前に立寄りなどして、漸く黒門町の宿へ着いたのは、九時の頃であつた。

宿は通から横町の不景氣な古老けた家で、薄暗い軒行燈が黒光のする格子の外に懸つてゐる。で、衝と入ると、正面の帳場格子に亭主であらう四十ばかりの男が、横の柱の照返の着いたランプの光を苦り切つた蒼白の其横顔に受けながら、金盞眼を光してジロく芳雄の姿を見たが。お辭儀も爲なければ、「お歸り！」一つ言はぬ。其前を行過ぎやうとして、

段櫛子を上りかけると、不意に、

「おい、」と亭主の聲がする。「誰か居ないか。八番さんが……。」

此時ボタン／＼と二階から降りて来た十四五の小女が、芳雄の姿を見ると、「あのね、お氣の毒ですが、今夜お客が込みますから、お荷物を櫛下の十三番へ移しましたが……。」と芳雄の顔を暫時見詰めて、忙しうに衝と行つて了ん。

「込合ふ様子も見えんが……。」と芳雄は心に然然としながら、何喰ぬ顔で、後へ引返して右へ廊下を廻ると、米俵など積んだ物置部屋の途隣が其で、廊下の中程のランプの光に十三番の木札の懸つてゐるのが見える。障子を開けると、其處は床一つ無い陰氣な三疊間て入るとムツと微臭い臭氣が鼻を衝く。

芳雄は一ト晩其處に明さねばならなかつた。

六

八月に入つてからの或日、朝十時頃、宿の亭主が十三番の障子を開けると、芳雄は先刻女が持つて来てくれた手紙を、寐ながら讀んで居た。

彼は那の明くる日から腸加答兒に罹つて、一時は空扶斯でないかと宿から疑はれて、立退を要求されたくらいであつたが、實は其程でもなかつたので、五日程前から熱も大方は退き、食慾も進んで、落窪んだ目の縁にも、少しは肉を持つて来た。が、顔は尙眞蒼て全然白蠟のやう、細長い四肢は愈よ細長くなつて、小鼻から口の兩脇には、如何なる病苦を経來つたかと思ふ深い條が入り、目のうちにも頓と力と云ふものが無い、加之煤けた低い天井、雨漏の迹で所々見苦しく剥れた汚い壁、紺糸の襖、何だか氣味の悪い壁虎でも喰着いてゐたさうな陰氣な濕氣くさい四畳半に、此も垢濕潤のしさうな黄縞の小さい蒲團を着て寐てゐるのだから、一入憔悴に見える。

けれど此の宿の亭主ほど慈悲を知らぬ男も亦恐く珍しからう。這麼哀な状を見ても、目に一滴の涙を持たうとはせぬ。又お世辭にも慰藉のお氣毒一つ言つた例はない。——立退

を要求した時には随分言つた癖に、尤も彼の白癖に言ふとほり、根が慈善事業でなからぬのだから、其も仕方はないが。……女中の説に據ると、内儀さんは一人の娘を残して疾に死んで、今の女房は女中上りであるさうな。娘はちよいと帳場へも顔を出せば、目星の客の前へも偶には出るが、些と美人で何時もぞろりと藝者のやうな身装をしてゐる。爲儀のない浮氣者の阿婆摺ださうで、華族の小間使から墮落して妾、役者狂、淫賣、有と有の悪徳を爲盡して、年が辛々二十四だと云ふのに、父親や繼母には腫物に觸るやうに懼られてゐる、手に了へない代物なのだ。

然しそんな事は自から別問題だ。但此娘のお蔭で、舊は曹長とかであつた親父が、今は家作など有つて、自分一人は好い氣で暮してゐる身の上であることを斷つて置けば、其て可い。

で、芳雄は這塵事を耳にしてから、一厨冷たい親父の顔を見るのが不愉快で堪らず、全然牢獄にでも打込されてゐるやうな氣がするが、素より那樣詮議をする隙もなく、不圖飛込だのが因果と諦めるより他はない。が、病氣中は随分不自由をも感じ心細くもあつた。獨でメン／＼泣いてゐる夜などもあつたが、又宿の冷遇を憤慨して、疝癪を起して、折角退

が、つた熱を復高めた事もあつた。

障子の開く音に、芳雄は俯伏になつてゐた顔を、不圖振擧げて入口の方を見たが、其目には涙が一杯浮んで居た。其様子や、手紙の女文字であることや、爲替券が傍に落ちてゐる處から見ると、母からの消息に違ない、病氣が段々快い方へ向いて來たので、初めて病氣した事を知してやつた、大方其返辭なのであらう。

「お早う！」とも言はず、亭主は無愛想に突立つて、例の人を刺すやうな目で、キヨロキヨロ四邊を見廻はしてゐたが、良久あつて直り壁に體を靠着けて、大い兩手で額を撫であげる。

芳雄も憤々する胸を、強ひて平氣を装ふてゐるらしく、静と仰向になつて、何爲に來たと言つたやうな目で、ジロリ其顔を見る。

「如何でせうな、國から爲替でも來ましたかい。」と言つて心持目元に苦笑する。

「あ！」と口中で言つて、芳雄は天井を見詰める。

「幾許來ましたね。三四十圓も寄越しましたかい。」と冷しに言ふ。

「芳雄がケロリとしてゐるので、因業親父は拍子脱がして、貧血でも爲てゐるらしい其目

を備さうにバチ／＼爲たが、直に少し突然となつた。

「其處で勘定の方は、一體如何してくれんです。」

這度は常時の調子で言つて、手を組みながら顎を突出して其處へ屈込んだ。

「何だ、無禮な！」と芳雄はもう口迄出かゝつたが、未だ大い聲の出る體でもないのて其處までは調子づかなかつた。

親父は四本の指でチョンビリ鬘の延びた顎を掴みながら、「全體今日は幾日だと思つてゐなさるんだ？」

芳雄は體を横に捻向けて、「それは僕も知つてをる。だから實にお氣毒だけれど、何分病氣と云ふと……」フツ、リ聲を切つて、更に「病氣が癒れば必ず何とか爲す。」

「何とか……？ 何とかぢや困るね。其も何時何日には何處から何程爲替が参りますとか、何とか云ふんなら此方も安心して猶豫と云ふことも有ますがな、何れ其的がない、とジロリと爲替券を見遣つて、少し調子を落し、「今來た爲替は一體奈何云ふんで？」

「此かね？ 此は母から少しばかり小遣を送つて寄越したんだが……」と芳雄は其を取上げて、「それぢや僕は當分小遣も要らんから、之を君に差上げやう。」

「ふん、笑談ぢやない。蟲の好いにも程度がありませ。田舎の人は此だから困るんだね。」と亭主は横を向いて、鼻で笑つて、「此方は正當に取るべき物を取るんで……だが幾許です、え金高は？」

「五圓。」

「五圓？ 單た五圓ですか？」

「然なんだ。」

「五圓ぢや全然お話になりや爲ない。」と萎頓する。

「敢て五圓で話を着けやうと云ふんぢやないんだ。」

「ちよツ、當然でさ。人を莫迦にしてゐなると云ふもんだ。」と亭主は容めるやうな口調で、憤々してツイと起上つた。

其て出て行くかと思ふと、那樣氣色もなく、立附の悪い押入の戸を、ガタビシ云はしなから、足と手で箝めたり外したりした揚句、旋て手と手を二三度揉んで拂つてからも、依然其を氣にしてゐる。

良久あつて、「それで後は何時頃貰へますので？」

「後に出る時……。」

「其の出る時と云ふのは何時なんで。」と聲に力を入れる。

「職業の見つかり次第……。」

亭主は目を丸くして、「ちや修業に出て来たんぢやないんで……？」

「何如なるか、其邊は未だ僕にも解らん。」と煩さうに復顔の向を更へたが、「左に右迷惑はかけやしな。」

「だが、其ぢや困るんでさ。」と亭主は再び跪坐で、深い皺を絶か鼻の上に寄せながら、「其だから那の時に私は綺麗にお断りしたんだ、だけれど東京には親類もあると云ふ話で、捜す間、二三日と云て依頼されたもんだから、餘儀なく、文お泊申したやうな話だ。するてえと何如だらう……尤も此方は商賣だから、宿料さへ拂つて貰へば文句は無いんだが、此ぢや眞實何如も遺切れない。宅は貧乏書生のために慈善で遣つてる評でも何でもないのですからな、眞實の處……然らぬの好い事はかり言つて、平氣で居られるてえと、何とか夫々始末も爲なけりやならんで……。」

「可いさ、必らず拂ひさへすりや可いぢやないか。僕は決して宿料を踏むやうや者ぢや

な。」

亭主は急込んで、「其ぢや其親類の方に保証して貰ひませう。」

「保証かね？ だけれど……。」

「出来んかね。」

「出来んことはないが……。」

「其が出来んければ、矢張拂はんものと見做すより外は無い。」

芳雄は臆然として、「けれど此體ぢや行けないから爲様がないぢやないか。」

「いや處は何處だね？ 其さへ聞けば私が自身に行つて談をするから……其方が早手廻だ。」

芳雄は此時ムックと起上つて、瘦せた顔に苦笑して、「拂はん場合に然し給へ。」

亭主は熱と其顔を賸めて、「ちや愈よ拂はん意かね。」と意地悪に出る。

「いや拂ふから、其必要がないと云つてるんだ。」

「其方に必要がないか知らんが、そりや信用の有る人の云ふ事だ。……所て其親類と云ふのは、一體何をしてゐる方だか、左に右所を聞いて一度出向させよう。然した

「曉に又何とか話をつけませう。ねえ、其の方が可い。第一お前さんも落ち着いてゐられると云ふものだ。」と今度は平夷に言つて、「ねえ、然しなさい。然して貰はんと私の方でも的無に唯便々と、入費をかけて置く譯にも行かん。此物價の高直な東京を、田舎と同じに見られちや堪つたものぢやない、眞實に……それで其五圓は、爲方がない貰つておくと爲て……。」と枕頭の爲替券を取上げて些と日影に透して見て、「ちよッ、印を捺して貰ひませう。」と面倒臭さうに粗暴に突出す。

「印は無いが……。」

「印がない？ぢや爲方がない三文物でも押さう。へ、へ、一枚の金子で……。」何處までも見割つた風で、「此は此として、今の其の、所を一つ聞きませうか。」

此時バタ／＼と廊下に登音が爲て、旋て女中が一人の紳士を叮嚀に案内して来る。

七

客は眞澄であつた。彼は黒い薄羅紗の背廣に白い穿袴を着けて、扇子をバチ／＼云はしながら、「あ、こんな處か。」と云つた風で、少し反加減に入つて来る。

老爺は其傍を擦抜けて、障子の外へ出やうとすると、白粉の匂のする程、而と而と直り出會つた女がある。其れは滋野で、身には橄欖色のメリンスの單衣を、涼しさに洒然と着て、草花模様の琥珀の帯の片側を上へ出して締めてゐる。手を口へ當て、極悪さうに身を退くと、老爺も妙にトチつて二度ばかりお辭儀をして出て行く。

二人が座に就く時分、芳雄は熱嗅さうに垢染みた白地の單衣の麻衣で、行儀よく蒲團のうへに坐つた。

「先日は伺ひまして……。」

「いや、失敬した。」と眞澄は枕頭にあつたマッチを取つて袋に火を移しながら、「其後奈何してゐるんかと思つたら、病氣して居たんだつてね。」

「は、詰らん目に逢ひました。が、誰からお聞きでしたか。」

「眞澄は些と眉の邊を曇らせて、『實は廣谷から聞いた。』

「廣谷から！然てしたか、僕はお話せんやうにと断つておきました等ですが……。」

「然か。」とシロリ芳雄の顔を見て、『何だか非常に困つてゐるからと云ふ話で、僕にも責任があるやうな事を言つてゐるのだ。——尤も責任の解釋を廣くすれば、成程其に違なからう。けれども僕の側から云ふと、君一個の事は僕が引受けて……例へば上京と云ふことなどに就ても、別に相談を受けた事もなければ、依頼された覺もないんだらう。』

「然てす。」

「だから、世話をすべきか、爲さじきか、然云ふ事に就いて、別に考へる必要を感じなかつたのだ……。」と未だ語勢が切れぬうち、

「いや、無論僕も然う深く……唯一度何つて置けば其で可いんです。」

「局外から見ると、何となく然も思はれるだらう、思はれても、まわ爲方はないが、然し愈一身上の事について、多少相談でも受けると云ふやうな事になると、僕にも僕だけの意見があるんで……。」とガッシリ力を入れて芳雄の顔を見詰めながら、「が、其は先日も言つたやうな事で、實は餘り言ひたくない。固より君の悦はん事でもあらうし、其處を

で立入る必要も無からうと思ふ。」

「は、其點は解つてゐるのです。」

「然だらうとは思つたが、して見ると廣谷が傍から餘計な世話を焼くのかも知れん。」

格別返事をする必要もないと思つたか、芳雄は唯押黙つてゐる。眞澄も眞ばかり吹して、較照れた氣味もあつた。

眞澄が此時柔和な顔一面に笑を湛へて、口を利き出した。

「そんな事は別問題と致しまして、あの、實は今日は、御病氣のお見舞に上りましたので、す。」と言つて後の方に忍ばしておいた紫メリンズの風呂敷を釋いて、四隅を強と開くと、水蜜に蜜柑、青いバナ、など季節もの、果が、一杯に盛られてゐる。其を前の方へ押出すと、

「姉からも宜しく申しまして……。」と簡單に附加へる。

「は。」と芳雄は些と居住を正して、困つたやうな顔をする。

眞澄は憶出したやうに、急に軽い調子で、

「但し此は眞澄さんの好意なんだよ。」

誰でも可いと云ふ風で、芳雄は又「は、」と頭を下げる。

「い、え、然云ふ譯ぢやないんです。」と滋野は顔を赧めて、ムッチリ肉づいた膝の上で、私と風呂敷を畳んでゐる。

大方兄への義理として、這麼心遣をするのであらうとは思ひながらも、何となく溜かしの風に當る心持も爲る。

滋野は面を擡げて、「それで御病氣は、もう餘程お宜しいんですか。」

「は、もう今ぢや大概……。」

「何しろ御上京早々から寐込んでお仕舞ひなすつて、加之這麼處でお一人では嘸お心細かつたでせうね。」

「は、不自由は不自由でした。然し別に……。」

「其から、あの失禮ですけれど、外の時と違ふのですから、御用があまりましたら、御遠慮なく何なりと仰せいでして。」

芳雄は何だか可笑いやうな氣が爲たが、「は有難う！」と返辭だけする。

始終、冷淡さうに構へてゐた眞澄は、此時扇子をポケットへ挿込んで、歸るかと思ふと又思酬わるい調子で、「それで今後の方針は、一體如何云ふやうな考なのか。」

芳雄は變だ！と思ひながら、「それは色々考へてゐる事も有ます。」

「どんな事か……。」

芳雄は目を耀かして、「例へば僕一己としては醫術を研究して、他は模範的病院を設立して、今の病院の悪弊を一掃するなども一つで、其を根據として各方面に於ける現社會の救済策を講ずる。政治、宗教、教育、風俗……。」と言も切らぬに、

「は、ぢや社會改良家か。」と外力を向く。

芳雄は妙な顔をして、フツと口を噤んだが、

「所詮虚偽、不自然、不公平な現社會の組織を潰して……。」

眞澄は苦々しさうに「すると、破壊黨か、は……。」と一旦收つた扇子を取出して、急に暑さうにカフスを透して風を送りながら、

「左に右醫者が志望だね。——其醫者にしてもだ、醫者と名の付くものに成るのは、先出來得るとしても、後の發展がなかく難しい。病院を根據として、社會に活動するなどは以ての外で、醫術研究と云ふ事が既に畢生の大事業だ。今日博士迄になるには、資産家か非常な精力家か、恐く精力があつても、金がなくちや所詮駄目だらう。那樣事は第二の間

題として、差詰醫者の修業は何如して爲る意りか……。

「其には幸ひ廣谷さんも盡力してくれと言ひますから。」

「廣谷が！」と眞澄は廣谷の名を聞くと、如何云ふものか何時でも可厭な顔をする。「そりや那麼變物だから世話もするだらう。然し其よりか順序として、御父さんの方へ頼つた方が可いぢやないか。」

「父ですか。」

「一人は、父だつて見る義務があるだらう。」

「然し、其も何だか好まぬのです。」

「好まぬなんて事は宜しくない。」

此で話が途斷れる。

暫時してから、「加之兄さんも、絶対に助力しないと仰るのぢやないでせうからね。」と滋野が口を出す。

「いや、兄さんを煩す意は無いです。」

「それは煩はさんと仰つても、全然然も行きませんから。……現に這處ところを御覽

なされば、其處は血を引いた御兄弟ですもの、豈かに放擲つてお置きなされるやうな、那樣事も出来ませぬいから。」と二人の顔を見比べたが、「貴方も然言つて兄さんにお頼りなすつた方が宜うございます。」

「僕ですか。」と芳雄は迷惑さうな顔で、「けれど兄さんが是迄の事情を考へれば、其も何だか好まぬのです。——何、體さへ健康になれば、勞働でも何でも行つて、學校へ通ふだけの事は出来やうと思ふんです。」

「まあ、其心懸は好い！」と眞澄は氣無に言つて、「其決心で一つ行るが可い。」

「けれど勞働などと云ふのも、考へものなせう。巧く成功すれば可うございますけれど、其前に體を悪くして中途で仆れると云ふ事も有ませうし、随分困難だらうと思ます。」

「まあ行ると云ふんですから……。貴方は其は解つてゐる。然し漣などと來たり……。僕一個の自由にも行かん事ですから。」

「それも然ですけれど……。」と滋野は、姉が何如して那も片意地だらうと、既に先にも眞澄の祕密が暴露してから、夫婦ながら何となく面白くなくなつた事などが氣に懸つて來る。實際漣子は然云ふ女で、時々解らぬ事を言つては、一人で怒つて眞澄を苦しめる。

尤も始終華奢な生活に慣れる、風があつて、莫迦莫迦しいほど金や權勢を羨ましがつてゐる。然かと云つて、強ち良人を莫迦にしてゐるのではないが、狭い胸のうちには、何かしら不道理な不平と意地を持つてゐる。滋野とは全然正反對なのだ。

其で眞澄はと言ふと、非常な家庭崇拜家で、母の悲惨な境遇を知つてゐるだけに女にも自然同情がある、畸形な家庭に育つたので、何でも彼でも家庭の爲に全力を集中しやうと云ふのが、彼の癖で、其様子が芳雄の目にも歴々見える。而して兄が、父や弟以外、熱心に自分一個の家庭を保護する傾のあるのを認めて居ながらも、何故か「何だ、そんな那樣、小さい薄弱な巢が……」と嘲りたくもなる。此が元來芳雄の癖なのだ。

折しも以前の亭主が倉皇と、入口まで来て、

「え、今緑川と云ふお老人が見えました。」と燥急に注進する。先刻の調子とは打つて變つた輕薄である。

三人は一齊に顔を見合した。

「成程、母が報らしたのだ！」と芳雄は心のうちで頷きながら、二人の前、何となく周章く。何如しやうかと思案してゐる間に、亭主は早や引返して行つた。と、眞澄は急に氣

色を變へて、忌々しげうに、「滋野さん、もう行かう。」

「然うですね。」と素順に頷いて、座を開かうとする處へ、父はもう入つて來た。

如何にも身長の高い、立派な男で、身には縁を取つた古いフロックを着け、實質は何にせよ金鎖も絡まつてゐる。クシヤクシヤした目ではあるが、底に一種の光を有つてゐて、大きな鼻が薄赤味を帯びてゐる。一體の色光澤は悪く、頬から顎へ二分ばかり、灰に鹽を混したやうな髯が生えてゐる。で、色の褪めか、つた高帽を冠つたまゝ、屈み加減に部屋のうちへ目を配るのであつた。

眞澄は見向きもせず起上つて、父と入道に脱出やうと氣構へる。

其を見ると老紳士は、「いよッ！」と不好といふほど膝を打つて驚いて、反りながら笑つた。

帽子を取つて、「まゝ、不思議なところで會つた。縁は盡きぬものだ！」と又笑つて、「まゝ、折角會つたんだ。色々談話もあるし、又私の悪いところは詫もせんけりやならん。まゝ、まゝ、久振で……」と骨張つた大な兩手を延べて、追ひ込むやうにして裏へ入つた。

其様子が餘りに可笑いので、滋野は義兄の後から覗きながら、桃色の手帕を口に當て、クス／＼笑つて居る。が、眞澄は苦切つてゐた。

「いや又……。」

「いや、然う言つたものでもなからう！……お前は其でも可からうが、此の私の氣が濟まん。まあ下に……又遁る段になれば、此の私が顔を蔽して遁出す筈で、お前の方には更に何等の憚る處も愧る處もない、公明正大ぢや。」

「いや然し……。」と眞澄は尙固く拒む。

「尤も這麼親には會ふ必要を認めん、と言はれ、ば其迄だが、其は以前の事、私も昔と今とは全然人間が異ふ意で……まあ、心から自分の罪は悔いてゐる。又お前が今日迄に漕着けた精神も感心してゐる。實に深々嬉しいので……。」と使つて愚弄になる。

少時してから又「然云ふ譯で、一度は是非會つて舊惡を詫びやうと思つてゐたところ、今日此で會つたのは何よりの幸ひぢや。お見受すれば連合も居られるやうであるが、實に何如も何とも……まあ、枉げて下に……。」

と芳雄に向へ、「芳雄、お前も止めてくれ！」

芳雄は腕を組んで黙然としてゐる。

滋野は氣毒さうに、「兄さん、あ、仰るんですから、暫く落着きなさいましては何如です。」

「然うさね。」と眞澄は不肖々々漸く舊の座に坐つた。恚なると老父は遽にケロリとして、帽子を隅に置いて、滋野に席を譲られて、眞澄の横に落着はらつて坐る。

「やあ、何しろ久振だ。」と大な手帕を擲げて顔中撫廻しながら、「更めて挨拶するまでもないが、先健康で何よりぢや。」

眞澄は黙つてお辭儀をすると、下から滋野が、「妹でございませう。」と云つて慇懃に初對面の口道を進べる。

老父は手短に切上げて、「いや迷いものだ。然し案じる子は産易いと云つて、其後學士になつたと聞いた時は、私は甚度に嬉しかつたか。而して阿母さんは……。」と何處か薄薄聞知つてゐながら、悦けて訊くやうな氣味もする。

眞澄は重い口で、「母は亡くなりました。」

「亡つた？眞實にか。」と頰ツペたを服まして、「おう、それは残念だ。」と眞澄の顔を睨む。

も爲す贖める。

『して何時の事だ。』

『もう五年にもなりませう。』

『其は些とも知らなかつた。』と愁然と首を俛れて、『可哀さうな事をした。薄命な女ぢや。』

『白々しい親父だ、何處を押せば那麼假聲が……』と思つて芳雄はジロリと父の顔を見遣つた。

『其と云ふのも、皆な私の所爲だ。定めし怨んで死んだらうな。』と哀つばい目で眞澄を見ながら、眞澄は素氣もない、知らん顔を爲てゐる。

其なりに座が白けて來た。

が、老父は萎げた氣色もない。『私も其後方々流浪して行きをつたが、一つも面白い事に打突からん、一度は錦を着て國へ歸つて、お前達母子にも逢ひたいと思ひながら、生前に到頭一度の手紙もやらす、死んで了つたとは此上もない遺憾ぢや。——して其後再縁でもしたか。』と懲りずまに眞澄に訊く。

眞澄は憫れて其顔を見詰めたが、張のない聲で、『爲ません。』

眞吾は小く幾度も頷いて見せたが、『まあ、然し過去つた事は爲方がない。過去をして過去を葬らしめよ、失敗は失敗、私も愚癡は零すまい。と、まあ、然云ふ主義で、年は取つても元氣はなかく衰へん意ぢや、は、は、は。』と面白さうに笑出した。

『又過去を憶出して始終残念だとか、可憐いとか思つてゐた日には、人間一日も生きて此世に居られはせん。近い話が、昨年迄検事總長をして居つた、他などは私が弟のやうに可愛がつてやつた男で、今でも會へば緑川さん緑川さんと云つて大事にする位ぢやが、此私とは云ふと風塵に埋れて此通の始末だ、又愛媛縣の多額納税者、△△代議士なども、關西法學校に居た時分は、寔に早や見る影もない素寒貧で……』

と調子に乗つてゐると、芳雄が突然、『あゝ！』と長大息する。

『私も其時分は俊才で……』

『そんな下らん事を……』と芳雄は鼻で笑つた。

『は、は、は、』と眞吾も笑出して、『眞實に然ぢや。麒麟も老ゆれば駑馬に劣るで……』
然し芳雄、委細の事は國からの手紙で承知したが病氣はもう段々好い方かな。』と目をパチパチさせる。

「好いです。」

「何か其の、眞澄にも心配をかけたやうな話ぢやが……。」と二人の顔を見比べて、「まあ好いわ。始めて會つた兄弟間だ。」

此時迄黙つて辛抱してゐた眞澄は、急に何か氣に懸出した様子で、傍に置いた麥稈帽を膝に取上げ、「少し用事もありませんから、私は是で御免蒙ります。」

「まあ、那樣素氣ない事を言はずに……。」と眞吾は手で抑へておいて、「芳雄初めて會つて僥して素話も興がない。丁度時分でもゐる事ぢやから、酒を少しな……。」其ともビールが可いか。」

芳雄が返辭を爲ぬので、自身バチ／＼手を叩いた。

「私は然もしてゐられません。義妹も居りますし……。」と眞澄は先刻には似ぬ沈んだ調子で、顔も何となく冴えぬ。

「妹さんには御迷惑か知らんが、然しまあ、皆な一家の間柄であるから、……。」

「いゝえ結構でございます。」と滋野は反つて落着いてゐる。

其中小女が入口へ來たので、眞吾は後へ捻向いて、何やら命ずる。

「な、宜しいか、何はとも有ればビールと氷を先に……。」と此だけは大きく言つて、ツルリと廣い額を撫でて、此方へ向直る。

「まあ一つ御興を据えて貰つて、親子の情を暖めやう。いづれ私の方からも伺ふであらうが、序があつたら彼方の方へも……。」私は今青山の久我と云ふ貴族院議員、あの邸内に居候をして居るので。」

「は、這度は華族か。又例の手で巧く胡麻を摺つてゐるのだらう。」と芳雄は輕蔑したやうに、父の顔をジロリと見る。

「實はふとした事から、此當主と別懸になつて、今では先、何によらず相談を受けてをるやうな譯だが、何か一つ面白い仕事を持上げて見やうと云ふので、尤も財産も澤山ある、名望も先々重い方で、私も、此ま、朽ちるのは何如にも残念であるからと云ふ考から、此の人を後援として、老後の思出に、一つ華々しく旗揚を爲る意で居る。其の事に就いて、と眞澄の方を見て、「又大にお前の力を借りなければならん事もあらうし、お前の便宜になる事もあらうかと云ふ、まあ物は相談ぢやが、……。」と膝を乗出して熱心に言かけたが、眞澄は相變らず不愉快さうに、窓の外を眺めてゐた。

ビールや肴が来てから、もう大分になるが、其間白ける座を幾と眞吾一人で持切つて、飲む事も飲むが、辯る事も善く辯る。其て酒は罪惡の基だから、近頃頓と飲らぬと云ふのであるが、成程酒量は此でも多少衰へてゐる。久我子爵と知つたのは、維新前の勤王家子爵の父の銅像を鑄る時、色々委託されて骨を折つたのが縁で、小才が利いて何かに重寶なところから、其後も引續き家事の世話をしてゐる。例へば子爵が關係してゐる各種の事業の手先にもなるが、家庭内の事には殊に巧で、些とした處で妾の始末などはお手に入つたもの、書畫や骨董も多少明い。庭園別荘の修繕家庭園藝などにも、なか／＼器用な處があつて、時とするとき悪い酒癖などで、意はぬ襦袢を出すこともあるが、憎まれもせぬ人間なので、大目に使つておく。眞吾の言ふところでは、子爵は物解の好い人で、去年の暮から眞吾が相談しかけて置いた貧民子弟の幼稚園設立に就いて、意外の賛同を受け、子爵の同族や、知己へ夫々紹介もしてくれたので、此頃略基本金も出来、今建築の敷地選擇中だとの事。何だか信用の出来かねる談であるが、萬更の嘘でもないらしく、偶然とすると其事

務ぐらゐるは取扱つてゐるのかも知れぬ。其て其組織について、眞澄は幸ひ多少知識もあるだらうから、何か異つた意見又は西洋の例などがあるならば、惜まらず教へてくれまいか、事によつたら其事業に係はつてもらへるなら尙結構だと云ふやうな談を持たけたけれど、眞澄は、然云ふ事には夫々専門家があらうから、其に就いて聞くとも備ふともするが可からうと言つて、取合ひさうにもなかつた。

「第一然云ふ慈善的の事業は、餘り好みませんから。」とお終に素氣なく弾つけた。而して此時迄一筆も口をつけなかつたビールを、何如した拍子がグイと呷つた。

老父はもう二本も一人で明けて、目を少し引釣せながら、「ど、何如云ふ譯で、こんな結構な、文明的社會的の事業が、何如云ふ理由で氣に入らん？」と長い手を兩膝に突立て、無上に左の肩を突出す。

「慈善と云ふ事は、多くの場合閑な人が名譽心のために行ふ事で、實際何等の效果も無いです。其よりか人は、各自分の事を勵むべきで、養ひされぬ貧民を救養するよりか、寧ろ先自分の子弟を養ふ心がけが必要です。」

「其子弟を養ひされぬ人の爲に同情するのが即ち慈善事業だ。」と老父は上衣を脱棄て安

とシャツの袖を捲揚げながら、「世のなかには願うべき人間が多い。お前などは學者で、
那樣事には氣が着かんか知らんが、國家に取つて此位大切な事業はない。人は困つて見ぬ
と、……………」

「いや、其困つた事を言へば、お蔭で私は善く味を知つてゐる。人情も世のなかの味も嘗
盡してゐる。親に放擲られたくらゐの人間ですから、……………」

老父はガツクリ首を俛れて、急に碎けて「閉口閉口。いや然う云はれると一言も無い。」「
だから私は然云ふ主義です。何如なる場合に於ても、親の愛情を信用できない位ですか
ら、従つて慈善などと云ふ事も、少しも信用出来んです。」

老父は大きく笑つて、「強ち然う云つたものでもなからう。其處等がまだ年の若い故で……
……尤も私は例外として、現にお前も母の慈愛に浴してをらうが。」

「然です。母の慈愛も知つてをれば、妻の愛情も知らん事はない。又決して人を愛せぬと
云ふのぢやない、愛すべきものは矢張愛する同情もする。然し格別慈善事業の必要は認め
ません。人の慈善を受ける事も大嫌です。」

「は、其は所好とか嫌とか好悪の感情かも知れん。矢張自己から割出した主義ぢや。」

と眞吾は首を傾げて、「私は決して然は思はん。」

「然し貴方は實際慈善事業の必要を認めてゐますか。」

「充分認めてゐる。」と重苦しく頷いて、「お前は困難に遭ふて來たから、其故で意志一方
へ傾いてゐる。けれど世の中は其でも行かんのだ。人間の極致は、矢張其の情で……………」

「お言中ですが貴方も情の人でせう。」

「うむ、情の人だ。」と言つて又コップを取りあげた。

眞澄は窘めるやうに、「貴方は其情に走るから畢竟遺損が多いでせう。」

「何如にも其に違ない。」と老父は膝を拍つて高く笑出す。

「何にしる我ながら愛想が盡きた。お前達にも面目ない。何如か此の際面目を一新して、
眞面目に行りたいと思ふから、眞澄お前も萬望一臂の力を假してくれ。」と強請るやうに
言つた。

「然し、那樣立派な保護者があつて、而も立派な事業に従事なさるのなら、何も私如きが
彼此隊を出す必要もないでせう。」と眞澄は鼻の先で遇つて、「私も急に親を一人持つやう
なものですから……………其でなくとも随分頭腦が忙しいのです。」

『そんな敬遠主義を取らんでも可い。』と老父は突拍子な聲を出して、體を緊張し、トロ
ンとした目を眞澄の顔に据ゑる。

『敬遠主義です？何でも可い。』と苦笑して、爲様のない老爺だ！と云ふ顔で父を見返す。
眞吾の體は段々崩れて、終に這つて疊に手を支いたが、其拍子に體を掴んでコップに注
がうとする。體の口はカチ／＼と音がしたが、ビールは一ツ滴も出ない。其處で舌打一つ
爲て、四本目を命ずる意で、大な掌を叩く。

備さうに體を横にして、何を思ふのか、憎乎と冥想に沈んでゐた芳雄は、此時驚いて偶
然と此方を振向いて、『酒ですか。酒ならもう休した方が可いです。幾許飲んでも味は同じ
です。』

『休せ。休せなら休す。』と眞吾は妙な顔をして、手を引込めたが、『然し私が拂をするから
可いだらう。』

滋野は横から顔を覗込んで腹を抱へて、苦しうに笑出した。眞澄は那の調子で善く母
を打つたものだ。あゝ今に直らぬのか！と何だか無上に淺猿しい氣がして、少い時分の悲
しい記憶などが、今また新しく頭腦一杯になつて来る。

『いや誰が拂つても……』

『何、何故だ？十幾年振親子揃つての對面に飲まずに居られるか。』

『そんな不條理な事が何處に在ります。』

『何處が不條理だ？』

『貴方の爲る事は、何時も不條理だらけだ。』

『其ちや休す。其ちや酒は休すが……』と淋しげに四下を見廻して、『あゝ私ほど世の
中に滿らぬものはない。家はなし、妻はなし、子は二人迄やつても信用してくれん。所好
な酒すら飲めん始末で……』

芳雄は笑つて、『信用も不信用もあつた譯のものぢやない。貴方などは、然云ふ事を言ふ
資格がない。』ととろんと又横に爲る。

『何故またお前は然云ふ事を言ふ？』と眞吾は目ばかり睨らして、『可し、其ならば、是非
とも遣つて見せる事がある。お前達には、矢張何か其有形のものを見せつけなければ、私
の腕が解らんのだ。金なら金、衣食住なら衣食住。』

『いや、もう澤山です。其上金があつては大變です。其よりか、其華族の家を失敗らんや

うにならう。」

「真澄にするもんぢやない。」と氣味の悪い笑聲を出して、「華族が然う有難いか。據るなさに、へ、へしてをれば、好い氣になつて……。」と口の中でブツ／＼言つてゐる。

「其華族の寄生蟲なら爲方がない。」と吐くと其を又不思議に聞きつけて、

「は、違ひない。」と大口を開いて、「まあ、私を用ひるだけが感心ぢや。私も此いらが先働さどこかと諦めてをる。」

真澄は不意に、「ちや芳雄。私は此で失敬する。」

「然ですか。」と芳雄は勃と起上つた。「何しろ此始末で……。」

「いや爲方がないさ。私も父と思はん。」

「は、御心配下さらんで可いです。親父は親父で暢氣なんですから。」

「あ、然うだらう、其も可からう。」と真澄は苦笑して、滋野に目配すると衝と起つた。

「おい／＼、」と老父は水母のやうな手容で、

「何、何處へ行く！」と言つたばかりで、もう強ひて止める元氣もなかつた。

其間に滋野は呻に一人て挨拶をして續いて出ると、真吾は急に物寂しさに、腕を組

んで太息つくのであつた。

芳雄は兄を見送つたまゝ、坐つて、慚愧後悔の體で俯むいた父の顔を見遣ると、何時かフ
ラリ／＼と居睡の形である。其で眠つてゐるのかと思ふと、不意と細く赤い目を開いて、
ジロリと四下を見廻しては、窓から戦いで来る濕氣くさい風に吹れて、好い心持に又フラ
フラと爲つて了ふ。熟く其様子を見てゐると何だか幾許もない餘命のやうな氣が爲て、心
が引込れるやうに滅入つて来る。子に對しては決して義務を盡した親とは言へないが、然
程の分別のない親だけに、年を取ると一入氣毒にも見える。散々働いた體を、又しても生
存競争の渦中に投じて、果は何如云ふ死様をするのか。薄倅健柯と言へば薄倅健柯でもあ
らうが、自覺も反省もない、思へば無意義な生涯である。

と、真吾は口をモガ／＼して、掌で無上に顔を撫廻した。

「あ、好い心持……何如した？、真澄はもう歸つたか。お、俺も歸へる！」とモン
モンしてゐるかと思ふと、他哩なく横に轉けて、蝦のやうに丸くなる。

暫くしてから芳雄が手を敲いて、杯盤の取片附方を命ずると、其物音に這度はバックリ
目を開いて、呎を嚙殺しながら、六ヶしい顔で起上がる、で、廁へ行つた後で、女中に茶

を吩咐けて、黙つて其を喫つてゐると、芳雄が、

「御父さん、僕差當り困つてゐるんですが、少し補助してくれませんか。」と切出す。

眞吾は狐に魅まれたやうな顔を爲て、先刻とは別の人のやうな重い口を利く「私に補助しろ？……可し！」

「金を其處に持合してゐるんですか。」

「金？金は今持つて居やん。」

「其ぢや困る。」

「だが、眞澄が何とかしたらうが。」と目を睨る。

「笑談言つちや困るです。尤も先達て來たてに少し下れましたけれど、其も兄弟と云ふ意味で下れたんぢやないんです。」

「何の意味でも下れさへ爲りや可いが、して其限か。」

「でも貰ふ所由がないですから……。」

「無い事があるものか。」と傍に置いた上着を引寄せながら、手を通す。旋て着て下ふと、

「が、まあ宜しい。心配せんで可い。私が又適當な處を見つけてやる。昨日來た國からの

手紙ぢや醫學が希望のやうだが、其も可からう。行るなら一つ行るとして、如何ぢや、一つの食客に行つては？」

「食客ですか。」

「最も其うち、私も金を拵へる意ぢやが……然うすれば、國から阿母さんも呼んで、一つ家を持たう、私は其計畫に今取かゝつて居るので、何に、まだ演つて見せる事がある。」

「餘り行らん方が安全でせう。」と芳雄は心配さうに言ふ。

「其迄の繋ぎに、私が一つ好いところへ箝めやう。久我子の邸でも、若くは松尾さんの處でも。」

「松尾とは何ですか？」

「松尾と云ふのは、外務省の參事官でも手腕家と云ふ評判の男ぢや。其が久我子爵の婿になつてゐるので、私も此頃は懇意にしてゐるが、年の若いになかく切れる。」

「そんなのは御免です。」

「何故？」

「兎に角御免です。」

「其では矢張り子爵か。」

「尙嫌ひです。華族に頭さげるくらゐなら、電車の車掌が未だしも氣が利いてる。」

「老父は目をバチ／＼した。」

「ふん、何を言ふか、那樣迂遠な事で此節出世が出来るか。」と吐出すやうに言つて、「然る云ふ大言を吐くかしらして、阿母さんが心配するわ。」

芳雄はニヤ／＼笑つてゐる。

「まゝ悪いやうには爲んから、御父さんに委して置くが可い。」

「御父さんに委しておけば、何を爲れるか知れやしないです。」

「然ら親を信せんやうな事でも困る。」

「けれど過去が然ですから……。」

「お前も然云ふ事を言ふか。」と脅すやうに言ふ其後から、眞吾はケロリと爲て、衣兜から小刀を取出すと、其を手帕で拭いて、籠の中から林檎を一つ選取つた。

九

芳雄の宿を辭して出た眞澄と滋野とは、今上野公園の摺鉢山の下を押駈て通つて行く。眞澄は砂埃で白い赫革の靴を穿いた大きい足で、テク／＼歩いてゐると、滋野は橄欖色の傘を斜に始終小刻に、雪沓の足を運んでゐる、森くさい涼風は習々と汗ばんだ腋下へ流込んで、四下が蒼い故か、ホンノリ上氣した桃色の顔が、突然透徹るやうに見える。今日芳雄を見舞つたのは、實は主に滋野の發意なので、自分の氣では漣子若くは母の代理の意なのである。眞澄はと云ふと、總ての事が細君本位で、其も妙な方へ傾いて、例へば結婚してもう大分になるが、未だに漣子の前に虚飾の面を脱ぐ事が出来ぬと云ふ、我ながら窮蹙な立場に立つてゐるのである。否妻に限らず、眞澄の周圍に對する道口は總て是で、善く知つた者から見ると、可笑いくらゐ自分の幼時の家庭を知らるゝ事を辱とする。其が又密になつて、虚飾の點に於ては、良人に劣らぬ漣子は負けぬ氣になつて、上へ／＼と出やうとする。眞澄は心から妻を愛してゐながら、未だ一度も打解けて、夫婦らしい或物に觸れた事はない。自分でも始終其が不足で寐ても起きても其事が氣に引懸つてならぬのである。

が、其でも二人の間の隔を破つて了ふだけの勇氣が出ぬ。で、其弱點を見せるのが何より可厭で、動もすると無理に冷淡に見せかけやうとする。蓮子の方でも夫々の陣立がある。自分が松尾に棄てられた事は、棚の上へ上げておき、棄られる筈ではなかつたと云ふ念ばかり先に立つて、其を色に見すほどの無邪氣でもないが、始終自分を一段高いものに爲やうとする。加之常識に缺けた天性は、如何と云ふ深い考もなく、時ならぬ時に不意と怒つたり鬱いだりする。其が眞澄に對して、殊に劇しいので、動もすると酷く苦められる。所詮人には狎難い一種の美しい動物で、如何に之を馴すべきかと云ふのが、眞澄に取つては此上もない難問題なのだ。此で眞澄の仕事は澤山なので、此上弟の事などに引絡んで、家庭に累を及ぼすのは何より可厭だ。第一父親の事を知られるのが、何より辛い。其故弟は斷然斥ける意であつたが廣谷の所思を憚かつて、是も世間へ對する例の虚飾から、打擲つても置けぬ羽目となつた。否、實際眞澄は、始終こんな事に競々してゐる男なので。眞澄は上野まで送らうと云ふので、此まで黙々として附いて來たが、此の時少し歩を緩めて、

「今日は飛んだ御迷惑かけましたね。」と妙に四角張つて言ふ。

滋野はバサ／＼した鬚に落懸つた松葉を、軽く織指で拂つて、「い、え、其どころぢやございませぬ。一人でも参らうかと思つた位なんですもの、でも丁度宜うござんしたね、御父さんがお見えになりまして……………」と急に憶出笑をして、

「眞實に面白い……………お元氣な方ですね。」

眞澄は苦笑して、「爲様がないです。親の事だから、私も悪く言ひたくはない、けれど何しろ那だから……………」

「でも格別兄さんの仰るやうな、常識はづれて在やる……………とも思はれませぬわ。」

「以ての外です。」と眞澄は吐出すやうに言つて、「一體あの口前の巧いところが氣に加へてす。子にでも妻にでも、あんな輕薄の押賣をして、更に辱と思はないんだから、良心が麻痺してるとしか思はれなす。」

「それはお年の加減でせうよ。でも、昔の才氣の面影だと思へば……………」

「才氣と言へば才氣知らんが、本の小才で、尤も僕も初めて會つたも同じだが、何しろ爲様のないやくゞものです。」と舌打して、「然し餘り考へますまい。考へるだけの價值もなすですから。」と再び歩を速める。

少し行くと、彼は不圖道を逸れて木立のなかへ入つた。而して大な檜の根方へ寄つて、マッチを摺つて、裏に火を點けると、不圖側に來た滋野を振顧いて、其頭髮の廂に口髭が觸るほど寄添つて、何か言出さうとして目を滋野の顔に据ゑながら、熟と考込んだ。

眞澄はマジ／＼滋野の顔を見詰めて、「滋野さん、今日私の父に會つた事は、誰へは秘密にして置いて貰ひませう。」

「然ですか。」

「然しないと、又彼此面倒ですから。ね、誰は那云ふ女でせう。」と少し低聲になつて、「何彼に就け負けぬ氣の女です。だから以前僕の家庭が亂脈であつたとか、父が不徳な人間だとか、然云ふ事を聞すと、酷く神経を惱すのは、もう知れきつてゐる。誰にしたつて、那樣事は餘り心持の好いものぢやない。滋野さんにしても、那麼親戚があるのかと思へば、屹度肩身が狭い。え、如何です。」

「さ、え、些とも……。」

「さや、恁云ふ事を、僕が訊くだけ野暮だ。」

と故らに笑つて、「左に右恥辱に違ないのだ。其處へ持つて來て、誰は幾んど滑

稽なくらゐる上品ぶつてる。謂はゞ大の貴族主義だ。リボン一つ買つたつて、彼女の趣味は解かつてゐるが……尤とも其れは結構な事で、格別非難すべき點もない。たゞ僕の地位、収入が其を許さんので、贅澤も出來ず、時々氣の毒な思をする位のもので、誰自身から云へば、不満足の點も多いでせう。」と分疏でもするやうに更なる。

「正可、然でもないでせうけれど……。」

「まあ、それは岐路の談だが、左に右那云ふ男があると云ふ事は、僕どうも誰に知したくない。況して此後博士にでもなれば尙の事……。」と氣が差すやうに小さく言つて、「だから僕も可成父には豫防線を張つておいた意なのです。那の位にしておけば、先來る氣遣はないですから、又來ても取合はん意で、貴方さへ詳しい談話を爲なけりや、先面倒は起らんのだ。」

滋野は折々頷いたものゝ、何だか不感服な顔であつたが、此時笑顔を作つて、「それは然かも知れませんけれど、格別恥辱と云ふ程の事ぢやないかと思ひますわ。姉さんは、仰るとほり其は些と虚飾者なんです。けれど、何も其程に用心して、お隠しなさる必要もないやうぢや有ませんか。」

「いや、然ぢやない！」と眞澄は頭を掉つて、「此は何如しても秘密が好いやうです。今迄私を信じてゐたのが、其が爲に多少龜裂が入ると云ふ事は、女としては普通免れんところですよ。少しでも然云ふ事があつては、長い間には屹度感情上満ちない錯誤が起きるから……」

『でも、御父さまは、今の處丁とした紳士で在やうぢやありませんか。』
眞澄は可厭な顔を横に向けて、「然う冷しちや困る……」

『あら、私冷しや爲ません。此が何か兄さんに御迷惑でも懸けるやうな方なら、遣ける必要もありません。此が何か兄さんに御迷惑でも懸けるやうな方なら、遣ける必要もありません。此が何か兄さんに御迷惑でも懸けるやうな方なら、遣ける必要もありません。此が何か兄さんに御迷惑でも懸けるやうな方なら、遣ける必要もありません。』

『それで弟さんの事は何如なさるお意ですの？』
『さあ、此も困つたものだが、連に心配かけるのも氣毒だから、可成關係しない方針を取るより他ない。僕も結婚後財政上や何か、色々俗事に追はれて、是から些と勉強しやうと云ふ矢先、那麽者の面倒見てる餘裕は逆も無いのです。加之、少しばかり僕が注込んだ處で、其結果は大概知れてゐる。さあ此際御免蒙つた方が例巧さうだ。又父の爲に散々酷い

目に逢された揚句、弟まで背負込むなどは實は餘り感心しないですから。」と笑つて、

『其位なら寧ろ他人を世話するです。其方が氣持が好い。』

『ぢや、些とも弟さんのやうなお心持なさらないんですか。』

『然う……先爲ませんね。』と眞澄は身を反して、「する道理がないです。寧ろ不快に感ずる位なんで……」

滋野は首を傾げて、「然ですすかね……でも少しも御本人に罪はないんですから、其ぢや何だかお可哀相のやうですなね。』

『……然う思ひますか。』と眞澄は淋しい笑顔で、「滋野さんとしては成程然うかも知れん。僕にしても、強ち弟其人を憎むと云ふ意味ぢやない。たゞ、其が爲に、少しでも家庭を濁されるのは、何しろ不愉快だから……」

何分滋野には肺に落かねる節もあつたが、此は眞澄の家事、此上争ふべき事でもないと思つて……其に久我子爵と云へば、其令嬢が松尾に縁づいてゐると云ふ事もあるもので、其子爵家に眞吾が居るとなれば、往來する日になれば、つい其等の噂も姉の耳に入るであらう、今に置き松尾に未練を引いてゐる姉の爲めに、何の道好ましい報知でもない、其

も不圖胸に浮んだので、其まゝに口を噤んだ。

と、眞澄は又其が氣になるらしく、熟と其の顔を睨めて、「然し何如です、拙いと思ひますか。」

「いゝえ、」と滋野は甚く素直に出て、「可うございます。ちや私も其意で……」

「が、何だか拙いな！」と眞澄は首を傾げて「寧ろ漣にも言合めて、其々防禦策を講じやうか。」

『ですけれど、姉さんとしては那樣事も出来ずまいから、然なれば何れ皆さんとも親しくなさらないければ……』

眞澄は目を丸くして、「其上親しくした日には、其こそ漣が悲惨です。まあ當分此儘にして置きませう。弟の口から知れた事だけは爲方ないとして、今日會つた事などは言出さすまい。」と言つて眞澄は木蔭を離れやうとして、

「ちや、此ららでお別れしませうかね。」

「然ですか、でももう直ですから、何ならお寄りなさいませんか。」

「然う、今が暑い盛でもあるし……」と眞澄は愚圖々々しながら、何時か一緒に行き出す。

き出す。

歩きながら、談話が漣子の噂に移る。是迄にも二人の間を緩和して來たのは、實は滋野の力が多いので、無論喧嘩するほどの夫婦でもないから、此といつて骨折つた例もないけれど、姉へは眞澄の美點、眞澄へは姉の美點を與けて、可成互に接近させやうと力めてゐる。滋野から云へば、姉にも非難すべき點も多いが、眞澄が餘りに妻を憚るのも、讀めた事とは思はぬ。尤も松尾と云ふ男の歐洲漫遊中に、判官であつた此姉妹の父が亡つて、固より大した財産もなく、然したる家格でもないところから松尾としては漣子に不足の點を發見したのもあらうが、左に右突然に結婚の前約取消を申込んで來た事が、漣子の身に取つては非常な打撃であつたにも違なからうけれど、其を何時迄も思つてゐる姉の氣が滋野には分らぬ。眞澄も破談になつた立派な縁談が一つ有つたと云ふ事だけは媒介者から聽いて知つてゐるので、其手加減はしてゐるのであるが、其と同時に何だか始終自分でも心から打撃けられぬやうな氣が爲てゐる。動もすると、妹を通じて妻の意嚮を探ると云ふ不自由な事もある。然し其を別に不満とも思はなかつたのは、滋野の美しい氣立が何かを補つてくれるお蔭であらう。

今も眞澄は、近いうち博士論文を書く意で先十中八九成功する考でゐるから、其際には漣子にも満足と興へる事も出来やう。自分は血縁と云つても何にもないので、唯漣子との間が今少し温かに行けば外に望はない。其爲には何を犠牲に供しても厭はぬと云ふ口吻を洩して、

「漣野さんも、然るべき養子を迎へて、我々だけで愉快な家庭を作りませう。其につけても、僕は未だ漣野さんの考を聞いた事がないが……」と不圖振願いた。

「私ですか。……母も然う言ひますけれど、先當分は。」

「して甚麽望みますね。」

「甚麽といつて、私は人格さへ好ければ他の事は甚麽でも可いんですけれど、母には色々注文があるでせうから。」

「阿母さんは何如云ふ考へてせう。」

「何ですか、會社員のやうな人が可いと云ふんですけれど……。」

「すると實業家ですかね。」

「は。ですけど、那云ふ社會の人は、私何だか氣が進まないんですから、矢張何か、も

つと面白い……。」と言かけて急に黙つた。

「然う。孰にしても戀愛のないのは長持がしない。私の結婚などは矢張然で、大した不満がない迄も、少しでも不安の點があつては面白くない。漣野さんも、躬ら求めた方が或は可いかも解らん。」

踏切前まで来て、二人は直と口を噤んで了ふ。其處を突切つて、道の半町も行いて左へ入ると、直に菱沼の前へ出るので、羅漢松の門を開ければ、低い垣根の上から、狭い庭も箆笥迄積んだ座敷も明透に見える。諸道具が押入に收切れぬ程あるので、見たところ狭苦しさうに見えるが、此でも畳敷でざつと二十位はある。夏は女三人限でゐるが、學校が始まると、田舎から預つた中學生が一人來るので、其でなくとも隣が近いから、餘り寂しい方ではない。

格子戸を開けると、這るやうな三和土の上に、意氣人柄な織珍の緒の着つた綺麗な下駄が目に着いたので、眞澄は漣野と目を見合して、「は、漣が來てゐる！」と胸を騒がす。幾ど一所に納戸へ入ると、火鉢の横に茶道具を取散して、四十少し出た位の、眼鏡を懸けた切髪の品の好い母親と、漣子が向合つてゐる。素より眞澄は今朝九時半に上野を立つ

人を見送つて、些と此へ立寄つて、其から芳雄を見舞ふ相談が成立つた位であるから、更めて母親には挨拶もせず、漣子の顔を見ると突如「何如して来たのかね。」

「何如してつて、實家ですもの！」と云つた風で、横へ顔を傾けてリボンを直してゐる。「何か急用でもあつたのか。」

「い、え。」と低聲に言つて、「お留守のまに、滋野さんを出張出して、何處かへ行かうかと思つたんです。這麼時でいもなければ滅多に……。」と外へ出してはくれぬと云ふ意味を言外に見せて、寂しい口元に笑を浮べる。

眞澄はふつと目を睜つたが、何にも言はず直に俯いて了ふ。妻を外へ出すのを、事實眞澄は餘り好まぬ。而して何かに世話を焼過るのも、漣子の悪癖を増長させる基なので。然し今日は何か自分の身元に就いて、母に訴託に來たに違ない。と眞澄は先着をしたので、猜疑の眼で始終漣子を見てゐる。

母親は洒落した人なので、是等の事には餘り氣を使はうともせぬ。強ち繼母魂性ではな

るので。
「何如でしたね弟さんは？」

「有難う。もう別に……。」廣谷が一體大業に言ふのです。「と扇子を使ひはじめ。

「でも醫者は大業ほど好んですよ。」

「それに、那の病氣は、未なか／＼油断は出来ませんよ。」と滋野も口を挟んで、少時其事ばかり噂してゐるので、漣子は照出して、揚句にふいと起上る。

眞澄は振願つて、「何如だね、そろ／＼歸らうかね。滋野さんも働いてゐるだらうから、運動は又今度にして……。」

漣子は黙つて、縁端の柱に背を寄せながら突立つて庭を見てゐる。

「其よりか皆さん遊んで在しやいよ。而して夕涼になつたら、御一緒に池畔でも散歩しませうよ。」

「如何だ、然するかね。」と妻の顔色を窺つて、

「其も好きさうです。え、然しやうぢやないか。」

「切望御勝手に……。」

「何を那樣に憤々して居るのです。些とも意味が解らん。」

漣子は頼ない聲で、「……憤々してなんぞ居ませんわ。私少し滋野さんに用がありま

すから。」

「何如云ふ用事かね。」

「それは秘密なのです。」

「秘密な用が有りさうもないが……」と呟くのを聞かぬ、

「何如して、貴方にだつて秘密があるやとさういせんか。」

「うむ、然か。」と眞澄は爲う事なし苦笑して「然し其は今日に限るさう。」

「煩い！とやうに、澁子は到頭顔を背向けて了ふ。と、母親は笑出して、「まあ、こんな

我儘ぢや。お守が大抵ぢやとさういせんね。」

眞澄も笑つて、「いや、貴方にも今日は何か御迷惑を持たんだに決つてゐるです。」と獨で

頷いて、「大體未だに阿母さんに心配かけるのが、考へて、え、澁……。」と又縁端を

振顧く。

「阿母さんの處へ、然う安に家庭の事など擔込さん方が可いですよ。」

横から母親が「別に、然云ふ譯でも有せんよ。」

澁野は此時着替に立たうとして、「い、え。姉さん今日は何如かしてゐるのです。」

十

或日宿の亭主と娘との大立廻が始まつた。事の起原は、例の貧乏僧くなき老爺の慾張魂情から、或華族の妾の口があるから、今度と云ふ今度年貢の納め仕舞に、一つ行つてくれぬかと口説いた。無論今更縁づいた處で立派な處へ片着ける身ではない。孰れ落着く處は此いらであらうが、其にしては財産もウンと有るし、返子と大森とに別荘は二つも有るし其を一つ貰つた處で、一生利子で樂に暮して行かれる位のもはあらう。年は四十少し出たばかりで、(實際は何如か知らぬが)男振も好い。今度買った其大森の方に置く事にするからと云ふので、子供を瞞すやうな口調で、自分の手前の未なかく不如意な事なども哀ッぱく駢立てた。

が娘も今は、能く言へば自覺、悪く言へば摺枯の多少度胸も出来てゐるので、然うくは父親の餌食にばかり爲つては居ない。一も二もなく彈つけて、加之三百圓と云ふ金を引出して、凄いほど品の好いハイカラに身を渡して、向ふの下宿とかに居た醫學生を喰へ込んで、何處ともなく失せて了まつた。其れと知れた時の亭主の錯愕と云ふのは一ト通ぢや

ない。もう眞蒼になつて、飯も食はずに心當を尋ねて行いた。無論遠走りは知れた事で、念のため其書生の身元も搜れば、友人にも尋ねて見たが、更に手懸がない。其處で警察へ搜索願を出すと、老爺と娘の平生が平生であるから、此方の知つた事ぢやないと頭から我利を喰ふ。老爺はもう躍起だ。占を立てるやら御籤を引くやら、大騒をやつてゐたが、十日目に小田原から葉書が来たと云つて、其學生の友人が態々知してくれたのを心當に、老爺は矢も楯もたまらず、搜索に出かけたが、間もなく函嶺で押へて、色々に瞞して辛々の事連歸つた。其時は金はもう大半散つて、唯男の洋服や時計に光が残つてゐるばかり。連歸つた日の晩の事、老爺は膳に向つて酒を飲みつゝ、娘を傍に引つけて置いて、ジリジリ縮揚げやうとかつた。而して是迄に行つて来た娘の我儘を一々數立て、親不孝の罪を責立てはじめて、謝罪せよとせやうとすると、娘も黙つては居ず、逆様に老爺の非道な仕打を言立て、此位の事は當然でさね。悪かつたら何如ともしてくれと拗出した。愚なつては脅すより他はない、老爺は突如突立あがつて、娘を足蹴にした。鼻張ばかり強くて、女は女だ。何するんです、と起上るところを、又ビシヤリ平手で横頬を撲られた。撲られながらも汚口に罵る聲も甲走つて、娘はバタ／＼廊下へ逃出す。老爺は烈火の如く、

額に蠅のやうな筋を立て、追駈まはす。到頭芳雄の部屋へ逃込んだところを踏捕へて、髪を掴んで廊下へ引摺出さうとする、途端にゴロリと横になつてゐた芳雄が、轟と起立つて、老爺の腕を掴んで、力任せに壁へ引据ゑた。「亂暴しちや可かん。女を虐待するのは悪S。」「お前さん方は知りなさらねえが……。」と老爺は熟柿くさい息を吐かけながら、「此奴あ爲様のない奴でさ。さあ謝罪れ。」と又振舞いた手を振揚げる。「誰が謝罪るもんか。ふん、人を何だと思つてるんだ憚りながら餘所の娘と娘が異ひますよ。」と娘は涙聲を振絞つて喚く。するうち神さんや女共も飛んで来て、シヤリムに老父を引張つて行く。後で娘は割れた櫛を取つて棄てるやら、髪を束ねるやら、襟を掻合すやら爲ながら、「眞實にお氣毒さまね。あんな親父は速く死んぢまや可い。」と涙を袖で拭つて坐直した。芳雄は直に自分の父のことを憶出した。同時に多少娘に對する同情の念も動いた。看れば顔は細面で、亂懸つた黒髪の頸元細りと、血色こそもう處女の清い鮮かなところはないが、皮膚も滑かに、目も涼しく、眉尻の較下つたあたり可愛嬌があつて、丸味を有つた鼻

も調つてゐる。口が心持ち喰着き過ぎたので、總てが少し逼迫しく見える。

芳雄が何とも言はぬに、女は氣が軽く、「今度のこと、貴方も知つてゐるんでせう。」と言つて、睫毛の長い目を相手の顔に見据ゑる。

良久あつて、「ほら、貴方の御父さんだか何だか、羊羹色の洋服着てるお爺さん！」と妙に頸を杓くる。

芳雄は何を云ふかと思つて、目を舉げた。

女は愈よマジ／＼爲て、「貴方は些とも似てゐやしなわ。」と咳く。

少時してから、「元の起源は、あのお爺さんが、私を妾にやらないかつて勧めたからなんですよ。」

芳雄は驚いた。而して目の色を變へて、「父が？」

「然ですよ。」と女は大きい目をして、「ぢや貴方知らないんですか。」

「いや些とも……。」

「さう、憫れた、随分迂闊ね。だから那のお爺さんは、貴方にも秘してゐるんでせうよ。」何時のまに老父は那樣事を計んだか、芳雄は少しも知らなかつた。一體此の亭主と其程

心安くなるほど來もせぬのに、いや可恐い素挺い爺だと、芳雄は憫返つた。けれど那父ならば其位のことには遣かねる。五十面さげて、何時まで小才を働かして、何處まで子供に恥辱を與へやうと云ふ氣か、幾んど判断がつかぬ、と芳雄は頭胸が燃えるやうに激して來た。

「それは全體何時頃のことか知ら。」

「此話の持上つたのは、然らね、二十日も前の事てせうよ。」

芳雄は憫れながら、「而して其先方と云ふのは？」

「先は青山の華族さまのお屋敷、と云ふんですがね、と女は小焦れたさうに、ガツクリとなつた頭を振つて、「それは随分甘い話でしたの。嘘か眞實か知らないけれど、何しろ百萬圓以上の財産があつて、其て一切の事は那のお爺さんが取仕切つてゐるつてんですもの。だから私の處の那の没分曉漢は、もうお先眞暗、有頂天になつて逆上せ切つてたんです。何でも大分手着も戴いたやうですから、其て那歴に焦燥するんでせうけれど、那のお爺さんの中へ入つて、今頃は大方頭痛鉢捲なんでせうよ。いづれ二人で疊許かづつ願けたんでせうから。」

「それは眞實かね。」

「眞實ですとも。お爺さんに聞いて御覽なさいなね。」

聞けば成程と頷かれる節が多い。と云ふのは、丁度其比父の手から宿への拂は別として、餘分の小遣をくれたのも既に不思議であつたのに、宿の待遇振が、急に一變したのも、何だか理由が解らなかつた。部屋も六疊へ移せば、夜の物も總體綺麗になつた。第一あの亭主の聲の出所、目の色まで全然と違つて來たのが、何よりの證據だ。

「ぢや父から持込んだ話かね。」

「其處のところは判らないけれど、何しろ巧く請合込んだのは那のお爺さんですのさ。」

「それで其話は其限かね。」

女は氣のない顔で、「如何ですか、私も其後の経緯は知りませんが、行つたにしても、向が厭になるか此方が厭になるか、何も長くは續きませんよ。第一生娘の意で可成順しくして居るなんて、そんな窮窟な眞似がしてゐられるもんですかよ。……尤もね、」女は一調子かへて、「あの没分曉漢だつて、慾の皮が突張つてるだけで、大根は好いんですから、後ぢや屹度私に頭を下げて來るんです。自分だつて然しなげや損ですもの。」と獨て笑つて、「少しばかり持出したつて何だ。こんな屋臺骨張つてるのは、一體誰のお蔭だと思つてる

んだ、ふん、面白くもない。」と舌打一つして、「どうも……。」と身を起して、散々に崩れた頭髮を氣に爲いゝ出て行つた。

あの女もしたばた爲いゝ、因業老爺に血を絞られて了ふのだ。口ぢや豪さうな御説を并べても、産みの親なら生涯其手から自由になる事は出來まい。綺麗な男を見ると、其檻から飛出して、空に羽を伸さうと跳くのであらうが、其でも親に有難がられて、其を多少自分の矜にしてゐないでもない處が、寧ろ憫むべき動物だ、などと思ひながら、芳雄は其行末を思ひやつて、好奇な空想を弄ふのであつた。

其は其として、今度父親が來たら甚く小言を言つてやらう。而して今後斷然父親の補助を謝絶しやうと、芳雄は翻つて考へた。同時に父の此迄の失敗だらけの生涯が、種々頭腦に浮んで來たが、然し不斷物に誘惑されては働かぬ、那の小才を持つて産れたのが大體父の不幸なので、今更責めても追着く話ではない。眞澄の思つてゐるほど危険でも冷酷でもない人間ではあるけれど、親としては此位不安な親も鮮からう。其で顔を見ると、何かなしに癢に觸つて、妄に反抗して見たくるのであるが、那樣事て那の性癖が今更矯められる道理もあるまい。よし親父も自由なら、此方も自由、何を爲やうと勝手だ。救つてやるべ

き時が来た時救つてやれば其で可い。

「まあ當分然う決めておかう。」と決断して丁ふと、今度は思想が復舊へ絢を戻して、宿の亭主父子の事が氣にかゝり出す。

一體あんな人間が、左に右幸福な其日を送つてゐると云ふのが既に解らぬ。世のなかには、其日のパンがなくて子を殺して親を罰する法律があるのに、我子の肉を切賣して公然腹を肥してゐられると云ふのは餘程の不思議ではないか。其を又、然程に不思議がらぬ社會とすれば、餘程不條理な社會ではないか、尤も世のなかは不條理と不條理とで成立つてゐる、人情其物すら矛盾だらけだ。屠牛所へ曳れる牛を憐む人はあるが、其肉は毎日平氣で啖れてゐる。動物虐待防止會の運動が如何に盛になるとしても、都人士の食ふ牛肉の量の減る例は先あるまい。……あの猿張老父への制裁と言つては、人から爪弾かれると云ふ單に其だけで……其から如何かすると表面の分疏だけに過ぬ。否其また人類の肉體を、金で買はうとする人があるとすれば……其が若し動物虐待防止會員に列して榮とする徒であるとするれば、其こそ愈々滑稽だ……左に右、あの老爺の顔見るのも不愉快だ、言迄もなく最初から愉快な家ではなかつたが、這座事があつては尙居堪らぬと言

つて今急に何處へ行くと云ふ譯にも行かぬ。暫く父との關係が如何なるか、其を見てからの思案にしやう。と薄暗いランプの影に坐つて、彼を考へ此を考へてゐる處へ誰やら後へ来たやうな氣勢がする。振願つて見ると、其は父の眞吾で。

眞吾は毛氈立つたやうな撫の單衣に紺の羽織を着て居る。月はもう十月に入つたので……其でも尙なかく暑い。で、聲もかけずに居ると、老人は「は……」と溜息一つ吐いて、如何したものか、例にない艱しい面構で、ベツタリ壁際に坐る。

ペラ／＼した袖口を捲揚げて、手で額を撫揚げながら、弱い聲で、「其後如何したな。」芳雄は何だか胸を壓つけられるやうに感じたが、平氣で、「僕ですか。別に如何もしません。」

父は「ふん、」と横を向いたが、少時してから、

「眞澄は來んか？」

「來ません。」

「彼奴も冷酷な奴だな。」

芳雄は意外に思つて、「如何してッす。」

「……そりやお前の處へ來んのも解つてをるが、私が此間白山の彼の宅を訪ねたところか……」とふつと氣が脱けたやうに、其限黙つて變に冷笑してゐる。

「ぢや兄を訪問したんですか。何だつて訪問したのです。」

「何だつて……何だと云ふ理由もないが、父子である以上、居所が知れてみれば知らん顔でも居られん。それは、兄の方では親ぢやないと言つてゐるか知らんが、然うも行かんでな。」

「そんな事を言つたつて駄目です。今更尋ねて行かれた義理でもないでせう。」

「莫迦を言へ。假令棄兒にされても親の戀しいは人情だ。泥して學士ともあらうものが、何時迄然云ふ事を腹に持つてゐると云ふのか一體未熟だ。名譽なら名譽、地位なら地位、自分が骨折つて麻痺したものなら久振て會つた親を悦ばせやうと云ふのが子の至情であるべき筈ぢやないか。」

人間は何處まで勝手なものかと、芳雄は憫れもしたが、氣毒にも爲つた。

「それで、兄に會ひましたか。」

「いや、玄關攘を喰つたよ。……え何如だ、玄關攘を喰したよ。」

「……か……」と芳雄は初めは信じなかつた雖然兄の那の狭い見識では、或は那樣事を行つたかも知れぬ。やつても行らんでも其は何如でも可い。自體行くものゝ氣が知れぬ！と直に思直して、

「それで悄悄歸つて來た譯ですか。」

「先然ぢや。」と父はガツクリ首を垂れて、「それでも後から手紙をくれて、氣になつたものと見えて色々辯疏やら理窟やら駢べて寄越したよ。自分は先好いとして、亡つた母に濟まんからと云ふのでな。」と薄笑をして獨語のやうに「母に濟んのは此方が濟んだ。眞澄が何も餘計な心配せんでも可い筈ぢやが……道理らしい道理をつけて、いや早や、血を分けた子のやうにもない奴だ。」

芳雄は笑出して、「そんな勝手を言つたつて爲様がない。實際兄は親と思はんでせう。寧ろ仇敵ぐらゐに思つてるかも知れん。」

「仇敵ぢやない」と親父は目を圓くしたが、「何か知らんが、獨り人間になつたやうに可恐しく威張つてゐるわ。此方も別に會ひたいと思はん。思はんが左に右父子兄弟のなかで、昔は昔、慥して落合つた以上はお互に往來もして、仲よく暮した方が面白いと思ふから、

其で此方から白髪頭腦を下げて行きもするのだ。……他の母親が矢張あゝ云つた剛情な氣質でな、私ばかり悪いと思ふと大に料見が違ふ、加之此方も那時分はなかく、氣が大きい。學校の教師で甘んじてゐられる人間でもなかつたのだ。色々さあ事情もあつたし行違ひもあつて……尤も東京で巧く成功したら養育費位は送るつもりであつたのぢやが、其れが萬事志と違つて、何をやつても左右齟齬だらけで、ついゝ其限になつたやうな始末で……別に眞澄から仇敵視されるほどの不道德は働いてをらんのだ、早い話が、此が逆様で、此方が巧く成功して一廉の地位なり資産なり拵へてゐたとしたら如何ぢやらうか。其場合には眞澄も必ず、あゝ御父さんでしたかと言つて、大切にするに決つてをるのぢや。いや人情は然したものだ。勝手なものだ。」と獨り頷いて、「だから私は大に彼奴の心情を疑ふのぢやが……」

と眞吾は辯解やら恐癡やら駢べて、「何しろ餘り面白くない男だ。」と舌打ちを爲たものだ。

「然ですか。」と芳雄は氣無に言つて、吠をしながら、「然し勝手を言や五分々々でせう。」

「貴様までが然云ふ事を言ふ。」と眞吾は忌々しうに吐く。

「親と子と云ふものは、元來愛情で繋がつてゐるものでせう。」

「然うよ。」

「御父さんに愛情が有りませうか。」

眞吾は冷笑つて、「何を云ふか。金がありや私にも他に劣らん愛情があるわ。金がないから子にまで莫迦にされる。」

「金で父子の愛情が買へるですか。」と芳雄は矢張莫迦にしたやうな口を利いて、「實際愛情がなければ爲方がないんだ。是迄の兄に對する貴方の仕打は、決して愛情があるとは云へませんからな。其を兄に愛情を強ひるのは無理でせう。僕にしたつて、親を然う大切と思はんです。」

「途方もない事を言ふ奴だ。人間其元を忘れて何が出来ると思ふか。」

芳雄は笑ひながら、「だけど御父さんなんか餘り子に孝行を強ひる資格のある方ぢやないですか。」

「孝行を強ひる。誰が強ひたのぢや。お前迄が然云ふ事を言つて、眞澄の肩を持つなどは宜しくな。」

「然ですか。芳雄は横を向いて、何にせい、兄の處へなぞ行かん方が可いでせう。」
「私も然う思つてをる。眞吾も急に萎れて、彼奴の爲には取らんが、爲方がない。……
唯少し困つた事は……。」と何か言かけて連に首を傾げ出した。
「此の娘の一件だらう。」と芳雄は腹で輕蔑しながら氣にも爲ないで居る。
眞吾は少時してから不圖顔を舉げて、「それで何如ぢやらう、眞澄の生計は可也豊であらうか。」

「知りません。」と芳雄は頭を振つて、「僕には那樣事は解りません。」

「あの様子では、始末して金を溜めてをるだらうと思ふが……然し高が教師で、溜めてをつた處で數の知れたものだらうが。」と芳雄の顔を見たが、何のために那樣事を訊くかとも言はぬので、更に出直して、

「何如だ芳雄、嫁の實家と云ふのは可也の生計をしてをる様子か。」

「一向知りませんよ。」

「迂闊な奴だ。」と鼻で笑ふ。

「そんな事を調べる必要が有ませんもの。」

「其も然か……。」と眞吾は張のない聲で言つて、「お前のやうに然う物事に無頓着でも困るが……眞澄は一體月給を幾許取つてをる？」

と矢張其事を氣にする。

芳雄は煩くなつて、「そんな事を詮議して一體何に爲るです。餘計な……。」

「まあ然う怒つてくれるな。眞吾は手を振つて、何もお前が氣を揉むことはなし。」

「けれど御父さんは些と變ですね。兄に無心でも爲やうと云ふんですか。」

と切込まれて眞吾は妙に狼狽しながら、「まあ可い。」と制しておいて、抜からぬ顔で、「何に他でもないが、餘り豊でもないやうならば、何時か口を切つておいた貧民子弟の幼稚園、わの方へ實は周旋しやうかと云ふ私の愚案ぢやが……。」

芳雄は苦々しさに「何如ですか。御父さんの言ふ事なんぞ、少しも信用が出来ません。又果して然う云ふ計畫をなるとすれば、非常な心得違ひだらうと思ふです。」と少し開き直る。

「……………」

「然云ふ事業は決して營利的のものぢやありませんから、固より獻身的に働かなければな

らんでせう。其とも御父さんは儲ける意なんですか。」
「まあ可う。」

「可かないです。……其は別問題としても、御父さんは然云ふ事業に係はる資格がありませんか。」

「莫迦を言へ。」と老父は深くも咎めず、開流してゐる。

「妾を周旋するやうな人が、教育事業が行れますか。」

真吾は狡黠い目でシロリと子息を見て、「そんな事を誰が言つた。」と言ふ顔をする。

芳雄は少し目を曇まして、「御父さんが其迄に墮落してゐるとは、僕も思はなかつたです。」

……高等顧問、紳士ゴロとか何とか言はれても恐く辯解の辭はないでせう。」

「まあ然う一概に……。」と真吾は細い首を縦に幾度も掉つて、「お前など未だ年も若いし、又世間も知らんから、其て然う向になつて怒るのであらうが……それは怒るのは無理もない。潔白な青年としては當然の事であるが、然し然云ふことは、自體書生の關係すべき事でもなければ、又知るべき事でもないの……書生は唯本を讀んでをれば其て可い。此の私……御父さんなどは、もう濟んで了つた人間であつて、先に何の希望も

ない、誠に心細い人生の末路を辿つてをるのだ。従つて會社に何の用もない人間で、もう放抛つておけば其て深山なのぢや。お前など若い者は決して然でない、寔に前途多量の體で……。」と辯じ立てやうとするのを、悟しさうに芳雄は遮つて、

「そんな事は知れきつてゐるです。誰も御父さんの真似をしやうとは思ひません。」

「さう、其でなくて如何するものか。其心懸て一つ行つてくれんと困る。」

芳雄は急に莫迦々々しくなつて、ふつと押黙つて了ふ。

が、父は何となく照れた形で、連にモゾ／＼して、「いや、詰らん事が耳に入つたものだ。自體然云ふ事を聞すと云ふのが大に間違つてをるので、其も、周旋したと云へば先爲たやうなもの、實は話が成立した譯でもなければ、然う大業に言ふほどの事でもなからうかと思ふ。然しまあ可い。何に紳士ゴロとでも何とでも云ふが可いのだ。」と獨てブツ／＼言つてゐる。

「確に何如かしてゐる？」と芳雄は思ひながら、黙つて見てゐると、真吾は不圖顔を擧る、

「芳雄、私は少々酒を取らうよ。」と妙に遠慮する様子も可怪い。

「御勝手に……。」と云ふ目色をすると、父は躊躇して、

「いや休さうか。實は酒で失禮をやつた！」

「ぢや先方を失敗つたでせう。」

眞吾は頭を掻いて、「實はな、少々遣込をやつて、今の處手も足も出んことになつてを。それで私も、這度と云ふ這度は弱つたよ。」

芳雄は其顔を成つて、「何の金を遣込んだです。」

「それは其の、例の幼稚園の寄附金だがな……。」と面目なげに僞く。

「幾許ぐらゐ遣込んだのです。」

「さやう、」と眞吾は胡散くさい目容をして、「先づつと二千圓近くにもならうか。」

芳雄は目の色を變へて、「二千圓？ 莫迦げな話です。何だつて那樣大金を……。」一體何如したのです？」

「まわや然う心配してくれるな。お前に話した處で解る筈もないが、實は其の、少し山を張つたのぢや。……株だよ。株を買つたんだ。」と云つて我と我を嘲るやうに笑ふ。

「何だつて那樣莫迦なものを買つたです？」

「何だつてつたつて、金が儲けたいから買つたんだよ。尤も初めは手堅くやつてをつたのだ。少しは懐も暖かくなつた。其で休せば可かつたのだが、お終に郵船を百株ばかり買つて、うんと儲かる見込のところ、此奴が運が悪い。」と眞吾は頭を振つて、「何しろ六百圓ばかりの差金か、毎日追敷々と注足すばかりで、寄附金を二三口集めて踏張つてをるうちに、到頭持切れなくなつて切つて了つたところだ。些と千二百圓許の損が立つた。其奴を取返さうと云ふんで這度は小さく……。」と言差して、急に氣が沮んだやうに黙つて獨り首を傾けてゐる。

少時してから、「其と云ふのが、元東京で一時警察へ奉職してをつた、其時の巡查仲間、電車の中で會つて、久振で京橋の天羅鉄屋で一杯飲んだのが疾つきよ。其男が、足を洗つて今ぢや株で飯を食つてをると云ふんで、話を聞くともう甘い事づくめだ。私も其時懐中に百四五十圓の金があつたものだから、さあ堪らぬ、食指連に動く云ふ鹽梅で、まわ一時流用して二三株その男に連れられて買つて見たのが發頭だ。……何に遣つてをるうちにや又挽回することもあるだらうが何しろ弱つた。田中と云ふ、此も古參の家扶ぢやが、此奴がなかく喰へん奴で、何しろ私の首根こを押へてをるので、私も頭が上らん。いや殘

念だ、残念だが爲方がない。』

黙て聞いてゐた芳雄は、『父親も老たな！』

と肚のうちに思ひながら、『それで善後策は何如なるんです。』

『別に是と云つて、私にも考はない。其で左に右一週間待つてくれると云つて、其ま、伏せとしておいたのぢやが、其一週間も今日で切れて了つたやうな始末で……。』と言つて元氣らしく、『まあ可い心配するな。』と云ふ迹から自然に首が重く下る。

『ぢや何如する意です？ 放抛つておけば法律の罪人でせう。』

『まあ然云ふ譯だが……。』

『爲様がないな。』と芳雄は仰いで吐息ついた、『眞實爲様がない。此際眞澄が少し話せる奴なり、私も一つ突つかつて他から金を借出す策もあるから、然すれば何如かなるだらうが……。』

『そんな處の好い話がありませんか。』と芳雄は窘めて、『其流儀だから、そんな失敗も出来るのです。一體御父さんは其の何如かなるだらう主義だから困るです。第一有もせぬ才を……。』

『まあ然言つてくれるな。失敗したから悪いやうなもの……。』

『いや成功すれば尙悪いです。』と芳雄は嵩にかゝつて、『僕はそんな不正な事は、絶対に反對です。』

『然云ふがな……。』と眞吾はにやりと笑つて、『初め二三回、ちびく儲かつた時の其心持は何ともいへん。又不正呼はりをする日になれば、不正でない金儲が世の中に幾許あると思ふ。唯拙いか巧いか……。』

『まあ、何でも可いです。』芳雄は憤々した調子で、言ふばかりない苦痛の色を表す。看ると其目は段々曇んで来て、果はポロリと涙を零す。

と、うと身を起して、帽子を掴んでふいと部屋を出た。

入口迄出ると、帳場格子に何時も我張つてゐる白じやけた親父の顔も見えぬ。其で貧乏くたい板着草履を柵から引張下して穿く拍子に、腰硝子の障子から透して見ると、矢張亭主夫婦と娘とが差向ひになつてゐて、其様子では雙方とも、もう初めの凄じい見脈に引換へて巧く折合つて了つたらしい。と何やら神さんの追従笑が洩聞えて、「何でも好いやね何せ末は清ちやんの財産なんだから……。」と言つて座を立つ影が眼に入つた。

「愈よ娘も往生したと見える！」と芳雄は何だか莫迦な夢でも見たやうな氣がして、他人の事ながら不思議に忍々しい感もする。一體こんな事が圓く治まるなどと云ふのが、抑も碌でもない事なんで、ストライキならもつと劇烈に遣る處まで遣けて了へば可いのに、なとと詰らぬ事を考へながら、ふらりと表へ出た。

「其は然と、一體父親は何如する意なのか知ら。」と芳雄はむしやくしやすする頭腦の底から事の成行の明かな判断を採出さうと力める。

か何せ金の出所のあるべき筈はない。今の父の身の上で、幾許腕いたつて二千と云ふ大

金の工面の着かう筈がない。して見ると可厭でも法律の制裁を受けねばならぬ、事によつたら禁錮を食はなげやならんかも知れぬ。否必然然うなる。然すれば必然牢死……しないでも滅切弱つて来る。情ない話だ。金のために使役されて喰い飯を喰はねばならぬなどは、老爺としては餘りに目端が利かなさ過ぎる。成程老父の言ふとほり、金に使役されて人間の本分を忘れてゐる不正な人間は澤山ある。富豪だ紳士だと云ふ輩は不殘其だが……と言つたところで追着かぬ。すると看々父の引れて行く處を見てゐなければならぬのか。其田中とか云ふ家扶に會つて一つ話して見やうか。話した處で赦してくれる所由は無論無い。其かと云つて兄の耳へ入れて拙い思をさせるだけでも詰らぬが。氣を揉んだところで爲方のない話しだ放抛つておかうか放抛つておけば老父の死活問題だ……考へてゐるうちに何時とはなし五軒町の通へ出た。と、遂にバツと眼界が廣くなつて、電車や腕車や人のごちや／＼してゐる街の雑沓が、沈んで遠くなつたやうな目と耳へ一時は大波の如く寄せて来る。月の華やかな美しい晩で、高く澄切つた碧空の星の牙加減が、もう何となく秋の氣分を思はしめる。露の滴りさうな柳の蔭へ寄つて行いてゐると、老父に關連して、色々の思想が頭腦へ閃いて、平生胸に鬱積してゐる抱負や主張や何か、莫迦らし

くなり、其程金が大切な世の中なら、一つ方針を替へて、大に資産を作つて見やうかなどと思つても見る。

「然し萎げ切つてゐる老父を、一人宿に残しておいて……。」と急に何だか心配になつて、妙に後髪を引る、やうに感じた。と思ふと、清い月影に、涙ぐんだ目で見送つた故郷の慈母の面影が不圖目に浮んで来て、上京以來會て覚えぬ哀愁に胸が壓される。

廣小路へ出て、三橋の袂から凡そ十五六間の處まで来た時、横からせか〜と寄つて来て、いきなり低い優しい聲で、

「芳雄さん！」と呼ぶものがある。

其調子は非常に馴々しかつた。

芳雄はハツと思つて立停つた。聲の主は滋野で、香味がかつた然に紺の袴羽織を着て、手に小い緞茶色の風呂敷包を持つてゐる。夜の故で白い顔は透徹るやうに滑に、目は活々して言ふばかりない情を含んでゐる。

寶石のきらつく指で、些と目眩しうに扇髪の前髪のおたりを撫でて、「貴方何を平考へて行いでいらつしやいますの？」

芳雄は些と狼狽へたが、帽子を取つて、「先日は……。」

「いゝえ。」と女も更まつて會釋して、「もう夜分そんなにお歩きなつて可いんですか。」

あの後も一度訪れてくれて、其からもう一ト月にもなるのに、妙な事を聞く女だと思ひながら、「もう大丈夫です。」

「然ですか。……今何方へ行しやるの？」

「たゞ逍遙してゐるんです。」

「おやまの……私今買物をして来たんですが其處いらまで御一緒に参りませう。」

と歩出す。

芳雄も黙つて三尺許離れて行出す。

滋野は、中へ割つて入る二人連の土方の醉漢を遣過してから、少し芳雄の方へ寄つて来て、「何と云ふ今晚は涼しいんでせう。」と頬つべたを手で抑へながら、「御父さんは其後お變なぢやませんか。お國の阿母さんも……。でも私のような片親と異つて、お兩親とも御丈夫で可うございますね。」と可羨しうに言つて、「些と私の宅へもお遊びに入らつて下さいな。少しも遠慮のない宅ですから。」

「有難う！」とは言つたが、自分など野人とは逆も反の合ふ筈もないし、生活に不自由のない暢氣な、而も女連の家庭へ入つて見た處で、何が面白からうなどと思つてゐる。然し滋野其人は何となく氣に入つた。顔も平生から描いてゐる理想の朦朧してゐたのが、今其の正の者を面り見るやうな氣もして、心持は深く探らんから解らんが、一體に物解りの好い女らしい。第一何とも云へぬ温味のある女で、母のやうには沈んでゐないだけ氣を浮立たせもする。但自分のやうな逆境に居て、貧乏に苦しんで、妙に僻の多い人間が、心に少しも不幸の影のない這麼女と眞實に接近する事が出来やうか、恐く意氣は合ふまい、と考へながらも、何だか一般の女に合ふ時の心持と心持が違ふ。其で變に女の氣持を採つて見たいやうな慾望も起る。——若いうちは一般に女に對して一種の研究的態度や好奇心を持つものだが……。

滋野は勸工場の前まで來ると、「お待ちなさい！」と不圖立停て、案内でもする氣になつて、「貴方勸工場へお入りなすつた事があつて？」

「有ませんけれど……。」

「這麼騒々しい處お嫌ひ？」

「必要がないから、別に入つて見たことはありませんけれど……。」と可厭なやうな顔もしない。

其處で揃つてバツと明い構内へ入ると、急に氣が差すやうな、莫迦らしいやうに思はれて……。芳雄は唯黙つてズン／＼附いて行く。

人はゾロ／＼／＼行いてゐる。芳雄には更に何等の趣味をも感ぜないが、然し綺麗に駢んだ物質には多少刺戟される點もある。何だか姉と一緒に物買ひに來てゐるのではないかと異しむ事もある。けれど、詰らなさうにけろりとして行てゐるので、滋野もズン／＼歩を速めて、何處か迂路でもするやうな氣でゐる。少時すると不圖繪葉書屋の前に停つて、

「貴方繪葉書はお嫌ひ？」

芳雄は苦笑して、「贅澤だから餘り使ひません。」

滋野は水彩やポンチ畫のを五六枚買つて、其内好ささうなるを擇つて芳雄に渡すと、お義理に些と其繪を見ればかりで、「有難う！」と云つて直に懷へ捨込む。

再び外へ出ると、滋野は、あ、詰らなかつた——と云ふ顔をして「貴方何方へ行しやる。」

「公園でも散歩して歸らうと思ひます。」

「ぢやお伴しませう。」と又押駢んで行出しながら、「何なら宅まで入つしやいませんか。公園の直背後ですから。此頃は中學へ出ます親戚の者も一人居りますから。」

「は、有難う。僕も未だ體が決らんものですから、暢氣に遊んでも居られないです。」

「でも學校へ出て在やるぢや有ませんか。」

「けれど、其も何如なりですか、父が那云ふ無責任極る人間ですから。」

滋野は意外に思つて、「然うですか。其はお困りでせうね。」と少し經つてから、「尤も兄さんがお助けなさると可いんですけど、私徳云つちや何ですけれど、少し片意地ぢやないかと思ひますわ。」と芳雄の顔を見上げて、「他の事と違ひますからね、兄さんも那樣經驗のない方でもないんですから、もう少しお考へなさると可いですけれど、私も其事を、其となく申上げて見た事もありますの。全部放抛放しと云ふお考でもないらしいんでせうけれど、其かといつて思切つて何如すると云ふお心持もないやうなんです。尤も姉が少し解らずやの方なんだもんですから、兄さんも工合が悪いんでせう。」

「然し、僕は兄に何如して貰はうと云ふ考へはありませんから。」

「然ですか。……其にしても仲よくだけは爲さらないと、お互に面白い事は有りませんわ。」

「は、」と言つたさき、芳雄は今差か、つた石段を大股にひよい／＼上つて行く而して、上で些と待合して、銅像を少時見上げると横の柵際へ寄つて、濛々と夜の濛濛に裏まれた廣い市の光景を、何時迄もく眺入つてゐる。傍に滋野も物思はしげにゐんで居た。

「もつとお歩きなさいませんか。」

と云ふと芳雄は深い夢から覺めたやうに、

「はッ。」と云つて柵際を離れる。

で、枝葉疎な櫻の木立際へ長い影を引きながら入つて行くと、榎材とした梢から星の光が冷々と人の顔を照して、其處らかもう大分寂れてゐる。滋野は薄寒さうに襟を掻合はして、「公園ももう這麼に淋しくなる時候なんですか知ら……。」と呟いて、「此間あんなに暑かつたのに、速いもんですね。芳雄さん、貴方がお出でになつてからもう四箇月になりますよ。」

「わ、然ですな。」と芳雄も調子はづれの聲で。

「でも何ですか、落着いて勉強だけは出来るんですか。」

芳雄はジロリと滋野の顔を見て、「なか／＼然う行きません。愚父が始終何か知ら事件を拵へては紛擾してゐるものですから……今度も事によつたら獨立しなげやならんかも知れません。」

「え然う?」

「尤も其は最初から覺悟してゐたんですけれど、愚父の事を好むには實に驚くです。」

「そんなですかね。甚麽事を爲さるんです?」

「いや、幾どお話にも何にもなりません。」と芳雄は笑つて空を仰いで、「あんな厄介な父を持つと、少し意志の弱い者は必ず墮落するです。だから棄てられた兄の方が寧ろ幸福だつたんです。側に居れば親は矢張親ですから如何すると云ふ力がない迄も心配しない譯には行かないんですから。尤も子に對する親の義務と云ふ程のものは勿論、愛情と云ふものは毫も無いんですから、踏つて死うと法律の罪人にならうと僕が介意んやうなものですけれど……。」と調子が激越して来る。

「まさか貴方、いくら何だつて……。」

「いや然でないですよ。格別惡意があると云ふ譯ぢやないんですけれど、爲る事は幾ど無茶です。兄が相手にしないのも強ち無理はないです、僕も爲方ないから、可成冷淡に見てゐやうと思ふんですけれど、其も事體によりますから。……道徳ぢや勉強どころか、眞實一日だつて氣樂に暮せないます。だから僕も色々迷つてゐるのです。寧ろ外國へでも行かうかと思つたり……外國へ行つて丁へば一番好都合です、けれど然すれば又母が可愛相ですから。」

「そんなぢやお困りでせうね。」

「僕はやくざな親を持つほど不幸な事はないと思ひます。」と打つけるやうに言つて、「少し眞面目にやらうと思つても、遂どうも頭腦が紊れて、前途の事や何か考へてゐられなくなりますから。假令僕に一つの抱負があるとしても、愚父の生きてゐるうちは逆も目覺しい發展は出来なからうと思ふです。愚父は性質として子の爲る事を願しく見てゐられる人間でもありませんし、何か持擧げちや事業の妨害をするとか、名譽を傷けるとか必然行ないます。直接自分が妨害されないうまでも、世間に對して罪惡を働けば結局其だけの報いは僕の處へ廻て来る。僕が慈善事業を行つて傍から、父が高利貸を働くとすれば、結果

は何にもならんのですからな。まあ、父は然云ふ風なんです。是迄にも其が爲に母と僕は、何のくらの領分を狭められたか知れやしないんだから、もう其は豫想しなげやならないのです。」と芳雄は今しも其事ばかりに腐心して、不平で「堪らなかつたので、遂明ッ放しに思つてゐる事を辯つて了ふ。

「ですけど、そんな先の事まで……貴方も些と神経家で在しやるぢやないかと、私思ひますわ。」

「いや是は例です。けれど、現在もう其以上の事は行つてゐるんです。」

「え、御父さんが？……失禮ですけれど、何か外聞の悪い事でもなさいまして？」と滋野は一層體を寄せて心配さうに訊く。

「そりや演つたんです。けれど、お話するがものは有ませんから……。」

「然う、そんなに立入つて伺ふのも失禮ですけれど……何か私其の力にも及ばない事なんてせうか。」と尻揚に言つて、芳雄の顔を見あげた。

「いや其は逆も……僕も爲方がないと断念してゐる事なんです。」

「然うですか。でも那樣重大な事ですと、一應御兄さんにお話なすつた方が可ぢやないぢや

ありませんか。」滋野は極めて眞摯な調子で。

「兄の力にも及ばない事です。」

滋野は力を落して、「其ぢや……。」

背後からホカ／＼と靴音がするので、談話がふつり断れて了ふ、氣が着いてみると、此はもう竹の臺の廣場で青い電燈の光が一面に深ひ、小さい人の影がチラホラと見える。ていから訊いても可恥さうにして事實を明ぬので、滋野も断念めて、

「貴方もつとずつとお歩きなされる。」

「は、宿へ歸つて愚父の顔を見るのが不愉快ですから。」

「ぢや御父さんがお宿に在やるんですか。」

「は、愚父ももう身を置く處がなから……。」

滋野は目を圓くして、「へえ、然う……ぢや御心配でせうね。那麼に確な事を言つて入つて、其で那樣なんですかね。お酒の上の何かお失敗なんですか。」と矢張り聞きたがる。「まあ然です。事によつたら或は法律上の……。」と首を掉つて、「もう到底駄目です。何しろ金銭問題ですから。其も少しの事ぢやないので、非常な……。」

「其ぢやね……………」と滋野も首を傾て我事のやうに落膽して、「百圓か其處いらの事だとね、御兄さんに御相談と云ふ事もありませうけれど……………」と立停つて芳雄の顔を覗て、「何しろ御心配ね。何とか方法がないんでせうか。」

「いや、那樣御心配ぢや反つて何です、貴方に心配して戴く理由は少しもないんですから……………」

「でも矢張親戚ですわ。加之私貴方の御境遇が如何にも……………」と聲を呑んで、「折角立派なお考があつても、そんな事で挫折してお仕舞なされるやうぢや遂に満りませんからね。」芳雄は苦笑して、「決して挫折はしません。挫折はしない意ですけれど、」と少し考へて、「事によつたら方針を變へやうかなんと云ふことは考へんでもありません。」

「如何云ふやうにです？」

「それは未だ決定しません。けれど希望を縮少して苦勞を少くするか、希望は其まゝにしておいて、別の方面から着手しやうかと云ふ事です。」

「とは何如云ふ事です。」と訊いたが、芳雄が笑つてゐる言はぬので「出来る事なら、今迄通りに着々歩をお進めなすつた方が可いぢや有ませんか。其とも他に好い方法があれば……………」

……………」

「別に好い方法がある譯ぢやないです。けれども何とか爲なければ、明日からもう……………」と一言差して、「爲様がないです。あんな父を持つたのが不幸です。」と又頭腦が紊れて來たらしく調子が激して、「此場合着々歩を進めるなどと云ふ事は、非常に意志の剛健な人でなければ到底出来ん事です。」

滋野は情なさうに、「何故です？貴方は、ぢや意志がお弱いんですか。……………」だから、そんな事を言はずに、學費ぐらゐは御兄さんだつて、絶対に御心配なさらないと云ふんぢやないんですから。」

「……………」いや僕も兄の厄介になりたくはないのです。」
「それならば其で、無形上又お力をお假りなされると云ふ事もありませんから、まゐ然ら焦燥なさらないで……………」と滋野は引張るやうに歩出して、「それで、お宿へお歸んなすつても、何せ面白くないのなら、何如です、此から私の宅まで入つしやいませんか。え、然らなさいまし、何だか餘程鬱いて在るやうですから、然らして考へてばかり在ては尙ほ可けませんから。」

「は、有難う！」と芳雄も何となく此まゝ別れるのは可厭なやうな気がしたが、「併し然もしてゐられませんから、此でお別れします。」と立停る。

「然う！」と滋野は本意なささう、「それはさあ御自由ですけれど……さや真直にお歸りなさいますか。」

「は、」と言つて芳雄は頼ない目で一時滋野の顔を睨めて、帽子を取つてお叩頭をする。

「おや其うち私からお伺ひします。切望御父さんに宜しく。」

芳雄は滋野に別れて後へ引返した。で肚の裏で何だか餘計な事を辯つたのを極悪くも思ひながら、「あゝ、こんな事で心配かけるんぢやなかつた。」と忸怩として後を振り返ると、まだ道の真中に突立つて自分を見送つてゐる其の姿が見えたが、些と首を下げて其のまゝ動出した。

芳雄は一町ばかり無意識に行くと、急に體の疲労を覺えて、突如木下蔭の冷たい大い石の上に腰を鉤す。

十二

一時は何と云ふ事なし、唯憤々してばかり居た漣子も、秋になつてから目に立つ程柔順しくなつた。眞澄の収入が著述や何かでぐつと殖えて、生活程度も自然と幾許か上れば、機嫌の取りやうも巧くなつた、其所爲ばかりでもあるまいが、左に右餘りブツ／＼云はなくなつたのは事實である。眞澄が博士論文の調と同時に、近頃學校以外雑誌と云はず著述と云はず、夜深しまでして内職の原稿を書くやうになつたのは、遠からぬ未來に家族が一人殖える事が解つたからで。

言ふまでもなく、其は漣子の妊娠と云ふ一大慶事で、眞澄に取つて凡そ此位の福音はなかつた。第二の我を授かると云ふのは、誰にしても神聖な喜びに相違ないが、彼の場合では、尙一つ漣子の性情が其ために一變しない迄も、今少し家庭的に、今少し夫婦の情誼に縛られる其動機ともなるであらうと云ふ希望がゆくりなく湧て來た。其で漣子を愛する事も、以前に倍して來たが、漣子は格別増長する氣色も見えなかつた。

をり／＼氣が脱けたやうにポーツとして、何か言懸けると、頬さうにふいと横を向いて

了ふ癖と、裁縫などしてゐて、ふいと手を休めて庭を見てゐる其目が少しづつ曇んで來るかと思ふと、突然仕事も何も投出して、其處に突伏して了ふヒステリーの癖とは今でも希に其發作を見る、が其も以前ほど劇しくないのであるのみか、誕生すべき赤子の産着や何か縫ふ時は、不思議なくらゐる樂しさうに熱心に針を持つて、其數の殖えるのを何よりの快樂にしてゐる、其様子を見ると、平生が我儘だけに一入哀で、理想が何如の婦徳は慙のと言つて、時とすると姪々説法を聞せる事のある眞澄も、つい抱あけて接吻してやりたい位に思ふ。左に右眞澄の家庭としては、今が其愛情の實を結びかけた秋である。

今日は日曜で、而も久振の秋晴である。空は一面に碧み渡つて、白い小い雲がボツ／＼浮いてゐる。日當の好い隣の庭はコスモスの盛で、お蔭で此の櫓にも折々綺麗な蝶が舞込んで來る。柵の縁に差込む日は、未だなく／＼猛烈なので、其處に取出した臥椅子に横はつて本を見てゐた眞澄は、怕れて急に内に引込む。

と其處へ現れたのは機嫌の好い澁子で、顔を見合す、と八字を寄せて、
『可厭、貴方は！』と少し甘つたるい調子で、

『行くんだか行かないんだか、人に氣ばかり揉して…………。』

看れば水々した顔に肉色の白粉淡く、頬は櫻色に仇めて、其また束髪の出來榮と云ふのはない。身には此頃仕立つたばかりの格子縞の御召の袴を着て、帯も丁と結んで、手袋を穿めないばかりに爲てゐる、滋野母子を誘出して秋草見と洒落る筈段なので、

『慙も甘えるのは恐く妊娠した故だらう。』と眞澄は惚々と其顔を見入つて、

『さあ…………。』と首を傾けて焦らす。

『可厭ですね貴方は！もう腕車を二臺然ら言つたぢや有ませんか。』

『腕車は少し大業だつたね。』と笑談らしく言つて、『此天氣……………に腕車で行つたんぢや少しも運動にならん。』

『また那麼者くさい事を言つて！こんな體して、私根岸まで歩くかせるんですか。』

眞澄は笑ひながら、『まあ御隨意に…………。其代り、今日は何處へも入らんよ。』

『其ぢや満らないわ。第一誘つて行く人に失禮に當るぢや有ませんか。』

『いやお前が満らんのだらう。』

『失禮な、何時私が…………。』

『其も程度問題さ。』

「何でせう、十圓も二十圓も使やしまし。」と腕つける。

「大きな事を言ふ人だ。」と眞澄は吠を生咬にして背延をしながら、「大藏大臣然うくは立切れんからね。」と次の部屋へ入る。

少時すると眞澄は女に手傳せて洋服を着にかゝる。と腕車が来る、下駄と靴が出る。もう出るばかりになつて、漣子がソハハ部屋を出たり入つたりしてゐる處へ、誰かは知らず玄關に案内を乞ふ客がある。

漣子は絶か顔を皺めて、女中に見にやると、其また女中が容易に復つて來ぬ。

「何如したんでせう！」と漣子は憤れくして、今頸飾を結びつ、難しい顔をしてゐる所天を見上げる。

と問もなく女中が復つて來て、客は田中某と云ふ久我子爵の家扶で、父眞吾の事に就て急に面談したいとのこと。其で氣を利して、只今お出懸の處ゆゑと其となく断らうとする。と、客は辭だけは鹿爪らしいが、言ふ事は眞逆に横柄になつて、御主人の名譽に關する事だが、お會ひなさらんと云ふのなら其迄……と冷かに女を見下した、其目こそ可怖らしいが、風采は何如にも堂々と、紋着羽織に袴を穿いて、色の黒い大紳士である云ふ。

二人は氣色を變へた。

が、眞澄は能くも聞かず、利かん氣の顔に冷笑を浮べて、「何、名譽……ふん、生意氣言つてる。甚麼奴だ、幾歳許の……。」

「然やうでございます。四十四五ぐらゐの……。」

「ではな、眞吾の事は、一切關係しませんが然う言つてくれ。」と吩咐けたが、「待てよ。」と一思索して、

「可しく、ぢや談話だけ聞いてやらう。左に右二階へ上げて置きなさい。」と更めて命ずる。何か酷く氣になるらしい様子も見える。漣子は急に不興氣な顔をして、今迄調子はづれにソハハして居たのが、打つて變つてツンと澄して了つて、口一つ利かず、簞笥の前に立竈つてゐる。

と看ると眞澄は劍相な顔に邊に笑を湛へて「然う落膽するもんぢやない。」と今着けたばかりの時計を引出して見て、「お、まだ早い。五時間も遊ぶ時間があるもの。」と言つて二階へ上る。

良久あつて、女中が二階の用を足してから部屋へ入つて來ると、脱棄の着物を一所へ取

纏めて叮嚀に疊みにかゝる。而して怖々主人の顔を見ながら、氣毒さうに、

「奥さま、もう二三分の處ろでございませしたね。」

それには返辭も爲す、漣子は力なげに溜息を吐いて、持つて居た橙色の肩掛を投出すと、茶間へ出て火鉢の側にベツタリ坐つて、然やつときなさい、行くんだか何だか解りやしませんわ。

「いゝえ何せ奥さま……」と女中が襦袢から袷から帯と、一つ／＼几帳面に疊んで其から眞澄のも綺麗に疊んで重ねた頃は、二階の用談も甚く紛糾つて來たらしく、時とすると二人の聲が一緒になつて、互に押問答してゐるのが微に洩れて來る。

漣子は所在なさに、巻蓑を一本火をつけて弄くり廻してゐたが、急に何か氣が揉み出したらしく、吸差をふいと火の中へ投込むと、衝いと起上つて段階子の下まで寄つて來る。が素より語の明瞭聞えやう筈がない。

「女中は此時茶の間の時計を覗くと目を丸くして、『奥さま、もう二十分二時でございませすよ。』」

漣子は氣の脱けた顔で、『爲様がないね。……一體何を言つてゐるの？お前ちよつと

行つて聞いてお出！』

「はら。」と女中は困たやうな目色をする。「屹度何なんだよ、」と綺麗な目をバチつかせて、『何か面倒くさい事が持上つたに違ないんですよ。』

「は、何でございますか、お金が二千圓失つたとか、裁判所へ訴へるとか、何か然云ふ事なんてござりますますよ。」

「然うでせう。え、然う言つてゐたの！」と漣子は目を圓くして側に寄つて來る。「だから行つて聞いてお出なさいよ、介意やしませんから。私も心配だわ。」

女中は顔を紅くして、『でも奥さま、後で旦那さまが……』

「莫迦な人！立聽したつて、些とも知れる氣遣ないぢやありませんか。」

と可怖らしい目で睨まれて、女は爲う事なく階子を一段上りかけたが、又のつそり降りて來て、口へ手を當て、クス／＼笑出す。

で辛々の思ひで上まで登つめると、赫い顔を眞紅にして今にも飛んで降りさうな浮足で其でも物の十五六分間も瞬きもせず、奥の話を澄してから、嫣然とも爲ないで降りて來る。

女の降りて来るのを見ると、漣子は澄した顔で火鉢の傍に坐込んで、「何か解つて？」と低聲に言つて眉目を張る。

「い、え、何ですか私には……………」

「え、解らなすの？」と漣子は仰山らしく、「……………お前二十三にもなつて其位の事解らなすの？」

「然ですけれど……………」と女中は怏々と、少し首を傾げて、「それは全部解らないと云ふんぢや御坐いませんけれど……………」と少時経つてから、「旦那様がお断りなすつて在やるんでござります。」

「何をぞ？」

「い、え其の……………」と女中は忽ち行詰つたが「旦那様の御父さまが罪人にお成りになつても介意はないから、お金を出せぬと慥う仰るのでござります。」と少しづつ脈絡がついて来て、舌も段々釋れて来る。

「お客さまの方では、其では此方のお顔にかゝるから、お金の事は半分でも可いから、何如にかしてくれろと云ふ御相談でござりまして、其お金を高利貸から世話して御用立て

も可いから、切望然うなさいと仰るのでござります、旦那さまは、又那樣外聞の悪いことは逆も出来かねるから……………もう少しも此方では介はないと仰いまして、何でござりますか、其處のところが大變にお難しさうなお話なんでござります。」

漣子は心配さうな顔も爲す、「あ、解つた。其で丁と解つてゐるわ。」と二三度頷いて、「それで二人で喧嘩してゐるの？」

「は、然なんでござります。」

「ぢや御父さんが、久我とか云ふ那人の主人のお金を使込みか何かしたんでせうよ。」と何の氣もなし辯つて、急に憶出したやうに、「久我と云へば何だわ……………」と女中と目を見合すと其目は看々峻しくなつて、果は深い思に沈んで了ふ。

女中は何の事とも心着かず、些と時計を見上げて、「おや奥様、もう二時少し廻りまして御坐いますよ。」

「可いんですよ。」と漣子は叱るやうに言つて、

「何せお前……………其所ぢやなすわ。」

女中も急に刺戟されて、心配さうに俛いて了ふ。

少時すると二人とも静に二階を降りて来る而して次の室を黙つて通つて、玄關へ出て真澄は愛相らしき辭一つ懸けず、客も唯「失禮しました。」と言つたゞいで、早や爰然と戸が閉る。

真澄は部屋へ入ると、急に元氣を作つて、

「何如したね？まわ行かうぢやないか。」

漣子は浮かぬ顔をして、黙つてゐるので、真澄は怪訝さうに側へ寄つて来て「おや何だか雲行が怪しいよ。今の間に風向でも變つたのか。え漣、如何したんだ？もう行かないのか？」と言つて四下を見廻すと、今迄臺所の口へ顔ばかり出してゐた女中までが、妙に餘所々々しく姿を引込める。

「如何したんだね？遅くなつたんでお前怒つちまつたんだね。え、然か、然だらう？」と傍へ胡坐を組んで、時計を引出して、「まだ些とも晚い事はありやしない。充分遊べる。」と妻の顔を眺めて、「然う遅ければお前先行けば可かつた。向だつて支度に少しは手間取るだらうから……。」

「其や然ですけれど……。」と漣子は低聲に言ふ。

「左に右行かう。不意に客が飛び込んだから、怒つたつて爲方がない。誰の所爲でもないんだ。」

「怒りやしませんよ。ですけれど、今日はお休にさせよう。」

「何故？」と目を丸くして「妙だね。那樣等ぢやなかつたが……」。其とも何か氣に障つた事でもあるのかね。」

「いゝえ……。」

「愈よ可怪い！」と真澄は漣子の顔を熱と噴めて考込んだ。

「いや、それぢや何かね……。豈夫立聽をした譯ぢやあるまい……。」

漣子はジロリと所天を見上げて、「立聽は爲せませんけれど……。今の方は他は何です……。」

「他は何……。」と少し狼狽へて、「それは話したつて仔細はなさい。けれど要するに詰らん事なのさ。加之、何せ碌な談でもないのに、お前に聞かして、折角面白く遊びに行かうと云ふところを、興を殺ぐのも餘り氣の利いた話でもないからね。畢竟あれ限の話で、別に何如と云ふ事はないのだよ。」

「ただ何か不名譽な事ぢやないですか。」

「不名譽？」と眞澄は漣子の目にも著しいほど氣色を變へて、「いや些ども……お前は又何故然云ふ事を言ふのだ。何如して不名譽と云ふ事を知つたのだ。」

漣子は押返して、「だから矢張不名譽なんぢやありませんか。」と聲に出して笑つた。

其の笑聲が何となく肚の底へ徹へて、ぐつと瘡癩に觸つたので、「お前は何かの癖に人の揚脚を取る算段ばかりしてゐる、其が抑も……」と言はうとしたが、直に折れて了つて、

「お前が何か疑念を持つてゐるなら、其は話しても可い。まあ恠さ。」と火鉢の前に坐直して、刻意を一服吸ひながら、

「いつかも話した愚父が……尤も向は子の意でゐるか知らんが、此方は親の意で居ないので、左に右父として置かう。其父が久我と云ふ華族の委託を受けて幼稚園とか設立する事務を取扱つてゐるうち金を使込んだと云ふ愚にもつかん話さ。」と鼻頭で笑つて、「其尻拭をしると云つて、今の男が遣つて来たんだが奴高利でも貸してゐると見えて、安と金を貸したがる處が如何も變なんだ。話の要領は畢竟其處いらなんだらうが、其奴を厭に人情に絡せて、僕の名譽と云ふ事を連りに加護立てするのだ。けれども此方は義理も人

情も考へてゐる必要はないので……」

「何如して……？」と漣子は底意地の悪さうな調子で。

「何如して……」

「放抛つておけば監獄へ入るでせう。」

眞澄は顔中曇らしながらも、薄笑をして、

「それが何如したんだ？」

「不名譽ぢやありませんか。」

「不名譽と云や、不名譽かも知れないさ。」と少し周章きながら、「けれども親が罪惡を働いたからと言つて……其も親と云へば言ふもの、單に名義に過ぎないので、僕が責任を帯びる所縁は少しもないのだ。」

「なくても有つても、不名譽ぢやありませんか。」

「其が不名譽と云ふものなら、何如も爲方がないさ。」と眞澄は爲うことなしに笑つて、

「然しておくさ。少しも僕の累にならん。お前は又然云ふ事を氣にするのか。」

「誰だつて氣にせず居られやしませんわ。」と眉根をビリつかせて、「實に可恥いわ。貴

方は何ともないんですか。』

『まあ、ないね！』と眞澄はボンと煙管を叩いて、『誰も他を僕の父と思やせんもの。尤も女と云ふものは然云ふものか知らんが、お前は些と物事を氣に爲過ぎるよ。然云ふ事を言つてゐた日には、幾ど際限がない。お終にや首でも縊つて死ななけりやならん事になるよ。だから人は何如でも可い。自分さへ潔くしてをれば其で可いぢやないか。其ともお前は僕に如何かしると云ふのかね。』

『だつて如何も出来ないぢや有ませんか。』

『だから出来ないものを、いくら心配したつて爲方があるまい。那樣赤坊のやうな事を言つて……お前も餘程愚癡つばいね。』と少し憤れ氣味になつて、『何時迄もそんな事を言つてゐるなら、勝手にするが可い。僕はもう相手にせん。』と倦いて黙つてゐる妻の顔を覗込むと、何か可憐いのか、目に涙を持つてゐる様子なので、憫れて口を噤んで了ふ。と漣子はふいと起て次の間へ入つて了ふ。大方顔でも直しに行つたのであらうと、少時待つて見たが出て来る氣色もないので、『もう今日はお休めか。』と聲かけて見る。『切望もう。私は用事が出来ましたから。』

『何を言つてゐるのだ。』と獨て髯を撈りながら、『徐々お株が始まつたね。一體何が不平なんだ。え、未だ解らんのか。』

『い、え、其事ぢやないんです。』とぐつと澄して、何か手廻を入れた信玄袋を提げて入口へ現れながら、『私少し心配な事がありますから……』

莫迦々々しくなつて、黙つて少時見てゐたが、それでも氣になるので、『お前の用事なら丁と解つてゐる。まわ阿母さんにも、滋野さんにも聞いて御覽なさい。必然嘘はれるから。』

『い、え、』と入口を揃へながら、『決して那樣軽い事ぢやありませんわ。私ばかりか、亡父の不名譽にもなる事です。第一結婚前の妹の將來にも障るのですから……』

『は、そんな、お前に立派な見識があつたのかね。いや、些とも知らなかつた。ぢやまわ爲方がない、離婚でもするよ。』と此もついと起つて、二階へ上る。

『豊、豊！』と業々しく女中を呼んで、『お、可厭だ、私やもう這度宅に居やしないよ。』と呟きながら玄關口へ出て行く。

腕車で途中まで乗出して見ると、扱急に自分の懐胎な事に気が着く。加之根岸へ行つた處で、母は那通り氣樂な人だから、自分の言ふ事など逆も取上げてくれさうもない。妹は妹で平生から眞澄眞負なのだから、自分の主張の根據の薄弱なところを附込んで、輕卒とか何とか言つて非すに決つてゐる。けれど那人達は那の人達、此方は菱沼の總領……母の便誼上、父の意志で妹に迹は譲つたにしても……那程名譽なる公生涯を續けた父の家名に少しでも瑕を着けるのは、心に染まぬ結婚から起つた不幸を忍ぶ苦痛よりも遙に辛い。と理窟をつければ左に右立派につくので……然るると可厭々々で通して來た長い月日に觀察し得た所天の非點ばかりが胸に浮んで、此先如何しても希望のない縁のやうに思はれて了ふ。すると何時もの癖で、戀もなければ生活の榮耀も名譽もない淋しい家庭に葬られてゐた此一二年の月日が莫迦に惜くて、何だか可憐くて堪らなくなつて來る。

我家の門前まで來ると、其處に供待をしてゐる綺麗な腕車が一臺目に着いた、黒鴨仕立の屈強な車夫が二人、一人は蹴込に一人は棍棒に腰を据ゑてゐるが、昔の菱沼なら知らず

今の閑寂とした門前に這度腕車の駐るのは、恐く滅多にないので、不圖「松尾さんが來てゐるのぢやないか知ら」と思着くと、もう胸が動悸ついて顔まで紅くなる。格子戸を靜と開けて氣勢を候ふと、玄關の直横の客室から洩れて來る些と重い調子の談聲は果して松尾其人で。漣子は何とはなし少時其に耳を澄して、旋て壺所の方から茶の間へ出て、奥の四疊半を窺くと、例の中學生の机の傍に、滋野が一人本を見てゐた。

漣子はソハ／＼して碌々挨拶も爲さず、傍に直り坐つて、「何如して！え、松尾さんが來てゐて？」と目の色まで變へてゐる。

滋野は落着いた顔で私と本を机の上に伏せて、「え、然うですよ。」と姉の顔を見入る。

「何か用事があつて？眞澄の父親の事ぢやなくて？」

「え然う。姉さん貴方ももう知つてゐて？」

「其事で私喧嘩して出て來たわ。」と何だか生々した顔をして、「其でなくとも到底駄目なんですもの。其を我慢に我慢して今日まで居たんですけれど……。」と言かけてふつと拍子脱がする。

「又はじまつた！」と滋野は別に取合はうともせず、唯マジ／＼姉の顔を見てゐる。

此時母の聲として滋野を呼ぶので、滋野は客間へと起つて行つたが、旋て復つて來ると一層眞面目になつて、『姉さん彼方へ入らつしやいな。松尾さんが何かお話があるさうですから。』

『可厭ですよ滋野さん』と漣子は故とらしい意地張な調子で言つて、其辯耳朶まで赤くして俛いてゐる。滋野は別に強ひやうとも爲ない。

良久あつて、『漣さん……些と此方へ來ては何如ですぬ？』と母親の聲が懸つたので、漣子は何かブツ／＼言ひながら、茶の間の襖の片蔭へ身を寄せて、妙に嬌態を作つて私と中を覗くと、床柱を背後にして坐つてゐる松尾が不意と見上げる目と直り出會つた。無論結婚の約が破棄されてから、些と一度顔を合した事もあつたが、雙方とも結婚してから會ふのは今が初めなので。松尾は父の友達の甥に當る男で、父は國で士族の零落した薄給官吏だと云ふ。松尾は其三男で、上京當時から在學保證や、多少學資の補助など仰いだ事もあつて、其間に何時か漣子と結婚の約が成立つたのであるが、學校を出た時の成績の素破らしい出來であつたのは勿論、間もなく留學を命ぜられて、歸朝の後外務省の參事官を拜命してからも、前途大した有望と云ふ程でない迄も、事務にかけては左に右抜目のない方

なので、官省に於ける位置以上、メキ／＼名聲を高めて來た。婚約を破棄した動機も大概解つてゐるが、菱沼の感情は、其がために少しも害されてゐない。殊に郷黨では非常に評判の好い男なので、這塵事で表面彼を非難しやうと云ふ物數寄は幾ど一人もない。

漣子の來た氣勢に、母親は振向いて些と身を退らし、座を明けて、『さあお前も此方へお入り。』と笑顔になる。

『は。』と言つて漣子は極悪さうに其處へ膝行出る。而して松尾に挨拶すると、松尾は今氣が着いたやうに、少し周章してお叩頭する。後は又澄したもので、ピンと撥ねた口髭を拂りながら、ジロリ／＼漣子を見る。

母親は傍にある何か大なる奉書の包に些と觸つて、『這塵物を下すつたよ、お前と滋野に……お禮を申して下さい。』

『何ですか、どうも恐入ります。』

『いや何……』と松尾は見向きもせず自分で笑つて、少し反身に成り、『如何ですか此頃は些とも世帯染みないやうぢや有ませんかね。』と平氣で言つて、『何ですか、矢張其の句は……』緑川さんは學校ですか。』颯と後から香水の芬々する手帕を取出して鼻から口を

拭く。色は黒いが、目のパッチリした、優しい鼻容の、孰かと云へば小艇の男である。

母親が引取つて、「は、相變らずでございますよ。でもね、此節は方々から口が懸りまして、誠に忙しいさうで……。」と世辭笑をして、「まあ、何より人物がもう眞面目一方でござりますから、私も寔に安心でございます。其代り餘り才の働く方ぢやないんださうで……。」

「いや、學者はもう俗才のないに限るですよ。」

「加之、漣が少し我儘な方なものですからね。」と些と漣子の顔を見て、「偶然したら向かないのぢやなかつたかと思ひますけれど……。」何矢張ね、元木に優る裏木なしとか云ひまして、若いうちと云ふものは、左右自分の分が解らないものですから……。」貴方がらでも、切望能く言つて聽してやつて下さらまし。」

松尾はニヤ／＼と二人の顔を見比べてゐる。

少時経つてから、「いや、お目に懸つたのが丁度幸ですが、緑川さんの御父さんの一件……。今もお話してゐるのですが、他や如何かならんですか。御父さんにしてもお氣毒でもありませんし……。然し、其とも放抛つてお置になるのなら、其は已ひを得んです

が、創立委員の方でも實は手甲擦つてゐるやうです。何しろ瓢箪蛇のやうな人間で……。

「いや然う言つちや失禮ですが、實際那麽親をお持ちになつた緑川學士はお氣毒なものですな。如何です漣さん、貴方から然う言つて、何に半額でも若くは三分の一でも——殘額は先わ我々が如何にか穴を埋めるとして、左に右内濟と云ふ事になすつては如何です。假令間接にもせよ恚して知らぬ間でもないものですから、緑川さんに其意志があるなら、何に、私も骨を折る意ですが……。」と此まで言つて相手の氣の無顏色に氣が着くと、急に目を丸くして、「漣さんも御存なんでせうな此一件は……。」

漣子は何か他の事でも考へて居たらしく、此時俄にハツとして、松尾の顔を見ると軽くなつて、「は、少しは存じてをります。」

母親は沈んだ調子で、「お前、松尾さんも其災難にお罹なすつた一人ですとさ。寄附金を持つて行かれてお仕舞なすつたんですとさ。」と顔を顰める。

「ですから……。」と漣子は冷笑つて、「私言はない事ぢやないんですわ。外聞が悪くて、私他人さまに面も合せられないわ。」

「と云つても、元と／＼親であつて無いやうなものですからね……。」と言かけやうと

すると、

「お母さんは那樣事仰やつたつて、世間ぢや然うは思やしませんわ。那の人ばかり獨で、可厭に理窟を言つてゐて、如何云ふ氣なんでしょうか私には薩張解せんもの」と意地々々した調子で言つて、張のない目でちよいと松尾の顔を見る。

遣込められて母親は何にも言はず、吸子に湯を注して獨で飲みはじめ。

松尾は聞いて聞かぬ振をして、「其て何如云ふ御意齋ですか、徹頭徹尾介意はんと仰るんですか。」

「然う云ふんでございます。」と漣子はもう妻と云ふ氣はないので、平氣で答へる。「何分一酷ものですから、實に困つて丁ひます。他が學者氣質とでも云ふんでせうけれど、那慶學者氣質は私御免蒙りたうございますわ。」

松尾は憫れたやうな目容をしたが、自體こんな女だ、とでも思つたらしく、直に傍の調子に復つて、

「これは何方へ同情すべきですかな。」と心持肩を揺つて氣取つた笑方をする。

少時してから、「それで緑川さんは、先御關係なさらんと云ふ譯ですか。」と訊いたが、漣

子はもう那樣事は面倒臭いと云ふ顔で黙つてゐるので、

「然云ふ事なら已むを得んですが、然し現在の御父さんを看々繩つきにすると云ふのも些と何だか不穩當のやうですから、貴方お歸になつたら、尙一應能く御相談なすつたら何如です、内濟で治まる事ならば、私も不及ながら御盡力はする意で居ますから。お互に愚云ふ事で自分の品格を落すなどは餘り感服しませんからな。」

「え、それは然です。」漣子は浮の空に聞いて氣の無い返辭をする。「ですけど私は別に……。もう何如でも可いんでせうよ。何せ品格は落ちてゐるのでございますから。……私なぞ些とも知らなかつたのでございます。父親のすることすら知りませんでしたから、眞實寐耳に水なんでございます。」

「其は然でせうけれど……。」と松尾は目をパチつかせて、「お氣遣はお氣遣ですけれど、左に右如彼して立派な肩書も名前もある方ですから、自衛策としても、多少御心配になつても可からうかと思ふですが……失禮ですが、漣さんにした處で、餘り名譽でありませぬいから……。」と笑ひながら言ふ。

漣子は可悔さな怨めしさうな顔をして、「ですから、もう……。」と妙に身悶をし

て、「私、是迄眞澄に欺かれてをつたのでござります、眞實然うなんでもござります。」

「何です、ね、漣さん……。」と母親は宥めるやうに呟いて、獨り紛すやうに笑つて、「これの申すことは、何が何ですか……もう一向取留がありませんで。」

「え、然うですとも……。」と漣子も獨り呟いて、「阿母さんは然う仰るけれど、現に慥云ふ事が持上つて、松尾さんにまで御迷惑かけてるぢやありませんか、阿母さんは、那樣事平氣で在しやるんですけれど、私眞實に可憐くつて……。」と聲を顫はす。

「平氣でもありませんけれど……。」と母親は逆はず、「松尾さんはお前方二人の爲を思つて折角如彼言つて下さるのに、お前は何が何だか……。」

「だつて眞澄が何如しやうと、私の知つた事ぢやありませんもの。」と冷かな笑ひを見せて、

「那樣事まで心配しちや堪りませぬわ。」

「まあ人様の前で……。」と母はもう取合ぬ。

漣子も少し言過ぎたと氣が着いて、急に伏目になつたが、ちよいと流石で松尾の方を見ている。

「何だか、御事情が能く解らんですが……。」と松尾は悦けた顔をして、「お互に金錢上の事は可厭ですな。親子でも夫婦でも此の爲には仲達する事も珍らしくないですから……。」と理の解らぬ事を言つて、「世の中は面倒くさいものと決つてゐるのです。」と些と金時計を引張出して見る。

「いや、是は反つて失禮を申しました。格別然云ふ意もなくて、唯單に私の意志として……。」と歸支度の、蒲團を退る。

「まあ宜しいでは有ませんか。」

「又何ひます。」と松尾はお叩頭をする。

「然ですか、失禮致しましたね。今の事は尙眞澄にも言聞せまして……。」

「いや、それも何だか反つて御迷惑のやうですから……然し其も御都合で……。」と曖昧な挨拶をして、「申すまでもなく、其位の事は充分心得てお在になるでせうから」と二人の顔を見比べて、もう一度お叩頭をして衝と身を起す。

何か酷くまご／＼して漣子が後へ身を退くと、松尾は妙に叮嚀に腰を屈めて其前を通つて立關へ出ると、上櫃に腰かけて靴を穿きかける。

「阿母さん些とお遊びに入つしやい。」と愛相らしく、「妻も一度伺ふべき筈ですが、何だか始終交際社會へ引張出されてばかりをりまして……何も我々書生には矢張餘り貴族的でない方が可いやうです。」と言つて、漸く帽子を取つて起上る。で、滋野も母親の後へ來てゐるのに氣が着くと、其にも叮嚀にお叩頭をして、急いで格子の外へ出た。

松尾が腕車に乗るのを見澄してから、滋野が真先に客室へ戻つて、續いて漣子母親も入つて來る。

「さあ漣子さん一つお摘み。」と母親は越の笑か何か始末して少しばかり盛つた古い菓子鉢の盆と漣子の前に出してから、較苦い顔をして、「漣さんは今日は何故客の前で、那麼妙な事ばかりお言でしたらうね。彼ぢや全然松尾さんに眞澄の悪口を言ひに來たやうだね。」漣子は酷く胸に徹へたらしく、急に照れた氣味はありながらも、自分で自分を紛すやうに、「介意やしませんわ。」と言つて故と脹れてゐる。

「それは介意しませんがね、」と母親は苦笑して、「他ぢや所天の仙券を落すばかりか、自分だつて餘り伶俐だと云つて讀められは爲ますまい。此からね少し氣をお着けなさいよ。……其も他の人なら可いけれど、松尾さんには些と自分で體裁を飾る氣もあり

さうなものだのに……。」

「體裁も外聞もあつたものぢや有ませんわ。」と漣子は少し語調が激しくなつて、「もう何も彼も、此方より前、向へ知れてゐるんですもの。」

「知れたつて何も然ら此方の肩身が窄いやうな事ぢやありません。松尾にした處で、那樣事だ此方を見割るやうな莫迦でもありませんよ。」と此一語に例にない威嚴を持たせて言つたが、忽ち其張が抜けると獨語のやうに、「松尾だつて然です。親であつて親でないやうな事情も知つてゐるでせうに、餘計なお世話と云ふものぢやありませんか。」

「さあ阿母さん可いわ。」と滋野は宥めて、「那だつて親切で言つてくれるんですから。」

「然う〜、親切な男ですからね……。」と寧ろ漣子に言つて聽すやうに、可笑しくらゐる高調子で言ふ。

「でも姉さんへの分疏に這物持つて來るんですからね。何でせう、是？」と滋野は無邪氣に奉書包の目方を引いてゐる。

首を傾げて、「無論帶地ね。」

漣子は嫣然して、些と手に取つて側から覗きながら、「博多……片側二本振。」と

包紙を半分剥いて鬱金木綿をも覗つて、「オリーブと、茶ね。」と滋野に持上げて見せると、「貴方孰が好くて？」

「孰でも可いわ。」と滋野は然程にも恭悦がつてゐる。

母親は矢張何處か不興の氣味で、「もう、貰ふまいと思ひましたけれどね……。」と何爲か聲が沈む。

良久あつて、「如才のない人は、何如しても出世をしますね。」

蓮子は其を又莫迦に嬉さうに、「眞實ね。眞澄とは全然比較物になぞなりやしませんわ。眞實に客番家よ眞澄は。」と綺麗な眉根を故とらしいほど顰めて見せる。

が、誰も返辭をせぬので少し急込んで、「そりや眞實に客よ。私わんな宅にのちや、一生面白い事なんぞ有やしないわ。子供など出来たら甚座だらうと思つて……。」

「姉さんは那麽事はつかし……。」と滋野は軽く嘲笑つて、「餘り那麽事仰るなよ。」

「また滋野さんの眞澄最負が始まつたわ。私眞澄を讀める人の氣が知れないの。」

「讀めやしませんけれど。」と滋野は其程躍起とも見えぬが、姉に見据ゑた目は幾許か輝いて、「ですけれど、人には皆な夫々の人格があるのですから……だから姉さんも些と

旨よ。自分の所天の美點を見着ないのは少し旨よ。感情家だから……。」と笑ふ。

「だつて私眞澄の人格を疑ふのよ。」

「何如疑つて？」

「だつて如何せ那麽親の子ですもの。」と頭をなしに罵つて、「あれが何處に美點があるてせう百年一緒に居たからと云つて、私眞澄と仲好くなる氣遣ないと思ふわ。」

「それは頭から可けないと決めて了へば、何だつて好いものは有やしませんわ。加之姉さんは、理想々々つて安に好い事はかり求めやうとなさるのは、第一悪いわ。」

「でも何如しても、可けない者は可けませんです。ですからお終は私何如しても別れるてせうと思ふんです。」と獨り思込んで言たが、滋野はもう相手にせず、母親も素知らぬ顔で帶地を取擧げて一心に眺めてゐるので、例の又自分ばかり焦燥して、………到頭決心したと云ふ顔で、

「阿母さん、私當分宅に置いて戴きたうござります。」と聲は何處か逆上つてゐる。

或日の晩方、滋野が廣小路まで用達に出た序に、思着いて黒門町の芳雄の宿を訪ねて見た時の事。今でも此か知ら、其とも何處かへ變つたのぢやないか知らんと、不圖然云ふやうな氣がして、私と入つて見ると、帳場にはどろりとした身装をした例の娘が、茶の洋服を着た金縁眼鏡の綺麗な若い男を相手に、面白さうに笑談を言合つてゐたが、其方へ寄つて、芳雄の事を聞いて見ると、娘は怪訝さうに此方の様子を熱視してから、少し間の脱けた時分に、

「あの方はもう宅にや居ないんですよ。」と返辭をする。

其で何處へ行つたか御存ならば……と訊いて見ると、娘はぐつと馴々しい調子になつて、其行先を詳しく、地圖を引かぬばかりに、其から其へと説明して教へてくれた。何如して然らう詳しく知つて居るのか知らと思ふくらゐ詳しいので、滋野は些と變に思つて、

「其で近頃は何如云ふ様子なのでせうか。」と訊いて見た。

「さあ。」と娘は逆様に滋野の顔から、何かを嗅出さうとするやうな目色でめつた。

「何だか解りやしませんよ。」と外方を向いて「唯自炊するとか言つてね。宅は私んとこで知つてる人の二階を假りて居るんですがね。」と少し考へて、貴方は小石川の御親類で在しやるんですか。」

「いゝえ、然ぢやないんですけれど……。」と滋野は好い加減に待つて、町噂に禮を言つて其處を出た。

行かうか行くまいかと、表へ出てから四角で少時思案して居たが、わざわざ其處迄尋ねて行く程の口實があるでもないのに氣が着いて、先方だつて報してくれもしないのに……とさつさと左の方へ道を急がうとしたが、又急に芳雄の事が心配になつて、上野で別れた時の事など憶出して速に尋ねて見る氣になつた。

教へられた通り一旦五軒町の通へ出てから一町ばかり行いて、大な葉茶屋の裏を路次へ入ると、奥の窪つたみ見たやうな中にごちやくと幾軒かの家がある、其の水道栓から二軒目の二階家が其なので、私と格子戸を開けると、直其處の障子に大な丸鬚の首が映つてゐる、内では今晚飯が始まつて居るらしい。丸鬚の神さんは直に障子を開けて顔を出したが、其顔は赭んで肥つてこそゐるが、何處やら黒門町の宿の亭主に肖た眉目鼻つまで、誰

が見ても妹だと解る。芳雄が居たと見えて、神さんは尻軽に起つて段階子を三段上つて、
「縁川さん、誰方か……」と聲かけて、後は知らん顔して、長火鉢の傍へ行つて職人
風の亭主と差向に坐る。火鉢の鍋には何かジイ〜煮立つて、連りに味噌の匂がしてゐる。
段階子を降りて来た芳雄は、怪訝さうに上口へ出て来たが、其處に小くなつて滋野が立
つてゐるのを見ると、吃驚して「ま、誰かと思つたら……まのお上り下りさ。」
「は、」と滋野は腰を屈めて「あの、別に御用と云ふ譯ぢやなかつたんですけれど、何如
なすつたかと思つて……上つてもお邪魔ぢやないんですか。」
「汚いですけれど……」と芳雄は先に立つて上へ上る。

滋野は主に挨拶してから静に二階へ上つて来た。部屋は六疊で、上は蜘蛛の巣だらけの
所謂屋根裏である。二方窓になつてゐて、腰壁は孰も高いから陰氣くさいが、隅の方の小
机の上に三分心のランプが點されてゐる、壁に襦袢や股引や袴が懸つて居る。芳雄は少し
狼狽へた氣味で、散かつた新聞や茶道具や鍋や椀やを片隅へ押遣りながら、凹凸の湯沸の
かゝつた汚い火鉢の前に坐つて、
「よく解りましたね。」

「は、宿で詳しく教はつて来ましたから……」と嫣然して前の方へ膝行出て「お一人限？」

「然です……もう當分飯さへ喰つて行きや可いんですから、贅澤は言はんことにして、這處處へ立籠つたんですけれど……」
「結構ですわ。」と言つたが、ざら〜した埃だらけの破盃が、餘り坐心地が好くないので、何だかぞ〜くしてゐる。

其で何如して此へ引越したかと訊くと、芳雄は包隠さず事情を話した。其言ふところでは、彼から五日間、父の眞吾は宿にゐろ〜してゐて、自暴酒を呷つては蒲團を被つて寐てゐたが、一昨々日の晩方角袖の刑事が来て到頭警察へ引張つて行つて了つた。那樣父でも親は親であるから、何如にか出来るものなら爲てやりたかつたけれど、那樣力もなく唯傍觀してゐた。眞吾はもう覺悟をして居たらしく、芳雄に色々後の事を言置いて、自分はもう何せ日の暮れたやうな一生であるから、是に撓まず勉強しろと、其處にあつた銚子の冷酒を呷つて、芳雄にも一つ別杯を置いて引れて行つた。警察では一日か二日居たやうだが、會つたところで爲様がないから其限會はんと云ふので……そんな事で遽に宿にも

居られなくなつて途方に暮れてゐたが、宿の娘が妙な女で、牛乳配達の得意を十四五軒ばかり自分で周旋してくれて、乳を受けて来る處迄世話してくれたから、當分朝晩で三升弱の乳を配達して、案外の収入があると云ふ事まで話した。其で、東京は意つたより、勉強も爲易ければ、生活も樂な處だと言つて、田舎で是だけの収入を得るには、非常な勞働をしなければならぬ事を語つて、其點では然程羨むてゐないが、是からそろ／＼寒空に向つて年取つた父親の獄中生活は堪へない、などと坐に暗涙を催してゐた。

滋野も他人のやうな氣はせぬので、心から同情の念に打れて少時は唯話を聞くばかりであつた。

良久あつて、「それで廣谷さんへは別に御相談なさらないんですね？」

「廣谷は、何時でも宅へ来いと云つてくれるのですけれど、兄と友人ですから、兄が氣拙く思ふでせうから、其よりか此方が反つて暢然と勉強が出来るやうです。」

「其も然うね。」

「加之兄は苦學反對ですけれど、僕は別に、學校を出て月給取にならなければならぬと云ふのぢやないんですから、官立學校へ入る必要はなし、然かと言つて、大した専門の學者

になる希望もないんですから、苦學其物が、もう立派な趣味ある一科の學問と信じてゐるのです。愚父が拘引されてから、僕は痛切に那樣事を感じるので、こんな逆境に居るのが、少しも苦痛にならんです。親が何如の兄が恚のと云ふ恐癡を言つてゐるのは實に下らん事だと思ひまして……」と何か連に一人で愉快がつてゐる。

滋野は必ずしも然とも思はぬのみか、勉強盛の若い者が、其日々々の生活問題などで、苦勞して頭腦を使つては、意志は多少強硬にもならうし、世のなかの味を嘗める機會はあらうが、本を讀んだり、學者の説を聞く便誼が少いだけに、大に發展する途はあるまいと思ひながらも、差當り他に方法もないのに芳雄の勇氣を挫くのも悪いと思つて、唯贊成の意を述べておくのみであつた。

先刻から連に氣にしてゐた湯が此時漸く沸つて來たので、芳雄は番茶を煎れて茶碗に注ぎながら、「今日も實は晩のを配達して今歸つたばかりの處です。……何に、然程億れやしませんよ。」

「然ですか、然して愉快にやつて在れば寔に結構ですけれど、」と滋野は茶を一口飲んで下において、「でも矢張不自由な事もお有でせうし、生身のことですから、氣分の悪い事

もありませうからね、那樣場合には何なりと……私共は女ばかりですけれど、少し位のお金ぐらゐるは何如にもなりますから。」と伏目勝に言つて、「誰しも此お金の事から、何かの錯誤があるんですから……。」

何か意味のありさうな一言と思つて、芳雄は目を睨つたが、別に聴れしもしなかつた。

少時経てから、滋野は少し紅い顔をして、「宿のあの娘さん……。」と云ふのは、那樣親切な方なんでしょうか。」

自分ながら妙な質問と思つたが、然し此だけの事は是非訊く必要があると信じて、熱心に芳雄の顔を成ると、芳雄も目を耀かして「別に然でもないでせうが、然し萬更解らん女でもないやうです。」

「それは然てせうね。」と滋野は氣の無い顔をして、「ですけれど、何だか那云ふ人は真逆に口が巧いのね。何處を押せば那處事が言へるかと思ふくらゐ。商賈が商賈だけに人招がしてゐるんでせうよ。」と非すのか讀めるのか解らぬ事を言つて、「あの人は素人ぢやないんでせう。何だかいけ好かない厭味な人……。」と少しは溜飲が下がつたやうに嫣然する。

「無論然です。」と芳雄は浮かぬ顔で、「然し那の境遇を知つて居ると實際氣毒な點もあるやうです。」

「何如云ふ境遇ですの？」

「別に何如と云つて詳しいことは知りませんが、畢竟親が不心得のために人身賣買をやつて、何も知ぬうちから墮落させられたのでせう。」と鼻の頭で些と笑つて滋野の顔を見る。

「然うでせう。」と滋野は些か顔を顰めて、「だから厭ですな。餘り交際なんか爲さるなよ、そんな不潔な人と……。」

「交際する意もありませんでしたが、愚父が拘引された晩、有繋に僕も萎れて、氣が滅入つて不愉快で堪らなかつた處へ、那の女がやつて来て慰めるんだか冷かすんだか、解らないが、左に右僕の意氣地のない事を笑つたのは事實です。夫からよと此へ世話してくれましたが、其を斷る理由もないからと思つて……他でも其相當に得意もあれば樂觀もあると見えて、吾々が考へるほど不幸でもないんでせう。生活に不自由しないだけに、別に捻曲れた、惡氣もないから不思議です。」

「然うでせうかね。」と滋野は苦笑して、「其なら可いんですけれど、那麽人でも世話にな

れば矢張其だけ恩に被なければならぬのですから……。」

「けれど人情然も行かんですから。其人は賤しいか知らんけれど、此方さへ潔白なら……」

……然し何か輕蔑したやうな事でも言ひましたか。」と反問する。

「さ、え、」と滋野は少し周章いて、「決して然ぢやないんですけれど……。」と軽くなつて僞く。

「だから何如でも可いぢやありませんか。」と芳雄は投出すやうに言つて、「問題にする程の女ぢやないのです。」と仰いて、高い窓から空を見遣つた。

「ですから別に……。」と滋野ももう其事を棄て、了つて口を嚙むと、後は湯の沸る音ばかりで、部屋の陰氣で窮窟な事が遠に氣になつて来る。と看ると、芳雄は父の事でも考出したのか、今迄の元氣は迹方もなく消えて、急に不愉快さうに顔を曇まして、深い思に沈んで了つたので、滋野は徐々暇を告げさうに衣紋など繕つて其拍子に、「ちつと其處いらを散歩でもしませうか……。」貴方這座部屋に閉籠つてばかり居て氣の塞るやうな事はなくつて？」

「は、けれど爲方がないです。」と淋い笑ひ方をして、「父の事を考へれば不平も言へん

です。」

「然ういへば、御父さんは、もう何如もならないのでせうか。」

「もう所詮駄目でせう。僕も自分の力に及ばん事と断念めてゐますから、別に尋ねて見もしませんし、……。」又顔を合せば氣毒で堪りませんから、故と放抛つて置くのですけれど、考へると餘り好い氣持も爲ないのですよ。」

「然てせうとも。兄さんと違つて、貴方は立派な父子で在やるのですから。」

「いや、餘り立派でもありませんよ。僕も始終其を言つちや慈父を責めるのですけれど、責められて痛痒を感じるやうな人間ぢやありませんから、此方が念頭に置くだけ莫逆で居る位のもんです。と言つて、這座事になると、又氣毒と云ふ念も起りますから、其爲につい頭腦が亂れて、何だか寂寞の感に堪へん事もあるのです。寧ろ全然親も兄もない方が遙かに優のやうです。」

滋野は唯頷いたばかりで、別に慰藉の辭も見出さなかつた。

少時するとミシリ／＼と階子の軋る音なので、誰かと思つて二人とも上口へ目を配ると、間もなく私と綺麗な首を出したのは例の宿の娘である。

滋野は「無様な………」と言ふ顔であつたが、愛相笑だか冷笑だか解らぬ笑を口元に浮べて芳雄の顔を見る。女も胡散嗅さうに二人の顔を見比べて、借溢れるやうな愛嬌を目元に漾はして、

「大變聞寂ね………」

滋野は先刻の禮も言はず、彼女にしては希らしい澄し方をしたが、ふと取つて来て附けたやうに、「お上りなさいまし。」と少し座を開く。

女は其には唯「は」と言つたきりで、芳雄に「些とは馴れて来て？何如にか勤まりさうなの？」と馴々しい口を利く。

「然う、別に骨の折れる事でもないから。」

「そんなら可いわ。御父さんから別に何とも言つて来なくて？」

「何とも………」

「然う。ぢやもう往生して送られて了つたんでせうよ。那麽御父さんの事なんか、何時迄思つたつて爲様がありやしない放抛つとさなさいよ。」と又一段踏上げて「何處の親でも、何如して恁子にばかり心配かけんるだらう。宅の没分曉漢も没分曉漢だけれど、お前さんとこのも随分ね。好い年を仕つて私呆れて了つたわ。」

滋野がクスリと笑出した。

「眞實でさね、」と女は獨で調子に乗つて、「わんな親と縁切つてお了ひなさいよ。親があるから誰でも難儀するんぢやありませんかね。」

「ふ。」と芳雄も笑出す。

「私も今宅の没分曉漢と喧嘩して来たわ。」

「又………」と芳雄は目を睨る。

「だつて宅は年中喧嘩よ。若い男と口さへ利けや、那の没分曉漢はもう嫉くんだもの。此方だつて血の通つてる人間なもの、那様業は出来やしないわ。ふん、誰のお蔭でお飯食べてると思つてるんだ。柔順しくしてわりや、附上つて爲様がない。」と憤々するかと思ふと

急に低い聲で、「些と寄席でも交際はなくて、え？ 歸りにお美しいお壽司を奢るからや。」

「寄席なんぞ僕にや……。」と芳雄は薄笑してゐる。

「何です那樣お上品ぶつて、牛乳配達してゐる癖に……。」と輕蔑して、優しい聲で、

「ちよいとお嬢さん、貴方もおいなさいましな。」

と言つたが、二人とも堅くなつて相手にせぬので、「さあ御寛り……。」と言つて顔を引込める。

大分経つてから芳雄は吐出すやうに、「手が着けられない。失敬しましたね。」

「い、え。」と滋野も憶出笑をして、「何時でもあんな調子の人？」

「何だか僕にや衣體が解らん。」

「當分此に居るんですつて？」

「然と見えませぬ。」

滋野は些と首を捻つて、細い溜息を洩したが、「貴方あんな人と一緒にゐて、其で善く……」

別に厭な氣もしなくて？ 何とも思つて在しやなくて？」

芳雄は苦笑して、「何爲ていす？」

滋野は愈よ首を捻つて、「然う！」と淋しい澄した笑方をして、芳雄の顔を見る。

「他は那限のものですもの。」

「然う。」と無意識に言て、「ぢや可いんですけれど……。」と未だ臍に落ちぬ顔をしてゐる。

「別に意味があつて言ふ事ぢやないんですもの。本の座興で……。」

「然う言や然ですけれど……。」と滋野は少し反抗の色を見せて、綺麗な眉を心持釣揚げて、

「恠う言つちや失禮ですけれど、矢張這處處は可かせせんかね。」

マシ／＼して、「それは何せ好はないです。けれど然云ふ贅澤も言つてゐられんから……。」

「私の杞憂か知れないけれど……無論然うでせうけれど……。」と滋野は逆に芳雄

の氣色を候つて、「ですけれど、貴方若しも、外に好い方法があつたら這處處に居なくとも可くて？」

「まあ然です。」

「ぢやね、私少し考へてる事があるんですけど……」と首を傾げて躊躇したが、思切つて、「其は、所詮兄さんの宅に同棲出来るやうに願つてみるんですけど、一面には私方からも幾何かづつお助をするよと云ふ事なんです貴方は那樣事は可厭ですか？」

「さあ、其は何如云ふんですか。兄の意嚮が今更變更すると云ふ望も無いやうですし……」

「ですから憚なんです。」と滋野は熱心の目を耀かしながら、始終笑顔を離さず「其よりか實は貴方の御意嚮が先決問題なんです。貴方さへお可厭でなければ、兄さんの方は然程難かしいことぢやないと思ひます。」とふと短兵急に、「貴方は養子などはお可厭ですか？」と芳雄の顔を見ると、案外平氣なので、

「尤も學資が出ると云ふ事だけで、好い方法とは言へませんが知りませんが、若し其れを御承諾して下さることが出来れば、三年のものは五年でも六年でも、學資だけは自由に續くことが出来やうかと思ひますの。」

「ぢや養子と云ふ條件附で、學資を何如かして下さると云ふ意味ですか。」

言はれて見ると、話が餘り露骨過るので、滋野の顔は急に嵐と紅くなる。而して少時は

唯わく／＼してゐる。

良久あつて、「養子と云ひましても、家族は唯私一人なのでございませす。母はもう、極の放任主義でございませすから、多少の希望はあるでせうけれど、其も唯私の一身の幸福とか安全とか云ふ範圍なんですから、所詮は私の心持一つ……。」と少し沈んだ調子になつて、「是迄にも實は種々其事で苦勞したのでございませす。ですけど、何如も安心して菱沼の家を譲ると云ふ心の確な人が見着からないものですから、もう私は獨身で居ても可いからと云ふんですけれど、其も何だか頼ないやうな氣もしますし、第一繼嗣問題と云ふ事も考へなければならませせんし、眞澄さんも其に就いて種々心配して下さるんですけれど私にも多少希望も有つたり何かしをして……」

途唯の一つも纏つた相談と云ふのがなすのでございませす。」

「如何云ふ御希望だか……。」と芳雄は宛然局外者のやうな口調で言ふ。

「別に如何と云つて深い考もないんですけれど、所詮まお父の名前を落さないやうな私

が是ならば一生涯を託しても悔はなからうと信する……。」と酷く堅くなる。

「ぢや、唯安全堅固な人間でさへあれば……？」然云ふんですか知ら。」と芳雄は奇問を

放つて、獨で考込む。

「然とも限りませぬわ。」と滋野は嫣然して、「何も道德堅固と云ふ意味ぢやありませんの、家庭が圓滿に行きさへすれば、他に深い望はないのです。」

「ぢや矢張家庭本位ですか。」

「其も程度問題ですけれど……」

強がち家庭に固着して、些も世の中へ活動しないやうなそんなやうな意味ぢやないんですけれど、所詮愛情が根本ですから……」

「ぢや、僕の將來の希望も御參酌の上ですか。」

「無論然うですわ。」

「人類社會に貢獻しやうと云ふやうな其もですか。」

「は」

此で話が途斷れて了ふ。

大分経つてから、「まかし然云ふ事を決めるのは何如ですか。考へものですか。」と考雄は如何にも大人振つた調子で、「貴方は然う考へてお在でか知らんけれど、婦人は矢張家庭と云ふものに立籠らなければ寄場所がないのですから、長い間には必然所天をも其方へ引着

けやうとする傾向を持つて来るだらうと思ふです。其も好いですが、家庭の眞趣味を解しないやうな人間は僕は絶対に嫌ひですけれど、其れが左右誤謬に陥り易い。兄などが矢張然云ふ傾向を持つてゐるので、如彼も牆壁を築いて、小さい家庭を世のなかの風波から安全にしやうと腕いてゐるのは、實に愚の極だと思ひます。加之僕など恚云ふ風の野人ですから、今のところ些と優美な家庭を作らうなどと云ふ考もありませんし、作つた處で、貴方や阿母さんに對して、始終氣毒の思をしてゐなければならぬ。那樣事は僕も苦痛ですから、まゝ可成なら、今から然云ふ責任を負つておかん方が可からうと云ふ考ですが……」

「其外のことならば、僕から進んでも……」

「と言差して、」まゝ僕には然云ふ問題は尙早いのでせう。」

餘り辭が過ぎはしなかつたかと氣が着いたが、然し尙何だか言足りないやうな心持で、少し身を反加減に、胸から胸へ何物かを語らんとするやうに矢張目を輝かしてゐる。

滋野は敢て失望した面持もなく、張のある目には何處か自信の色も見えて、屹と口を結んだなり、未だ鎖らぬ胸の動悸を、軽く手で抑へてゐる。其美しい顔は較蒼白めてゐた。良久あつて、些と身動をして、

「それならば餘儀ない事ですけれど……」と嘆れたやうな聲で言つて、「ちや、あの結婚と云ふ事も……？」

「結婚すれば家庭は如何しても作らなければならんでせう。」

「然とも限らないでせう。結婚しても、貴方の體だけは自由に、何の束縛もなく居られるでせう。」

「然云ふ方法があれば結構ですけれど、其も單に同棲しないと云ふ事位でせうから……又然ら責任を脱れると云ふのも考へものでせう。僕だつて始終落莫たる生活をして来たものですから、温かい家庭も一度は作つて見たいと云ふ希望は充分あるのです。其處に一家族の團樂が出来て、責任も出て来れば、或時は其の犠牲にもなる、那樣楽しい事はないのですから、何時か然云ふ時が来るとしても、其は餘程後へ寄つての事だらうと豫想してゐるのです。」

「其ならば、其時期まで、まあ待つとしたつて可いぢやありませんか。」

「然し其は何時来るか、或は来ないか、豫め解らんですから、……所詮家庭の趣味は解したいけれど、差當り未だ作つて見やうと云ふ考がないのですから、自分ながら餘程

勝手な言草なのです。」

「那樣事はありませういけれど、」と笑つて、「ぢや矢張、家庭や結婚に就いて、何か理想がお有なさるんでせう？」

「いや、誰しも其は有ませう。僕にも其は有るのです。然し其は難かしいことぢやないのです。」

「それを伺つて置かうではございませんか。」

「それですか。」と芳雄は目眩さうに俯いて、「それは御免蒙りませう。」

「何爲てでせう？私が失望するともお思なさるんでせうか、那樣御心配なら切望……と目と目をバチ／＼しながら、體に嬌態を作つて、「それな御心配なら眞實に切望……」と口元に笑を湛へて、「ですから切望聞かして下さいまし。是非伺ひたいんですから。」と何處か抑揚ふやうな、然し熱心な語調で訊ねる。

色が淺黒いから其とも氣着かぬが、芳雄も赧くなつたに違ない。而して妙に固くなつて、機械的にランプの灯を瞞めながら、果は唸るやうな聲を吞んで、術なさうな科であつた。其てふとした拍子に目を舉げると、女のびえびえした目は、少しの不安らしい色もなく、

熱と自分の顔に注がれてゐるので、其目と目がバッタリ行會ふと、突如、

「いづれ其れは言ふ時はあるでせう。けれど今は……」

「何時だつて可いぢや御坐いますせんか。」

「そんな事を、今急いで聞く必要もないでせう。」

「然うですか。」女は少し張が脱けて、「ぢや強ひて伺ひますまい。」と吻とした顔で髪の後毛を掻揚げながら伏目になる。

と思ふと、這度は衣紋を直して、膝にあつた手帕を袂へ收つて、急に更つた聲で「其は然と、もう何時でせう。」

芳雄は、「さあ……」と言つて、此も何かの熱が冷めたやうな顔をする。

「大層失禮なことばかり申して……」

「いや、僕こそ。……尚そんなに遅くはありますまい。何なら送りませう。」

「い、え、もう始終行かつけてゐる途ですから……」と不圖階下の氣勢に耳を澄して、

「わの方は矢張居るんでせうか。」

芳雄は「何如か知らん。」と云ふ目色でマシ／＼女の顔を覗めた。

滋野は嫣然して、「餘り長く居て、變に思はれても何ですから、もうお暇ませう。」と起ちさうに身を浮かしながら、急には起たず、手帕を二度も出したり入れたりして居たが、旋て挨拶して静に身を起すと、芳雄も起つて上口まで灯を持つて来る。

其時階下の時計が九時を撃つたので、滋野は降りがけに其を數へて、驚いたやうに急いで降りて了ふ。

外へ出ると、外の氣は可恐しく冷えて居た。其で胸のうちには色々の考が紛糾つてゐたけれど、足だけは捷く、何かに追かけられるやうにさつさと通へ出てからも重い頭腦を落着けやうともせず、儼然がちに側目もふらず行いた。

人通はもう大分疎になつてゐる。三橋まで来ると上野の深い木立が蒼い電燈の光を帯びて薄絹のやうな濃霧に包まれながら、美しく目に映つたので、初めて我に復つたが、速く其木立へ入らうとでもするか如く、矢張急足に行續ける。其時何處か其處らの確か西洋料理屋から出て来た一個の人影があつた。其洋服姿が何如にも眞澄らしうので、「おや！」と思つて思はず立停つたが、旋て其影を放さず傍へ寄つた。

影はつか／＼と電車の線路際へ進寄らうとしたが、何を思つたか急に四下を見廻して、何處へ行くとも決つてをらぬらしく、少時其處らを徘徊してゐたが、間が五六間になると、忽ち滋野の姿が目に入つたと見えて、大股に此方へ行いて来る。

びつたり顔を合はすと、「やあ、矢張然だつた。」と眞澄は呟いて、

「何處へ行つて来た？」

「私？」と滋野は少し周章いて、「私今些と芳雄さんのところ迄参つたんですけれど……」

「……」と笑顔を作る。

眞澄は不思議さうに其顔を覗めて、「芳雄の處へね？」と心持眉根を寄せる。

「貴方は何處？」と滋野は黠しい目を睜つた。

「僕かね？」と眞澄は急に俛いて、「僕は何……」と獨りて何か呟いたが、熱く見ると何うやら酒の氣を帯びてゐるらしい。

「大變にお涼しく成りましたことね。」と滋野は何となく空など見上げて呟くやうに言ふ。

「然うさね、もう涼しいどころぢやない、寒い位だ。」と眞澄も四下を見廻したが、「それで芳雄へは、何か用事でも……」

「い、え、然云ふ譯ぢやありませんでしたけれど、唯其後何如なすつたかと思つて……」

「さう！」と眞澄は鼻頭で返辭して、「此頃は何如してますね？」

「それがお氣毒なんです。」と滋野は相手の顔色を候ひながら、「牛乳配達なんか爲て……」

眞澄は些と目を瞬つたが、横向になつて、「はあ……。」と氣の無い返辭をする。

少時してから、「其位の事は可いでせう。當人にも藥になつて可い。」

「然てせうか。」と滋野は惘れる。

「あ、好い夜だな。」と眞澄はけろりとして、「何如です、池畔でも一ト廻りしませうか。」

「然うですね、晩くはないでせうか。」

眞澄は些と時計を出して見て、更に向の大時計を見遣つて、「丁度九時だね。」

「ぢや、餘り早くもないわ。」

「然うかね。けれど何うせ其方へ行くんだもの。何ならお宅の近傍まで送つても可いからかね。」

「それぢや寧ろその事宅まで入つしやいませんか。」

「然う……、行つても可いが……。」と些と考へて、「漣は此頃何如してゐますね？」

「姉ですか。」と滋野は先刻から可成漣子の噂を口に出さぬやうと氣を着けてゐたが、到頭眞澄から訊かれて爲う事なし、「相變らずですわ。實に困つて了ひますんです。」と沈んだ漣子で、「兄さんも嘸御不自由でせうに……何だつて那麼我儘を言ふんでせう。」

「ふん、爲方がないさ。」と眞澄は餘所事のやうに言つて、「わりや如彼云ふ女です。」

「眞實に爲様がないのね。其なら斷然歸らないのかと思ふと、強ち然云ふ決心でもなまざるなんです。」

「然うか知らん……。」

「い、え、其は然うなんですよ。」

「まあ何でも可い。此頃はもう、餘り漣の事は考へん事にしました。實際考へたつて爲様がないから、考へるだけ莫迦げてゐるから……。」

「眞實にね、姉さんも何如云ふ氣ですか……、ですけれど何時迄も、しても居られませぬわ其うちに氣が變るだらうと思ますから……。」

「然しまあ、そんな問題は放抛つて、左に右行かう。」と眞澄は熱心に促す。

眞澄の調子は何時とは餘程變つてゐた。同伴があつたらしくもないのに、夜更けて酒氣を帯びてゐるのも不思議なら、此處らを彷徨してゐるのも變だ。漣子が家を飛出してから滋野は氣毒がつて、二度も三度も眞澄を訪ねて、何かの用を達したり、寂寞を慰めたりするのであつたが、其都度眞澄は漣子に對する不平は泄さず、反つて深厚なる自分の愛情を

表白するくらゐであつたが、今夜はそんなやうな様子も見えぬ、必然何如かしてゐるのだと思ひながら、そろ／＼池畔の方へ一緒に行き出した。

眞澄は其行き様から少し變で、酔つてゐる故もあるだらうが、何となくフラ／＼してゐる。其で直り滋野に喰着いて行くかと思ふと、三尺も離れてさつさと先へ行つたり、酷く考込んで俛いてゐるかと思ふと、今度はさも愉快さうに大道狹しと濁歩しはじめる。

「貴方大變お酒に酔つて在しやるわ。」と滋野は瓢月の前まで來た時笑出した。

「あ、然う！」と眞澄も笑出して、「何時にないビールを一本と半分ばかり飲んだからね。」
「へえ、一本半も……。そんな事は滅多にありませんでしたのに、如何したと言ふんでせう。」

「何如したと云ふ譯でもないさ。」眞澄は又笑つて袴とばかり滋野に寄添つた。而して顔を見込むやうにして、「可笑いだらう、僕が酒飲ひなんて……。」

「いゝえ。」と滋野は矢張何處か探つたいやうな調子で。

眞澄は妙に沈んだ聲で、「是まで僕は酒なんか飲んで見た事はないけれど、飲んでみると矢張美しいね。是から、何か不愉快な時は酒を飲むに限る。」

「そんなにお美いんですかね。」

「悪くないね。」と眞澄は首を傾げて、「加之僕は是で案外酒が行けるんだと見える。飲んで／＼酔はんところが不思議ぢやないか。」

「矢張御父さまの子なんでせう。」

「は、然かも知れん。」と眞澄は別に氣にも懸けず、「尤も母は酒と云ふと生命が縮まるくらゐ厭がつたものです。其で何かの癖に一生涯を飲んぢや可けないと云ふことを善く僕に言聞したものだ、其が何時か頭腦へ沁込んでゐたものと見えて、僕は酒と云ふと敵か何ぞのやうに思つてゐた。然し其も些と偏屈な考へで、こんな心寂しい晩などには些と好いです。」

「然うですかね。」と氣無に言つて、「それで遠慮に遠い處までお出なすつて？」

「いや、上野へ散歩したから。」と眞澄は何か分疏らしく言つて、「それに宅の女と來たら、料理はカラッ下手なんだ、漣が行つてから……。」と低聲になつて、「どうも毎日の飯が不味い。何時も／＼刺身に牛肉ばかり押つけられるもんだから、もう鼻について……。」
偶に氣が利いた意でお汁か何か拵へてくれたりなぞするけれど、漣のやうな手際に、迎も